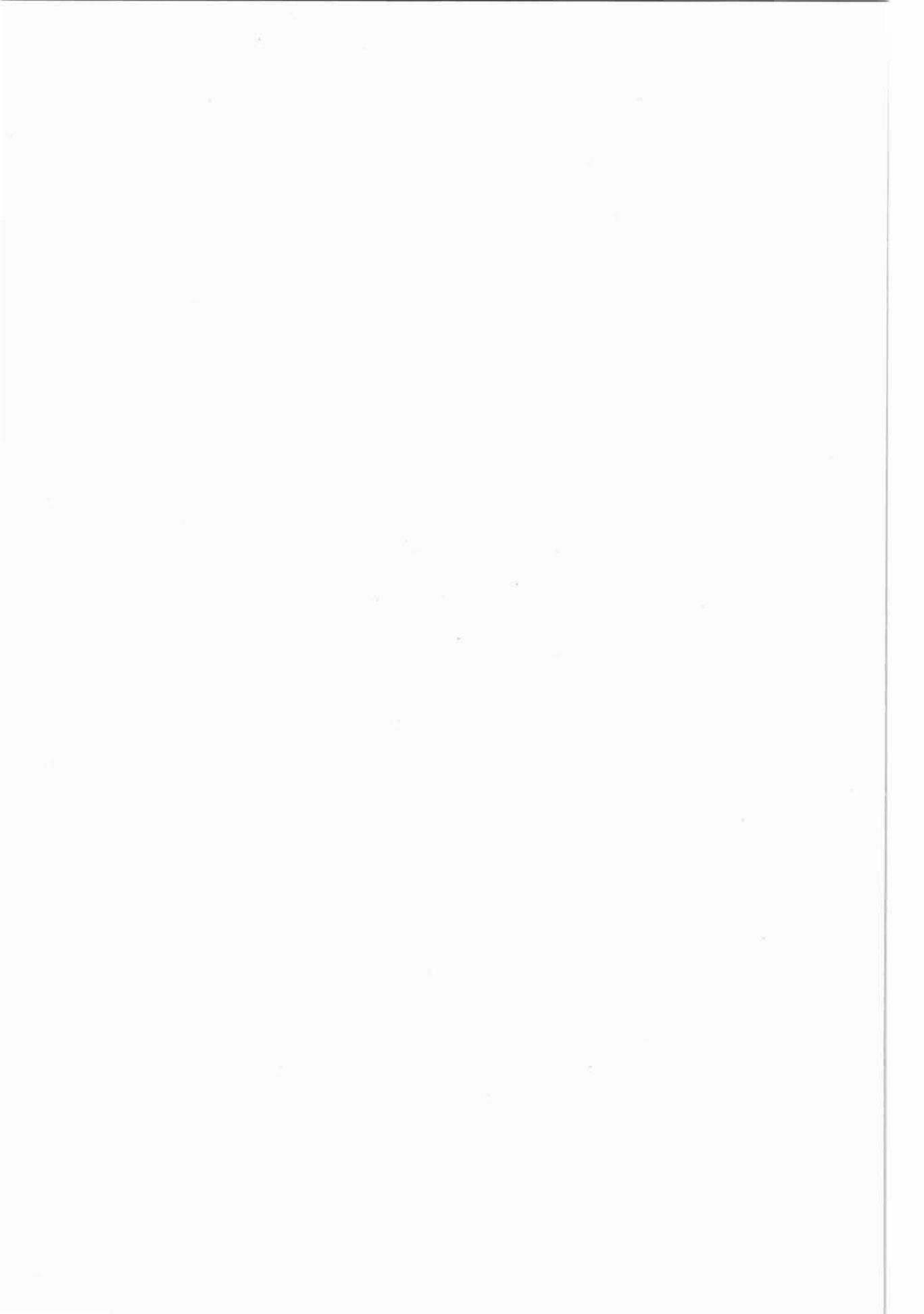


京都府遺跡調査概報

第 41 冊

1. 杉 末 遺 跡
2. 里 遺 跡
3. 塚 本 古 墳
4. 京大北部構内遺跡
5. 内里八丁遺跡

1 9 9 1



序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、本年で10年目を迎え、特別展覧会・特別講演会の開催、論文集の刊行などの事業を計画・実施しているところであります。これらの諸事業の遂行にあたりましては、皆様方の御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ふりかえってみますと、この10年間に、公共事業は年々増大し、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、京都府宮津土木事務所・京都府土木建築部・京都府園部地方振興局・京都府警察本部・建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、杉末遺跡・里遺跡・塚本古墳・京大北部構内遺跡・内里八丁遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・宮津市教育委員会・綾部市教育委員会・丹波町教育委員会・京都市埋蔵文化財センター・八幡市教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 杉末遺跡 2. 里遺跡 3. 塚本古墳 4. 京大北部構内遺跡
5. 内里八丁遺跡

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 杉 末 遺 跡	宮津市杉末	平 2. 5.24 ～ 6.12	京都府宮津土木事務所	柴 暁彦
2. 里 遺 跡	綾部市里	平元.10.18 ～平 2. 6.20	京都府土木建築部	田代 弘
3. 塚 本 古 墳	船井郡八木町神吉和田塚本	平 2. 5.25 ～ 7.10	京都府園部地方振興局	引原 茂治
4. 京大北部構内遺跡	京都市左京区北白川西蔦町27	平 2. 4.23 ～ 6.11	京都府警察本部	三好 博喜
5. 内 里 八 丁 遺 跡	八幡市内里八丁	平元. 5.18 ～平 2. 2.27 平 2. 4.17 ～平 3. 3.10	建設省近畿地方建設局	竹原 一彦 荒川 史

3. 本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 杉末遺跡発掘調査概要.....	1
2. 綾部市里遺跡発掘調査概要.....	5
3. 塚本古墳発掘調査概要.....	33
4. 京大北部構内遺跡発掘調査概要.....	43
5. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要.....	49

挿 図 目 次

1. 杉 末 遺 跡	
第 1 図	調査地位置図…………… 1
第 2 図	トレンチ配置図…………… 2
第 3 図	調査トレンチ平面図…………… 2
第 4 図	調査トレンチ土層断面図…………… 3
第 5 図	出土土器実測図…………… 3
2. 里 遺 跡	
第 6 図	調査地の位置と周辺遺跡…………… 6
第 7 図	トレンチ配置図…………… 7
第 8 図	A地区遺構平面図…………… 8
第 9 図	A地区土層断面図…………… 9
第 10 図	S X01・02出土遺物実測図…………… 9
第 11 図	S D03実測図……………10
第 12 図	S D01・04出土遺物実測図……………10
第 13 図	S B02実測図……………11
第 14 図	S B03実測図……………12
第 15 図	S B02・03柱穴出土遺物実測図……………12
第 16 図	S H01・S B04実測図……………13
第 17 図	S E02実測図……………13
第 18 図	S E02出土遺物実測図……………13
第 19 図	S B01実測図……………14
第 20 図	S B01柱穴出土遺物実測図……………15
第 21 図	S B08実測図……………15
第 22 図	S B09実測図……………16
第 23 図	S B10実測図……………16
第 24 図	S E01実測図……………17
第 25 図	S E01出土遺物実測図……………17
第 26 図	S D02実測図……………18
第 27 図	S D02出土遺物実測図(1)……………19
第 28 図	S D02出土遺物実測図(2)……………20

第 29 図	S D02出土瓦器法量分布表	21
第 30 図	S D02出土遺物実測図(3)	22
第 31 図	S D02出土遺物実測図(4)	24
第 32 図	S D02出土遺物実測図(5)	24
第 33 図	A地区包含層出土遺物実測図	25
第 34 図	S D01出土遺物実測図	27
第 35 図	B地区遺構実測図	27
第 36 図	C地区遺構実測図	28
第 37 図	C地区南壁及びS D01断面図	29
第 38 図	S D01出土遺物実測図	30
3. 塚本古墳		
第 39 図	遺跡分布図	33
第 40 図	調査地地形図	35
第 41 図	残存墳丘断面図	35
第 42 図	調査地実測図	37
第 43 図	埴輪実測図・ヘラ記号拓影	39
第 44 図	埴輪・木製埴輪実測図	40
第 45 図	須恵器実測図	41
4. 京大北部構内遺跡		
第 46 図	調査地周辺主要遺跡地図	43
第 47 図	黒色土上面検出遺構実測図	44
第 48 図	掘削トレンチ平面図	44
第 49 図	トレンチ南壁北側合成断面図	45
第 50 図	周辺調査地位置図	46
第 51 図	周辺土層図	47
第 52 図	砂層上面掘削状況(東から)	48
5. 内里八丁遺跡		
第 53 図	調査地周辺遺跡分布図	50
第 54 図	調査区配置図	51
第 55 図	A地区第1遺溝平面図	52
第 56 図	検出遺構実測図	54
第 57 図	S E02実測図	56

第 58 図 出土遺物実測図.....58

付 表 目 次

付表 1 A地区S D02出土瓦器観察表.....26

図版目次

1. 杉末遺跡

- 図版第1 (1)調査地全景(東から) (2)調査地北壁断面(南東から)

2. 里遺跡

- 図版第2 (1)調査地遠景(北から) (2)A地区全景(北から)
図版第3 (1)A地区S B01全景(北から) (2)A地区S B02・03全景(西から)
図版第4 (1)A地区S E01全景(東から) (2)A地区S D02(東から)
図版第5 (1)B地区全景(北から) (2)C地区S D01(北西から)
図版第6 A地区S D01出土遺物(1)
図版第7 A地区S D02出土遺物(2)
図版第8 A・C地区出土遺物

3. 塚本古墳

- 図版第9 (1)調査前遠景(北東から) (2)調査前全景(北東から)
図版第10 (1)調査地遠景(南西から) (2)調査地全景(西から)
図版第11 (1)周溝部分(北西から) (2)木製埴輪出土状況
図版第12 出土遺物(1)
図版第13 出土遺物(2)

4. 京大北部構内遺跡

- 図版第14 (1)調査前風景(南東から) (2)黒色土上面遺構検出状況(南東から)
図版第15 (1)掘削終了後全景(北西から) (2)南壁断面(北から)

5. 内里八丁遺跡

- 図版第16 (1)A地区全景(南から) (2)A地区全景(北から)
図版第17 (1)A地区総柱建物跡群(北から) (2)S B03・05(南から)
図版第18 (1)S B04(北から) (2)S E02(西から)
図版第19 (1)S H01(南から) (2)S H01カマド内遺物出土状況(南東から)
図版第20 (1)A地区南部足跡検出状況(西から)
(2)S D08遺物出土状況

1. 杉末遺跡発掘調査概要

1. はじめに

杉末遺跡は、宮津湾を臨む丘陵先端部に位置する。京都府教育委員会作成の『京都府遺跡地図』^(注1)には、古墳時代から奈良時代にわたる遺物散布地として記載されている。また、今回の調査に先行し実施された試掘調査でも、古墳時代から中・近世の土器片が少なからず出土している。

今回の調査は、国道176号バイパスの道路改良工事に先立ち京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美と同調査員柴 暁彦が担当した。調査は、平成2年5月24日から開始し6月12日に終了した。調査にあたっては地元の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。^(注2)

なお、調査に係る経費は京都府が負担した。

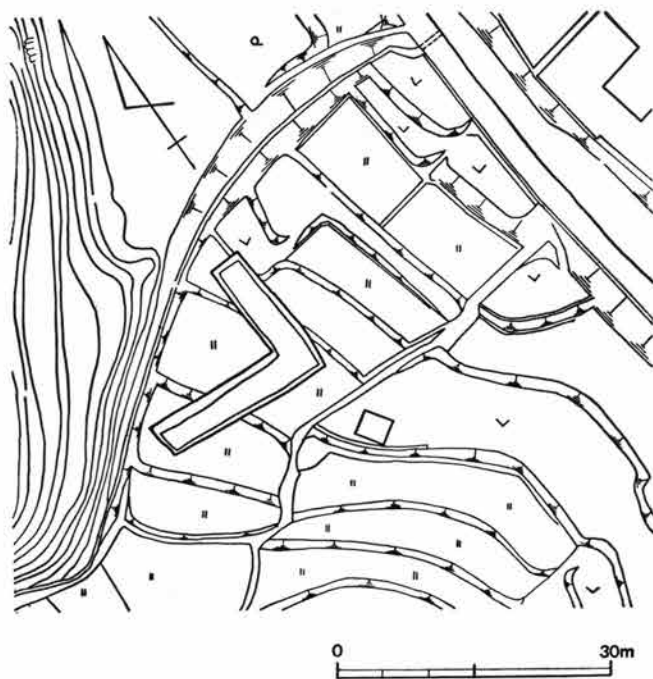
2. 調査概要

調査は、京都府教育委員会が実施した試掘か所を中心にして幅4mの「L」字型のトレンチを設定した。調査面積は約150m²である。最初、東西方向に設定したトレンチで重機により遺構・遺物の有無を確認しながら約2.4mまで掘り下げたが、顕著な遺構・遺物は見られず、表土下約80cmから植物遺体を含む黒褐色粘質土が厚く堆積していた。さらに、その下層は灰褐色砂層がつづく。また、深掘り部分では湧水を見た。

一方、南北方向に設定したトレンチでは、表土下約80cmの暗灰褐色砂質土中から植物遺体とともに土師器・須恵器片が出土したため、途中から人力で掘り下げ、遺構精査を行ったが、出土した遺物の大半は調査地西側の谷上部からの流入による磨滅した細片であり、これらに伴う遺構は見られなかった。



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 トレンチ配置図

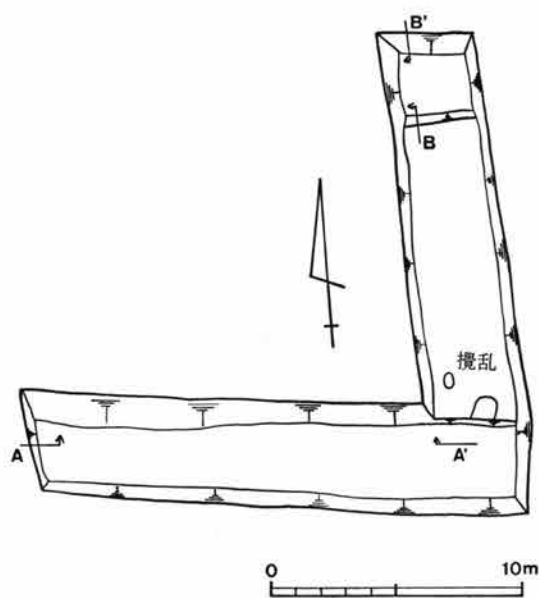
トレンチの土層断面観察によると、水田の耕作土と床土の下は砂質をベースとしており、第7層以下は粘砂質土と砂層の互層となっている。今回の調査地は山腹の際であり、トレンチ内でも現在の地表面から約1.2~1.5mで、花崗岩のバイラン土である地山の傾斜面を確認した。このバイラン土層はかなり急激に落ち込んでおり、その上に上部の谷からの流入土が厚く

堆積している状況を呈している。今回の調査では以上の谷状地形を明らかにすることができた。

3. 出土遺物

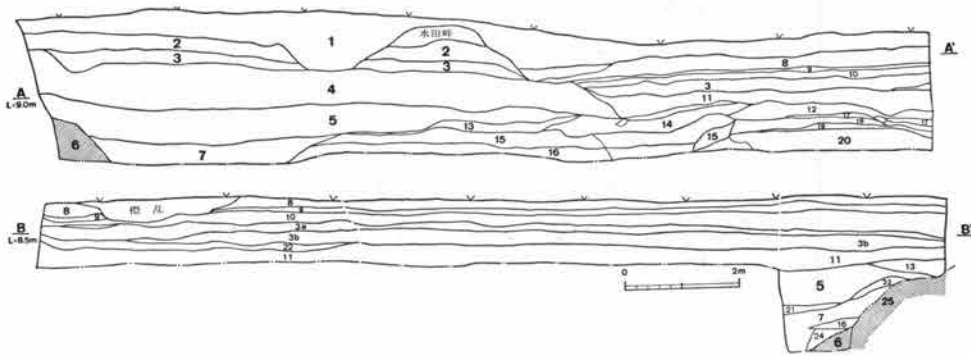
今回の調査では、図示できる資料は少ない。図示したものは調査に先立って行われた京都府教育委員会の試掘トレンチの排土中からの採集資料であり、1及び2がそれである。

1は土師器の甕であり、胴部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。器壁は多少磨滅している。外面にハケ調整痕が残る。



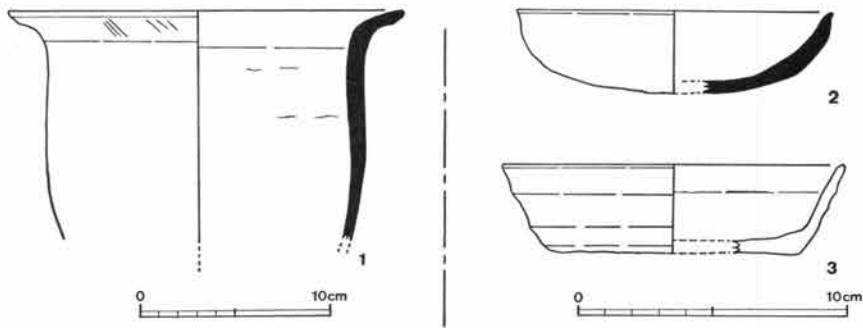
第3図 調査トレンチ平面図

る。復原口径は20.8cmを測る。2は土師器の杯である。底部から外反しながら立ち上がり、口縁端部は細く尖り気味におさめる。内・外面とも明褐色を呈する。復原口径11.8cmを測る。3は須恵器の杯である。器形は底部から外反して立ち上がり、端部を尖らせてい



第4図 調査トレンチ土層断面図

1. 暗灰褐色砂質土(耕作土) 2. 茶灰褐色砂質土 3. 灰茶褐色砂質土 3a. 暗灰茶褐色砂質土 3b. 暗茶灰褐色砂質土 4. 灰褐色粗砂 5. 暗灰褐色砂質土 6. 青灰色粘質土
 7. 黒褐色粘砂質土 8. 灰褐色砂質土 9. 茶灰褐色砂質土 10. 明褐色砂質土
 11. 黒灰褐色砂質土 12. 淡灰褐色粘砂質土 13. 黒褐色粘砂質土 14. 暗灰褐色砂質土
 15. 暗灰褐色砂 16. 緑灰色砂質土 17. 灰色砂 18. 灰褐色砂 19. 灰緑色粘砂質土
 20. 灰緑色砂 21. 緑灰色粘砂質土 22. 14と同じ 23. 白色砂 24. 白色砂混じり粘土
 25. 黄褐色砂礫(花崗岩パイラン土)



第5図 出土土器実測図

る。外面はヘラケズリをし、器壁は薄い、焼成はあまりよくない。復原口径12.8cmを測る。これらの土器は古墳時代後期から奈良時代にかけてのものと思われる。

4. ま と め

京都府教育委員会の試掘調査では、ある程度まとまった遺物が得られたにもかかわらず、今回の近接した調査地では顕著な遺構・遺物とも確認することができなかった。出土した遺物もかなり磨滅している細片で、谷上部からの流入によるものと思われる。また、

周辺の地形を考慮しても、本調査地が台地の末端に位置し、約 8 m の比高で眼前に宮津湾を臨む場所にあることから、集落そのものは西側の谷上部に存在すると考えられる。

(柴 暁彦)

注1 『京都府遺跡地図』第1分冊〔第2版〕 京都府教育委員会 1988 遺跡番号 107

注2 調査参加者（敬称略）井戸本君子・佐々木達夫・松井 清・森山芳子・山本三郎・山本住栄・山本寿美子・山本只夫

2. 綾部市里遺跡発掘調査概要

1. はじめに

里遺跡は、由良川右岸の段丘上に立地する集落遺跡である。この遺跡付近では、古墳時代から鎌倉・室町時代にかけての須恵器や土師器、瓦器、陶磁器破片などの遺物が多数採集されており、以前から遺物散布地として周知されている。

今回、里遺跡の推定範囲内に府道の建設が計画された。そのため、当センターでは工事に先立ち、遺構の有無を確認して記録保存をはかるとともに、重要な遺構を検出した場合、保存のための資料を作成することなどを主な目的として、京都府土木建築部より依頼を受け、調査を実施した。調査に係る経費は、京都府が負担した。

2. 遺跡の位置と環境

綾部市は福知山盆地の東端に位置している。市域は、標高2～300m前後の山林で囲まれ、市内を貫流する由良川によって形成された沖積地と八田川、犀川などの支流沿いに展開する山間の小盆地からなっている。沖積地は、由良川本流域で最も発達し、八田川下流域や犀川流域でも谷ごとに沖積地がみられ、生活空間としての適地を形成している。

集落遺跡は、これらの沖積地縁辺や自然堤防上に営まれており、隣接する丘陵上には古墳が多数分布している。

里遺跡は、綾部市里に所在する。由良川を南に望む低位段丘上に立地している。この地は、綾部市街地の対岸にあたっており、由良川右岸地域と左岸地域を結ぶ交通の要衝となっている。

遺跡の周辺には、久田山遺跡、久田山古墳群、仏南寺城などの遺跡があり、丘陵を隔てた北側の谷には菖蒲塚古墳、聖塚古墳、城跡古墳、栗ヶ丘古墳群などの古墳が分布している。久田山古墳群は、2基の前方後円墳をはじめ、円墳・方墳・方形台状墓・方形周溝墓からなり、10支群に分かれる規模の大きな古墳群である。^(注1) 菖蒲塚古墳、聖塚古墳は隣接して造営された方墳で、菖蒲塚古墳には造り出しがある。菖蒲塚古墳は一辺約21～23m、聖塚古墳は一辺約42～44mを測り、いずれも段築、葺石、埴輪を備えている。5世紀前半に造営されたこの地域の首長墓と考えられている。^(注2) 城跡古墳は全長40mの前方後円墳である。^(注3) 栗ヶ丘古墳群は、1985年から1987年にかけて木棺直葬の円墳12基、横穴3基が調査さ



第6図 調査地の位置と周辺遺跡

- 1; 里遺跡 2; 仏南寺城跡 55・56・155・156・257~262等; 久田山古墳群 61; 菖蒲塚古墳
 62; 聖塚古墳 65・66; 栗ヶ丘古墳群 126; 青野遺跡 213; 青野西遺跡 214; 青野南遺跡
 215; 綾中遺跡 271; 西町遺跡 294; 綾部陣屋跡

れ、6世紀前半から後半に造営された古墳群であることが確認されている。^(注4)

また、対岸の自然堤防、低位段丘上には、青野遺跡、青野西遺跡、綾中遺跡、綾中廃寺、西町遺跡など、この地域の代表的な集落遺跡がある。青野遺跡は、弥生時代中期から平安時代にかけて長期にわたって営まれた遺跡で、弥生時代中期の遺構を中心に多数の遺構・遺物が検出されている。^(注5) 青野西遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の竪穴式住居跡が確認された。住居跡出土遺物は、当該期の土器編年を構成する上で欠くことのできないものとなっている。^(注6) 綾中遺跡では郡衙跡と考えられる掘立柱建物跡が多数検出されている。^(注7) 西町遺跡は平安時代末～鎌倉時代初期の荘官層の居住域と考えられる掘立柱建物跡が広い範囲で確認された。^(注8)

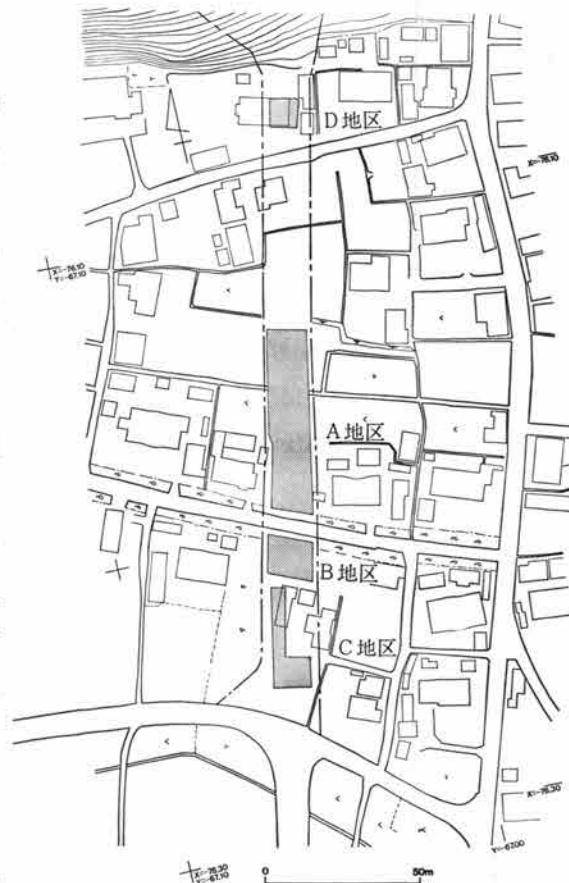
里遺跡は周辺に、上述したような主要遺跡・古墳が多数分布しており、立地の上でも時期の上でもこれらの遺跡を結ぶ重要な位置を占めている。

3. 調査の経過と概要

調査は、まず、調査対象地内の遺構や遺物の分布状況を確認するために11か所に試掘トレンチを設けた。そして、各トレンチを掘削し、土層と遺物の出土状況等の観察を行ったところ、11トレンチを除くすべてのトレンチで遺構の存在を確認した。その後、試掘成果に基づいて拡張区を設け、発掘調査を実施した。

拡張区は3か所あり、調査地内を横切る高倉神社参道をはさみ南北に分かれる。参道北側をA拡張区、南側をB・C拡張区と呼び調査にあたった(第7図)。

A・B拡張区を平成元年10月18日から翌2年3月8日まで実施し、C拡張区と調査対象地北端の試掘調査を平成2年4月24日から同年6月20



第7図 トレンチ配置図

日まで実施した。A・B地区は調査終了に
あたり現地説明会を開催し、多数の参加者
を得た。

以下、各地区ごとに調査概要を記す。

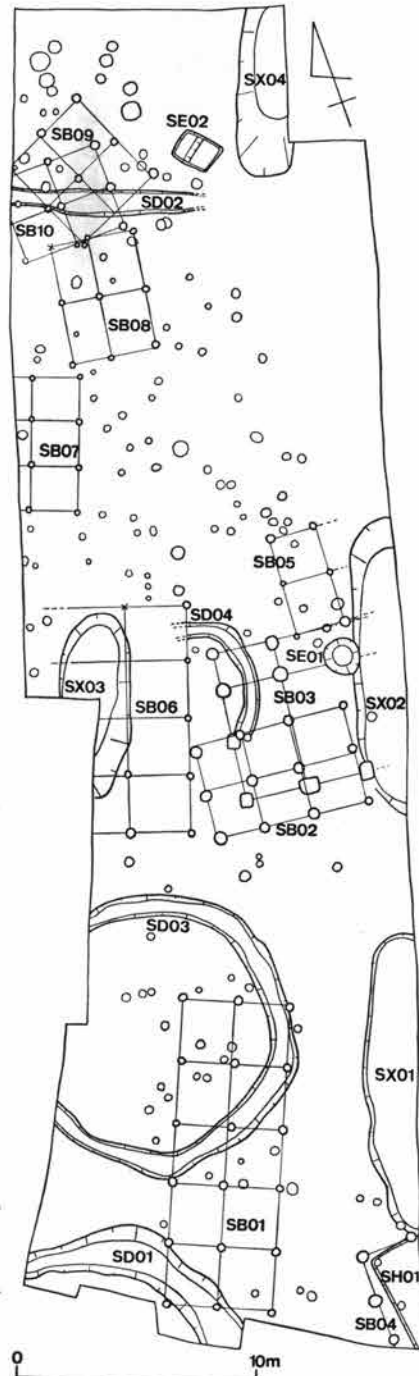
(1) A地区

約17m×50m・約850m²のトレンチであ
る。重機により表土除去を行い、表土下約
30cmからは人力により掘り下げた。黄色粘
土面まで精査を実施し、多数の遺構と遺物
を検出した(第8図)。

① 層序

基本層序は、耕土、暗褐色土(砂礫混じ
り)、黒褐色土、黒色粘質土、黄色粘土で
ある。

黄色粘土は、低位段丘面を構成する旧河
床の砂礫層上に堆積したもので、下部には
大型の歪角礫～円礫の混入がみられた。黄
色粘土は、調査地北東にむかって傾斜して
おり、黄色粘土上の堆積物が次第に厚くな
る傾向がある。拡張区の南西では耕土直下
であられ、北東隅では耕土下1.5mと深
い。遺構のベースは、トレンチ西半では黄
色粘土面であったが、北東部では黒色粘質
土であった。黒色粘質土中の遺構は、遺構
埋土との区別が難しいうえ湧水のため、最
最終的に黄色粘土上面まで掘削して遺構の検
出につとめた。東半部では黒色粘質土の中
で遺構が終わっているものが多数あり、精
査段階でも確認できなかったものが多い。
遺構平面図の中で北東部分に空白がみられ
るが、この部分は調査地の中でも特に黄色



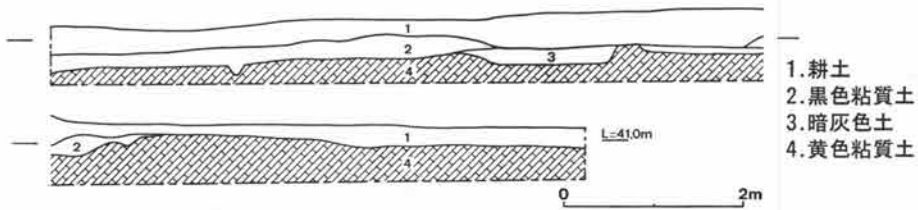
第8図 A地区遺構平面図

粘土が傾斜していて、厚く黒色粘質土が堆積していた。

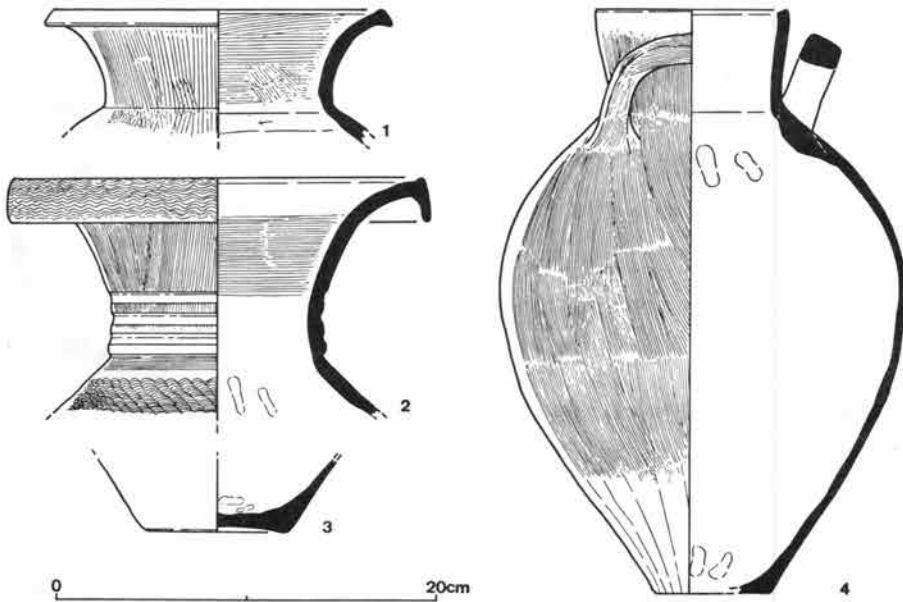
② 主な検出遺構と遺物

A 拡張区では、弥生時代中期の遺構をはじめ、古墳時代、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代にかけての各時代の遺構・遺物を検出した。以下、主な遺構を時代ごとに説明する。

弥生時代の遺構 SX 01・02がこの時期に属する。いずれも調査地東端で検出している。黄色粘土の傾斜ラインに沿って掘り込まれており、掘形の直上で弥生時代中期の壺、甕、高杯などの破片を検出している(第10図)。SX01は南北13mにわたって検出した。埋土は黒灰色粘質土である。黄色粘土直上に堆積している黒色粘質土より粘性が強いが、土質は類似している。



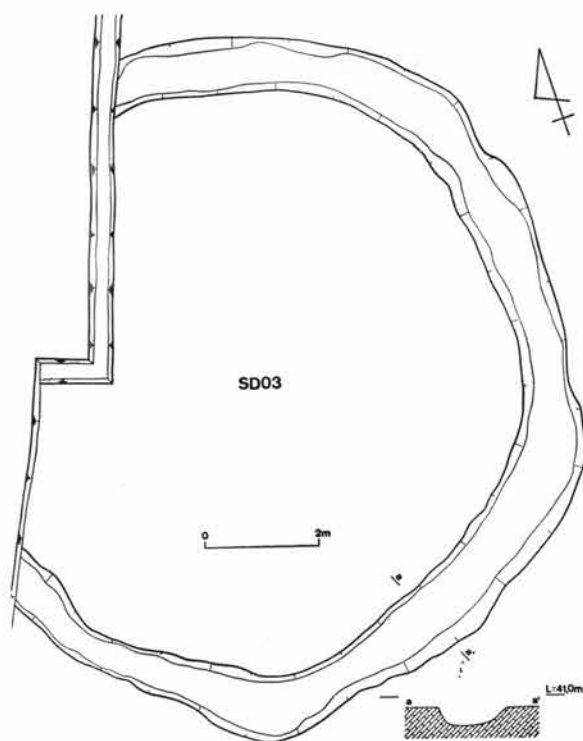
第9図 A地区土層断面図



第10図 SX01・02出土遺物実測図

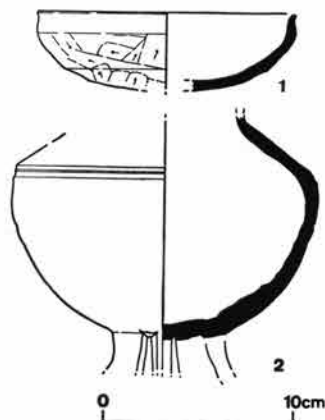
1～3. SX01 4. SX02

第10図 1～3はSX01から出土した遺物である。1・2は広口壺の口縁、3は甕の底部である。1は口縁部が大きく開き、口縁端部に面を作る。口縁内・外面に粗いハケ調整を施している。肩部内面には横方向のヘラケズリがみられる。口径約18.4cmを測る。2は、口縁端部を垂下させ櫛描き波状文を施す。頸部に4条の凹線文、肩部には櫛描き直線文と波状文を施す。4はSX02から出土した水差形土器である。



第11図 SD03実測図

最大腹径が器体上半にあがり、長胴である。直立する口縁をもち、端面をやや内傾させてつくる。肩部に半環状の把手がある。体部外面ハケ、内面をナデ調整する。外面下半にはハケを施さず縦方向のヘラケズリ痕を残す。口径約10.3cm・器高約30.7cm・最大腹径は約21.2cmを測る。SX01・02出土土器は、いずれも弥生時代中期後半(第Ⅳ様式)に属するものである。



第12図 SD01・04出土遺物実測図

古墳時代の遺構 SD01・03・04, SH01がある。

SD01は弧状の溝である。溝は、調査地の南へのびており、次に記すSD03同様、円弧を描いて巡るものと思われる。最大幅2.2m・深さ約30cmを測る。溝の南端で掘形内から土師器杯身が出土している(第12図1)。この杯身は、口径約13.6cm・器高約4.0cmを測る。口縁部を強く横ナデしやや外反させている。底部外面にはヘラケズリを施す。6世紀末に属するものであろう。

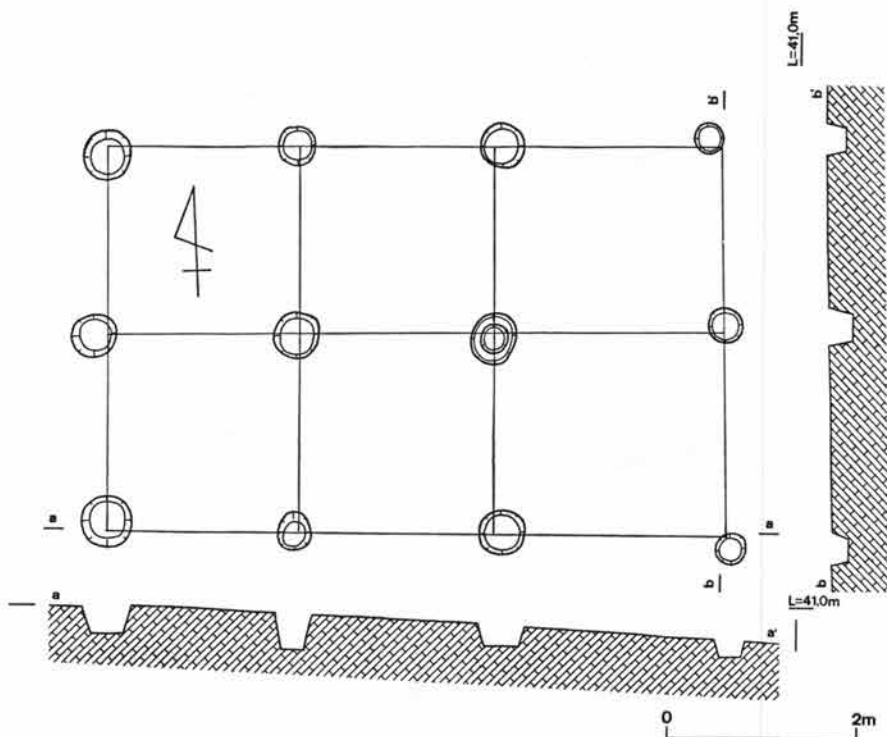
S D03は、円弧を描いて巡る溝である。溝幅は約1m・深さ約30cmで、断面は皿状である。溝外縁間の最大値は約12mである。溝から遺物が出土せず時期はわからない。この溝は、古墳の周溝だけが遺存したものだろう。野崎遺跡で同様の古墳周溝の検出例がある。^(注9)

S D04も弧状を呈する。削平されて東半分だけが残っている。西に向かって浅くなり、やがて途切れる。溝の全形はもともと円弧に近いものであったろう。幅約70cm・深さ約25cmを測る。この溝からは古墳時代後期の須恵器壺(第12図2)と横瓶の体部破片が出土した。壺は、長方形透しのある脚部を有しており、肩部に沈線を施している。長頸壺である。

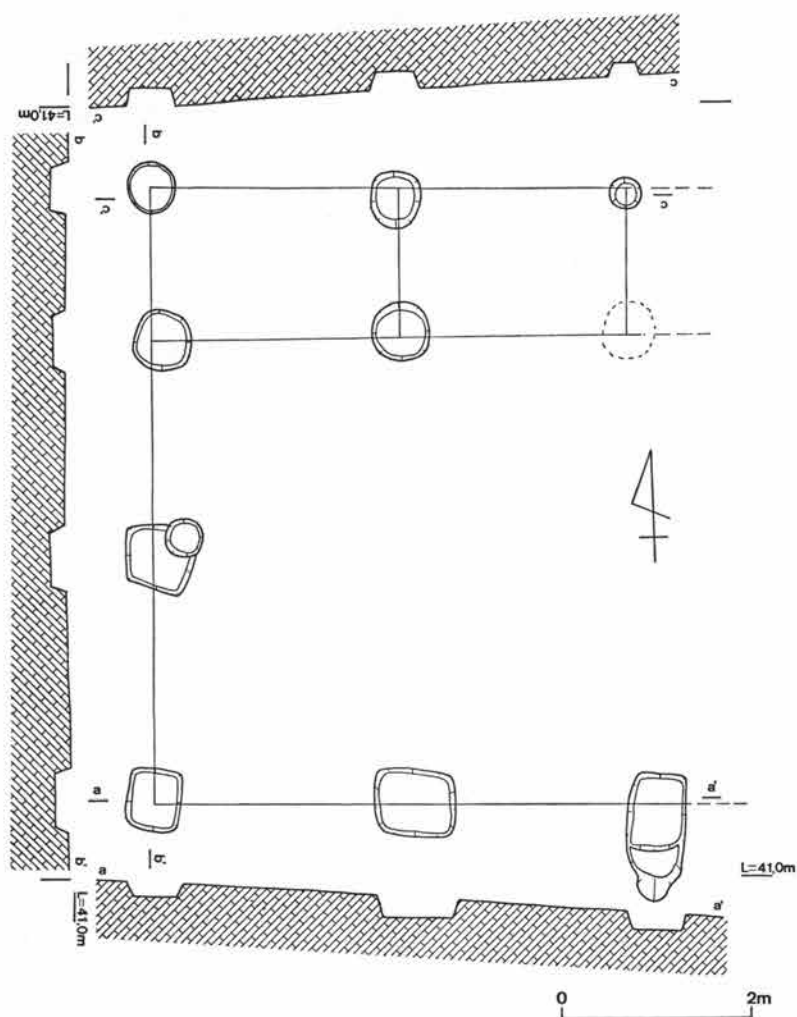
S H01は、調査地区南東隅で検出した竪穴式住居跡である(第16図)。一部を検出した。一辺4m以上の方形であり、深さ約20cmを測る。床面には、壁沿いに周壁溝状の細い溝が部分的に巡る。支柱穴その他の遺構は検出していない。遺物は土師器甕体部の細片を少量検出したのみで、遺構の時期を限定できる資料は得られなかった。ここでは、一応、古墳時代のもと考えておきたい。

奈良時代の遺構 S B 02・03・04がこの時代に属する。

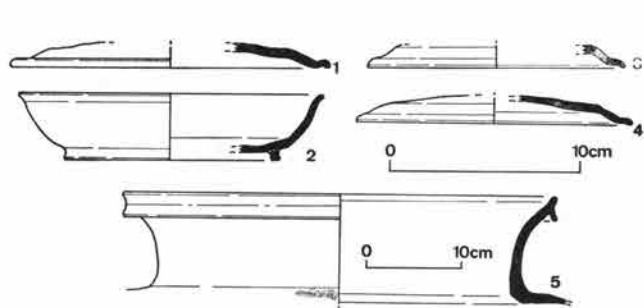
S B 02は、2間×3間の総柱、東西棟の掘立柱建物跡である(第13図)。柱間は、梁間約180cm(6尺)等間・桁行約210cm(7尺)等間である。柱掘形はすべて円形で、径は約30～



第13図 S B 02 実測図



第14図 S B 03 実測図



第15図 S B02・03柱穴出土遺跡実測図

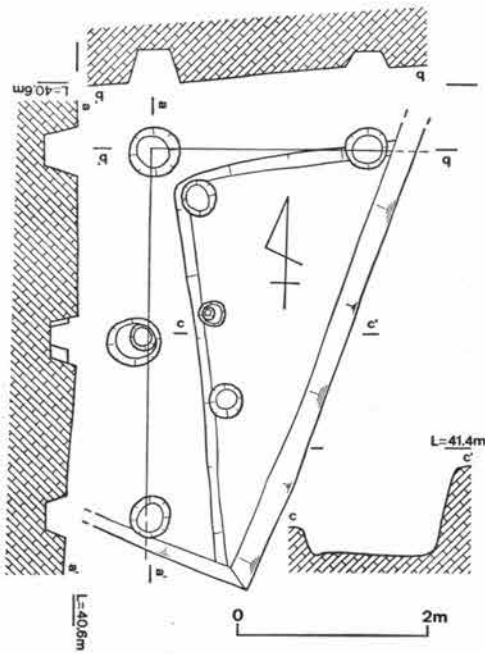
1・3・4. S B03 2・5. S B02

50cmである。S B02は、柱穴の1つがS B03を切っており、S B03廃絶後に造られたものであることがわかる。主軸はほぼ磁北である。柱穴より、須恵器杯身・甕の破片が出土している(第15図2・5)。

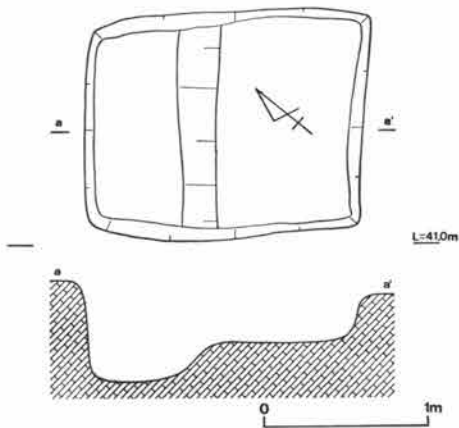
S B03は、梁間3間×桁

行2間以上の掘立柱建物跡である(第14図)。柱間は、北桁筋が梁間約150cm(5尺)と狭くなっている。ほかは梁間約240cm(8尺)等間・桁行約270cm(9尺)等間である。北桁筋1間分は廂であろう。柱穴は、平面形が方形のものと円形のものがある。方形のものは一辺約60cm前後を測る。円形のものは径30~60cmである。柱穴から須恵器杯蓋が出土した(第10図1・3・4)。主軸はほぼ磁北である。

S B04 調査地区南東隅で東西1間分・南北2間分を検出した。主軸を磁北にとり、S



第16図 SH01・S B04実測図



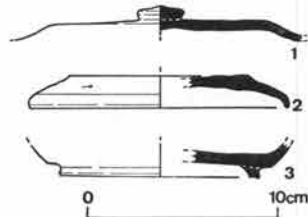
第17図 S E02実測図

B02・03と同様である。東西の柱間は約240cm(8尺)、南北の柱間は約180cm(6尺)等間である。柱穴は円形で、径約40~50cmを測る。柱穴から須恵器杯蓋の細片が出土している。

S B02・03 出土遺物(第10図1~5)

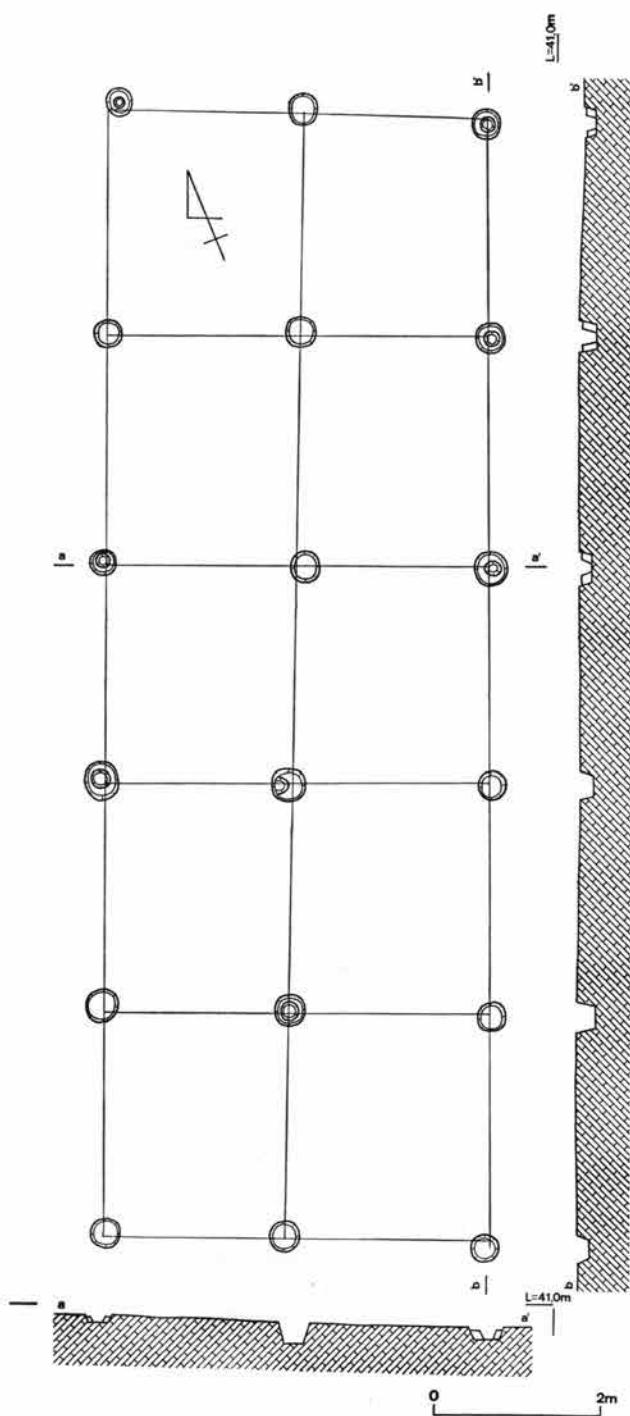
1・3・4は杯蓋である。口縁部の一部が残存する。口縁部を屈曲させ、端部に段をつくる。3は口径16.8cm・残存高約1.3cmを測る。2は杯身である。口径約16cm・器高3.6cmを測る。5は甕の口縁である。口径45.6cmと大型である。肩部外面に格子タタキ目、内面には青海波文が残る。

これらの遺物は、いずれも8世紀後半のものと思われ、時期の上では大差ない。遺構の切り合いからはS B02がS B03を切っていることがわかっているが、遺物のうえからS B02の建造は、S B03廃絶直後であったことをうかがうことができる。



第18図 S E02出土遺物実測図

S B04出土遺物は細片であるため時期が限定できないが、主軸方位、柱穴掘形



第19図 SB01実測図

等からみてSB02・03に近接する時期のものと推定することができる。

SE02(第17図)

長さ1.8m・幅1.4mの長方形の掘形をもち、壁は垂直である。底面は西半が深く、東半は浅く造られており、半ばに段がある。深さは西半で約1.2m、東半で約70cmを測る。東半は黄色粘土中で掘り止めているが、西半はその下の礫層(湧水層)に達している。埋土は、黄色粘土のブロックが混じる黒色粘質土で、埋土に混じって須恵器杯身と杯蓋の破片が出土した(第18図)。井戸であろうか。

SE02出土遺物(第18図)

埋土下部から検出した遺物のうち、図化できるものを取り上げた。1・2は杯蓋である。1は偏平な宝珠つまみがある。2は口縁部のみが遺存していた。口径約13.6cm・残存高約1.6cmを測る。3は杯身の底部である。底径10.4cmを測る。いずれも8世紀後半のものである。掘立柱建物跡SB02・03・04と、ほぼ同時期

である。

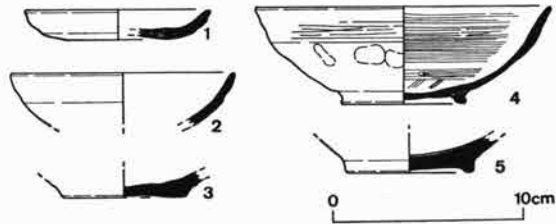
平安時代末～鎌倉時代初期の遺構 SB01・SB05・SB06・SB07・SB08・SB09・SB10・SE01・SD02・SK01などがこの時期の遺構である。

SB01(第19図) 今回の調査で検出した建物跡の中では最大のものである。2間×5間の総柱、南北棟である。柱間は、梁間約220~240cm(8尺弱)・桁行約270cm(9尺)の等間である。東西両桁筋は整然としているが、中央の桁筋は10~20cm前後のばらつきがみられ、やや歪んだ建物になっている。柱穴はすべて円形で、径は約30cm前後で揃っている。柱穴3・6・7・11・12から遺物が出土した(第20図)。

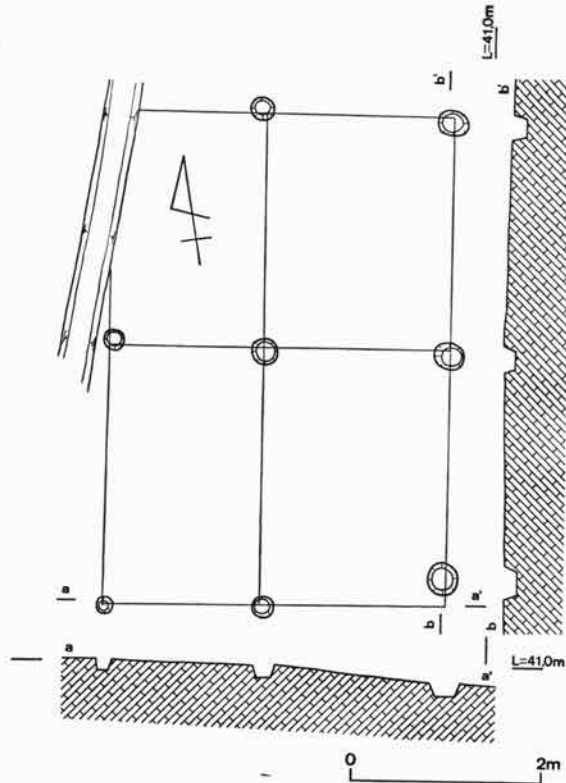
SB01出土遺物(第20図1~5)

1は土師器皿である。口径約9.8cm・器高約1.5cmを測る。2は土師器である。碗の口縁部であろう。3は土師器碗の底部である。底面に糸切り痕がある。4は瓦器碗である。口径約15.6cm・器高約5cm・底径約6.5cmを測る。器高指数は約32.1である。器体はゆるやかに立ち上がり、口縁部を強く横ナゲしてやや屈曲する口縁部を作る。端部は丸く、沈線はみられない。器壁は荒れて詳細はわからないが、内外面ともにていねいにヘラミガキされているようである。12世紀後半のものだろう。5は白磁碗の底部で、底径6.7cmを測る。

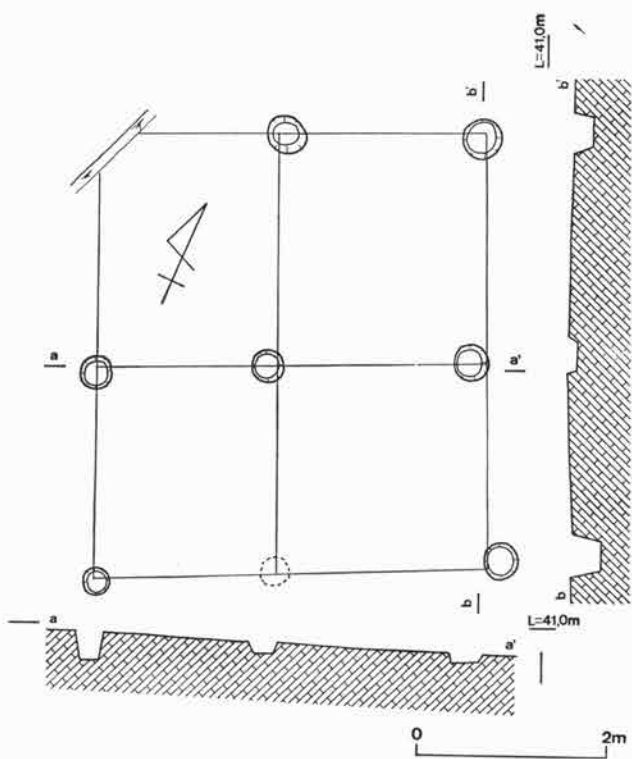
SB05 東西1間分・南北2間分を確認した。東へのびるものと思われる。柱間は東西・南北ともに約270cm(7尺)を測るが、柱列はばらついており歪みがある。遺物は出土しておらず、時期はわか



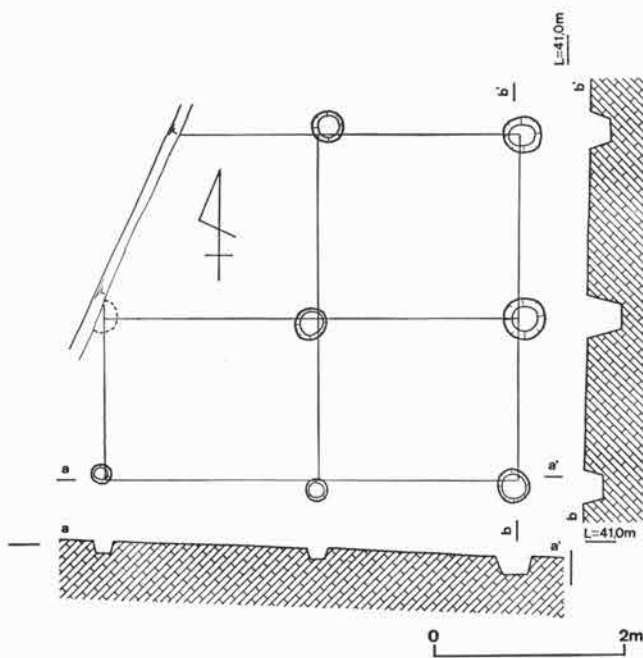
第20図 SB01柱穴出土遺物実測図



第21図 SB08実測図



第22図 SB09実測図



第23図 SB10実測図

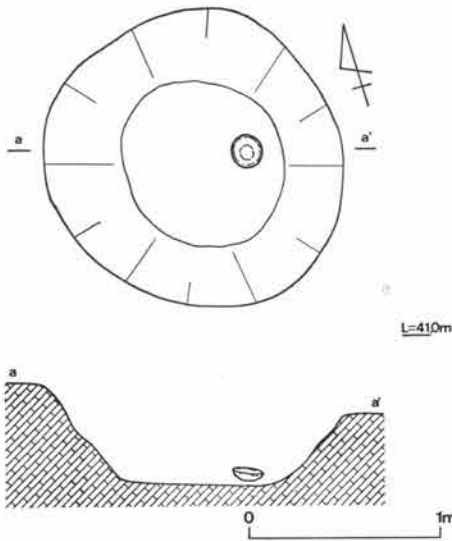
らない。

SB06 東西1間以上・南北4間の掘立柱建物跡である。SX03による攪乱と削平により、柱掘形の大半は失われていた。柱間は約240cm(8尺)等間である。柱穴掘形は円形で、径25~30cmである。主軸方位はSB01とほぼ同じである。柱穴から瓦器碗体部の破片が出土した。建物跡の規模は不明である。

SB07 東西1間以上、南北3間の掘立柱建物跡である。建物跡は調査地区の西側にのびると思われる。建物跡全体の規模は不明である。柱間は、東西・南北ともに約180cm(6尺)等間である。柱穴は約25~30cmの円形である。柱穴から瓦器碗の細片が出土した。主軸は、やや東に傾くが、SB01、SB06と同様である。

SB08 2間×3間の南北棟である。北西隅の柱穴は削平により失われていた。柱間は、梁間約180cm(6尺)等間・桁行約240cm(8尺)等間である。柱穴はばらつきがあり、やや歪んだ

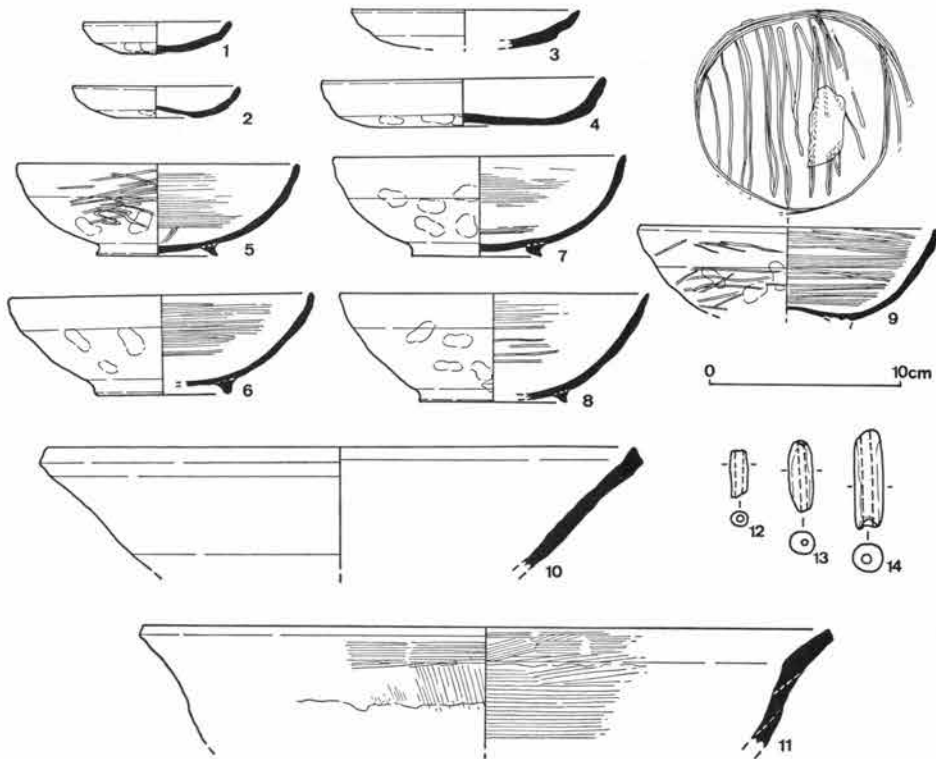
建物跡である。柱穴の径は約25～30前後である。柱穴から土師器、瓦器の細片が出土した。



第24図 S E01実測図

S B09(第22図) 2間×2間の掘立柱建物跡である。南北棟である。北東隅と南第1列梁中央の柱穴は確認できなかった。柱間は、東西約180cm(6尺)・南北約240cm(8尺)である。柱穴の径は約30～40cmを測る。柱穴から遺物は出土しておらず、時期は明らかでない。

S B10(第20図) 東西2間以上・南北2間の掘立柱建物跡である。調査地西側へのびるものと思われる。東西棟であろう。柱間は、東西約210cm(7尺)・南北約180cm(6尺)等間である。柱穴は、径25～40cmを測る。柱穴から瓦器、土師器の細片が出土した。



第25図 S E01出土遺物実測図

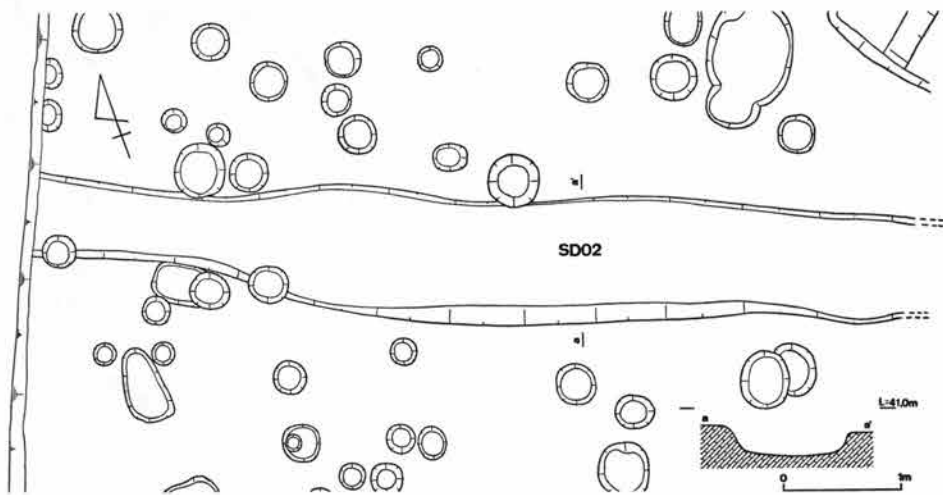
S E01(第24図) 円形の土坑である。断面はすり鉢状を呈し、底面は平坦である。直径約1.5m・深さ約50cmを測る。埋土は、黒色粘質土の単一土層であった。埋土から瓦器碗・皿、土師器皿、須恵器すり鉢、土師器鍋、土錘等が出土した。このうち、瓦器碗は残りがよく、完形に近いもの(第24図9)もあった。

S E01出土遺物(第24図) 1～4は土師器皿である。1・2は小形である。1は口径約8cm・器高1.6cm, 2は口径8.8cm・器高1.8cmを測る。口縁部を強くナデ調整する。3は、口縁部に段をもつ。口径約12cm・器高約2cmを測る。4は、口径14.8cm・器高2.5cmの大形の土師器皿である。口縁部を二段ナデ調整する。

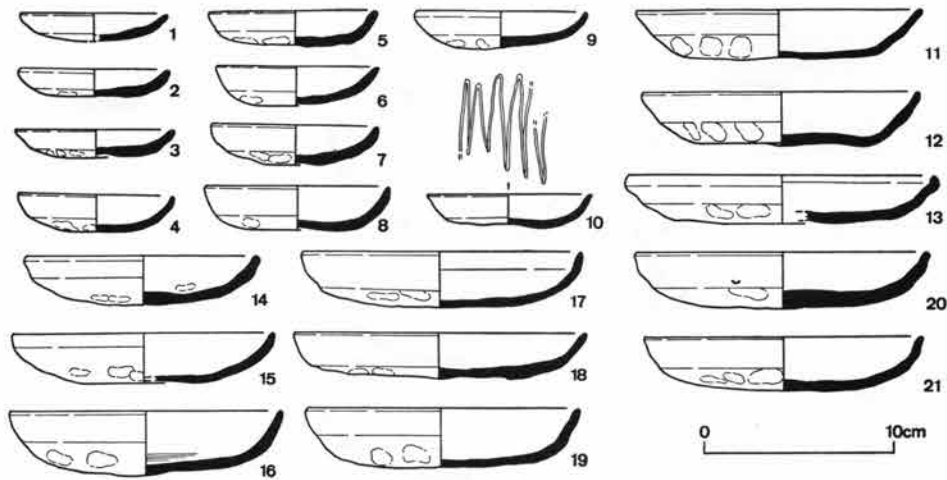
5～9は瓦器碗である。いずれも、体部がゆるやかに立ち上がり、口縁部に強いナデを施す。端部を丸くおさめ、沈線をもたない。5・9は、器体内・外面にヘラミガキを密に施す。6・7・8は、外面の磨滅が著しく、調整は不明である。9は、遺構の底面から出土したもので、高台を破損しているがほぼ完形である。法量は、5が口径約14.8cm・器高約4.8cm, 6が口径約16.1cm・器高約5.2cm, 7が口径約15.4cm・器高約5.4cm, 8が口径約16.1cm・器高約5.6cm, 9が口径約16.0cm・器高(推定)約5.5cmである。器高指数は約32～35と幅がみられる。6が約32.2で値が小さく、7が約35で最大である。

10は東播系の須恵器すり鉢である。

S D02 東西に走る溝である(第26図)。幅約1m・深さ約30cmを測る。約15mにわたって検出した。東半部では、遺構のベースが溝埋土と同様の黒色粘質土となっていたために判別がつかず、充分に検出できなかった。この部分では、黒色粘質土中に土器が列状に並んで出土しており、溝が東へのびることは確実である。溝の断面は「U」字状であり、埋



第26図 S D 0 2 実 測 図



第27図 S D02出土遺物実測図 (1)

土はやや褐色がかった黒色粘質土である。この溝の埋土からは、12世紀代の土師器皿や瓦器碗・皿、瓦質土器、土鍋などが一括して出土した。

S D02出土遺物(第27～31図) 土師器皿、瓦器皿・碗、土師器鍋、羽釜、白磁碗、土師器碗、黒色土器碗などが出土した。瓦器碗と土師器が多数を占めており、白磁碗や黒色土器碗、土師器碗はごく少量であった。

土師器皿(第27図1～6, 11～21) 多数出土しているが、主なものについて説明する。土師器皿は、A～Cの3型式に分類することができる。小形のもの(A型式)と大形のもの(B・C型式)とがある。

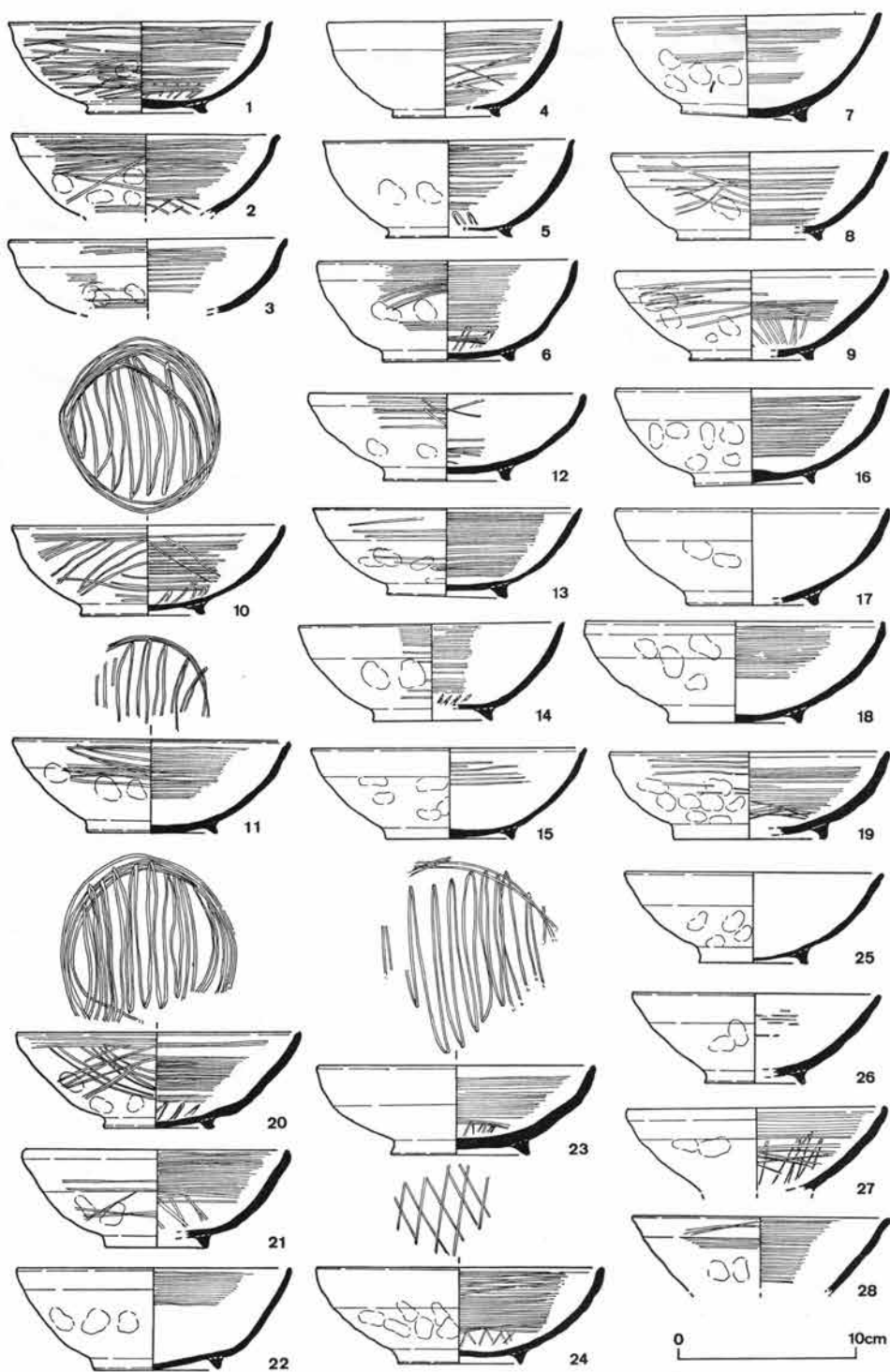
A型式(1～6) 口径8～9cm前後の小形のものである。口縁部を横ナデし、端部を丸くおさめる。底部に指頭圧痕を残す。5は、口径9.0cm・器高は1.8cmを測る。

B型式(14～19, 20・21) 底部からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる口縁部をもつ。口径14.5～16cmと大形である。14・15は口縁端部のみに強いナデを施す。16～19・20・21は、いわゆる二段ナデを施すもので、口縁部の広い範囲にナデを施している。いずれも内面をナデており、底部には指頭圧痕が顕著である。14は口径12.4cm・器高2.4cm、21は口径約14.6cm・器高約2.8cmを測る。

C型式(11～13) 平らな底部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部を強く横ナデする。11・12は口縁部を丸くおさめるが、13は端部に強いナデを施して肥厚させている。11は口径15.2cm・器高1.2cm、13は口径8.2cm・器高1.2cmを測る。

これらの土師器はおおむね12世紀代に属するものだろう。

瓦器皿(第27図7～10) 土師器皿よりわずかに大きいが法量はほぼ同形同大である。口



第28図 S D02出土遺物実測図 (2)

縁部に横ナデを施して器体を整えている。内・外面ナデ調整のものが主体を占めているが、中には10のようにジグザグ状の暗文を施すものもみられる。9は口径約9.2cm・器高約1.8cmを測る。

瓦器碗(第23図1～28) SD02出土遺物中、最も出土量の多かった器種である。完形あるいは破片の中でも遺存状況の良好なものを中心に取り上げて図示した。法量など詳細については別表(付表1)を参照されたい。

この遺構出土の瓦器碗は、大きく3型式に分類できる。ひとつは、体部がゆるやかに湾曲して口縁部に至るもの(A型式)、もうひとつは比較的平らな底部を持ち体部が直線的に立ち上がる傾向をもつもの(B型式)、そして体部にあまりふくらみを持たず直線的な器体をもつもの(C型式)の3者である。いずれの型式においても口縁端部内面に沈線を施すものと施さないものがあるが、C型式の沈線は浅く不明瞭である。

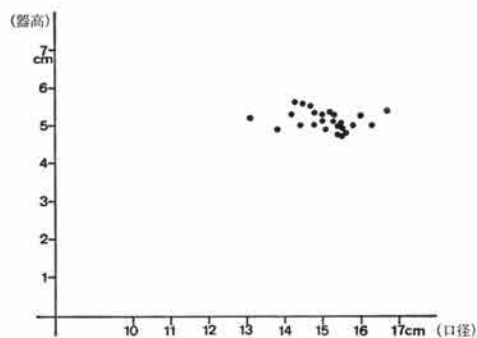
それでは、以下、各型式別に説明する。

A型式としたものは1～19・23・24である。この型式は、法量・口縁端部の整形手法などからおおむね4形式に細分できそうである。

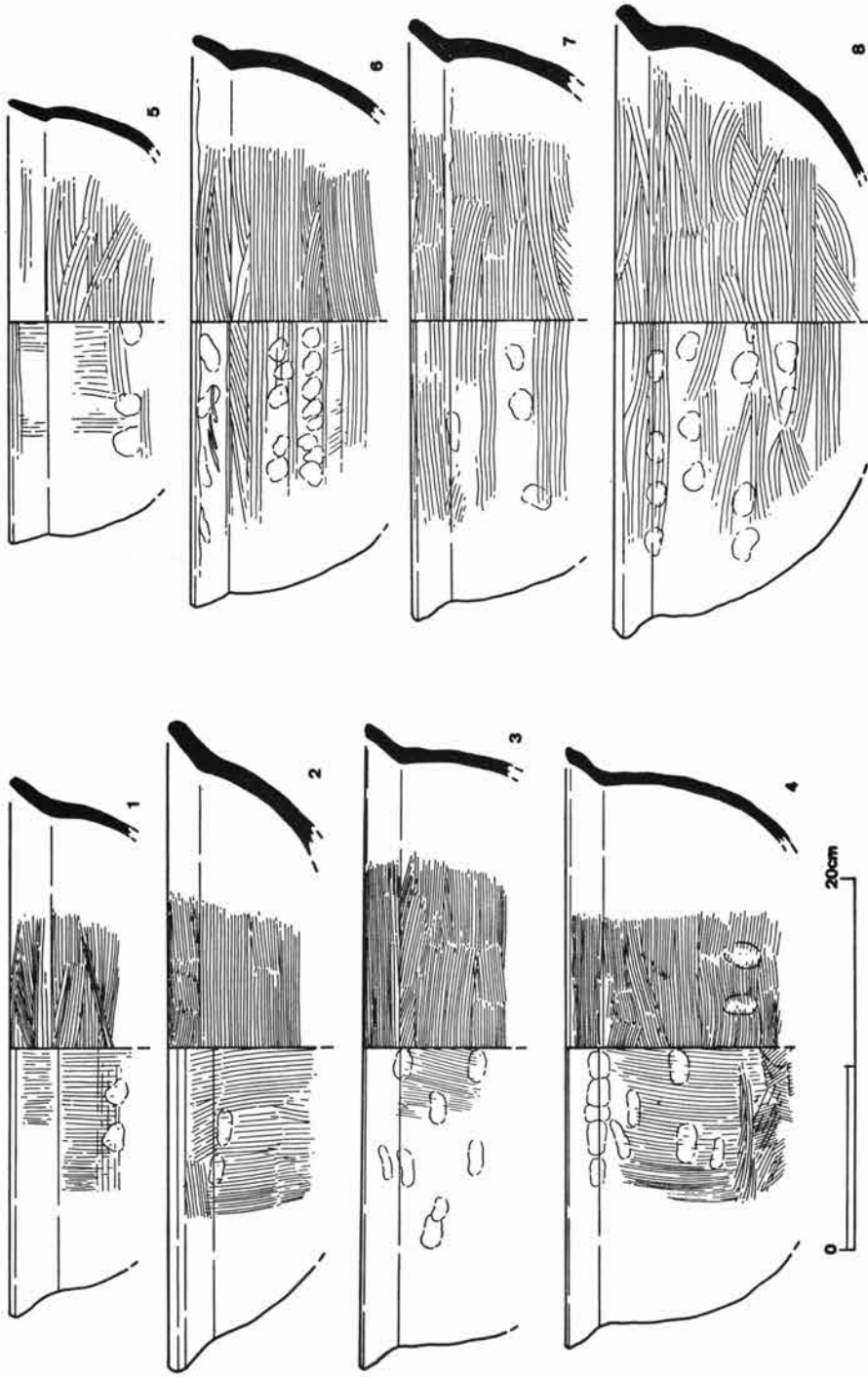
A-1形式 器高指数が34前後の浅い器体をもち、口縁部を横ナデして外反させ(1～3)、端部を丸くおさめる。器壁が薄く、胎土が精良・密である。器体の内・外面にていねいなヘラミガキを施す。1の見込みにはジグザグ状の暗文、2は部分的であるが格子状の暗文が認められる。

A-2形式 4～7など口径に対して器高が高く、深い体部を持つもの。器高指数は37～39前後である。口縁部外面を横ナデして稜をつくるもの(4・6)とそうでないもの(5・7)とがある。5は口縁端部を強く横ナデして外反させている。4・5・7は器表外面が荒れているため調整は不明瞭であるが、ていねいなヘラミガキを施していたようである。5・6は見込みにジグザグ状の暗文が施されている。高台は太く、しっかりとしたつくりである。

A-3形式 8～17が該当する。ゆるやかに湾曲する浅い体部をもつもの。器高指数は31～35前後であり、33～34前後のものが多いようである。口径は15.0～15.5cmのものを中心とする。いずれも、口縁部に横ナデを施し、稜をつくる。稜は明瞭なもの(10・11・13～17)と不明瞭なもの(9・12)とがある。9・11・13・15・17は、口縁端部内面に沈線があ



第29図 SD02出土瓦器法量分布表



第30図 S D02出土遺物実測図 (3)

り、他は丸くおさめている。ヘラミガキは内・外面ともいねいに施されている。外面はナデ調整を主体としており、その上から粗くヘラミガキするものが多い(8~14)。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている(9~11・14)。高台は太くしっかりとつくるもの(8~13・16~17)と断面形が三角形を呈しやや粗略化されたもの(14~15)とがある。

A-4形式 18・23・24が該当する。口径が16.0~16.5cm前後と大きく、器壁が厚くしっかりとしたつくりのもの。器体は浅く、器高指数は30~32前後と、最も低い値を示す。A-3形式のものと同様に、体部はゆるやかに湾曲して立ち上がる。口縁部を強く横ナデし、屈曲して立ち上がる口縁をつくる。調整は、体部外面ナデの後、部分的にヘラミガキを施す。ナデが主体であり、体部下半には指頭圧痕を顕著に残す。内面は密にヘラミガキを施し、見込みに暗文を施す。暗文はジグザグ状のもの(23)と斜格子状のもの(24)とがある。18・19・23・24はいずれも口縁端部内面に沈線をもつ。

B型式 平らな底部から体部が屈曲して直線的に立ち上がる傾向をもつもの(20~22)である。20は口縁端部内面を強くナデ調整し、沈線状の段をつくる。体部内・外面ともいねいなヘラミガキを施す。見込みにはジグザグ状の暗文がある。22は器壁が荒れており、調整不明である。この型式は、福知山市大内城跡で確認されたもの(Ⅱ-bタイプと^(注10)呼称)と同様のものであろう。

C型式 25~28が該当する。体部にあまりふくらみをもたず、直線的に立ち上がり口縁部に至るものである。口縁部を強く横ナデしてやや屈曲して立ち上がる口縁部をつくる。28は外反する口縁をもつ。26は、口縁端部内面に形骸的な沈線をもつ。体部外面の調整はナデが主体であり、ヘラミガキは口縁付近にわずかに施されている(28)。内面はヘラミガキが密であり、27ではジグザグ状の暗文が認められる。

この型式のものは出土量がわずかであり、細片資料に限られる。

これらの瓦器碗は、形態の特徴からみて、いずれも丹波型に属している。次に各型式の帰属時期について考えてみたい。

この地域の瓦器碗は、福知山市大内城跡出土資料を中心として編年研究^(注11)が行われている。その成果にもとづいて検討していくことにする。

各型式中で最も古相を呈するのがA-1形式である。この形式のものは内・外面ともヘラ磨きを密に施しており、造り・胎土ともに良好である。I期(12世紀前半)に属するものと思われる。

Ⅱ・Ⅲ期(12世紀中~後半)には、丹波型の瓦器は、口縁部が直線的に立ち上がるものや、厚手で口径が大きくやや大ぶりのものなど多様化する傾向が指摘されている。A-2・A-3・A-4, B型などがこの時期に属するものと思われる。A-2・A-3には、内・

外面のへら磨きをていねいに施しており、やや古相を呈するものを含んでいる。A-4は、器壁が厚く大ぶりのものであるが、外面の磨きは省略されており、この型式の中でも新相を呈している。B型式は、大内城跡調査報告書でⅡ-bタイプとされたものと同一型式である。Ⅱ-bタイプはⅢ期の指標となったSX 248で検出されている。

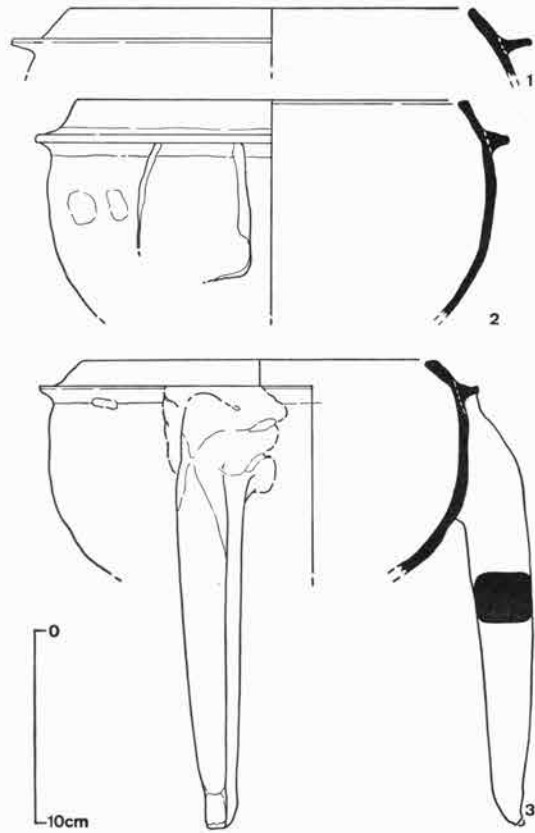
C型式は外面のへら磨きが省略されており、造りも粗い。^(注12)兵庫県多利遺跡でもこの種の瓦器がA・B両型式に伴って検出されている。Ⅲ～Ⅳ期(12世紀後半～13世紀初頭)に位置づけられるものであろう。

土師器鍋(第30図1～8) 鍋は、口縁部の形態から2型式に分類できる。「く」の字状に外反するもの(A型式)と「く」の字状に外反して屈曲あるいは湾曲して立ち上がるもの(B型式)とである。

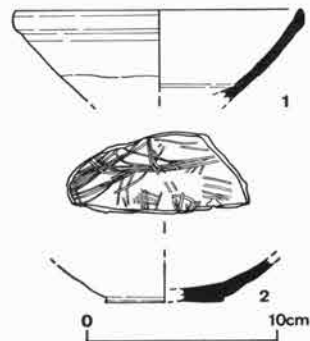
A型式(1・2・5～8)は、口径に対して器高が低く、浅い体部をもつもの(A-1形式:1・2)と深いもの(A-2形式:5～8)にそれぞれ細分できる。いずれの形式も、器壁が厚い大形のものと小形のものがある。口径は、1が29.2cm、5が23.8cm、8が33.8cmを測る。

B型式(2・3)としたものは、A型式の大形のものと同様の法量をもつが、器壁がやや薄めである。口縁部を強くナデ、わずかに口縁部を屈曲させるのが特徴となっている。この型式の鍋は瓦質土器にみられるものであり、これはその模倣とみなすことが可能であろう。4は、口径32.4cm・残存高12.5cmを測る。

胎土は両型式とも共通しており、径1～2mm前後の砂粒を多く含んでいる。色調は乳褐色を呈し、外面に



第31図 S D02出土遺物実測図 (4)



第32図 S D02出土遺物実測図 (5)

は煤の付着が顕著である。

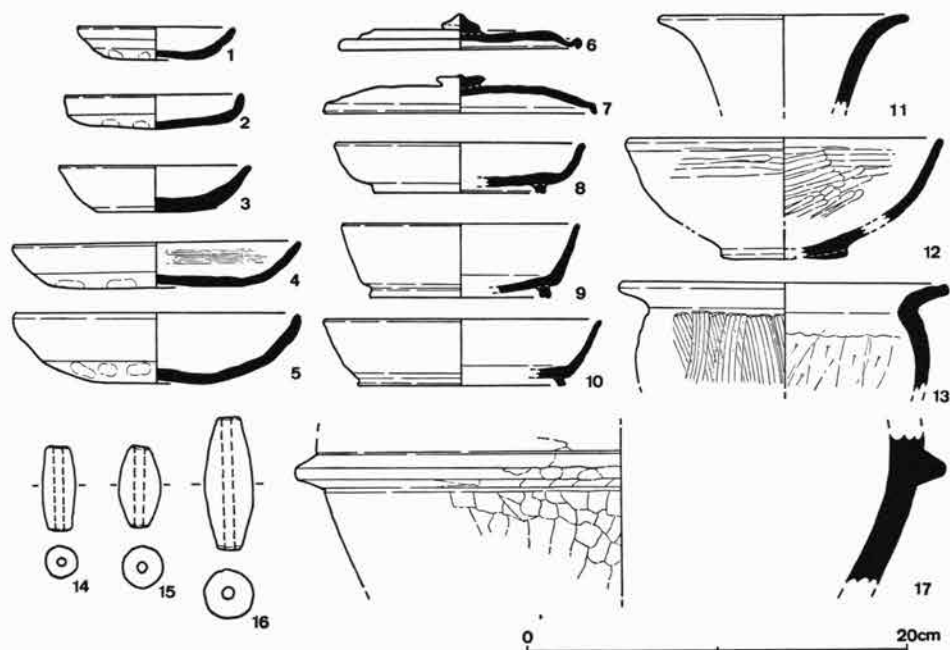
羽釜(第26図1~3) 土師質のもの(1)と瓦質のもの(2・3)とがある。1は、内傾する口縁部をもつ。羽は水平にのびる。胎土には微細砂を多量に混入しており、砂質である。2・3は、脚を有する羽釜である。羽は短く、断面は三角形である。2は、口縁部が内傾して立ち上がり、端部に面をつくる。体部に脚の剝落した痕跡がある。内・外面ナデ調整を施す。3は、脚が一本遺存していた。脚は、羽部直下に接合されており、断面は四角形である。脚端は細く、反りぎみである。器体は内外面ともにナデ調整である。口径約18.8cm・器高約24.5cmを測る。

白磁(第32図1) 玉縁状の口縁をもつ碗である。見込みに沈線が一条巡る。口縁15.3cm・残存高5cmを測る。森田・横田分類の白磁碗第Ⅳ類に属し、玉縁口縁が小ぶりであることから12世紀前半のものと考えられる。

黒色土器(第32図2) 碗の破片である。内面にのみ炭素吸着させる黒色土器A類である。内面にいねいなへらミガキを施す。外面はナデ。底部に糸切り痕を残す。底径約6.2cmを測る。

包含層出土の遺物 A地区では、包含層からも各時代の各種の遺物が多数出土している。主なものを取り上げ、図示しておく(第33図)。

1~5は土師器皿である。3の底部には糸切り痕が認められる。6~11は須恵器である。



第33図 A地区包含層出土遺物実測図

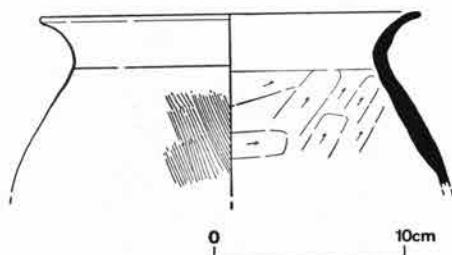
付表1 A地区SD02出土瓦器観察表

土器 番号	法 量			器高指数 (器高×100) 口径	胎 土	焼成	色 調	備 考
	口径	器高	底径					
第1図	14.8	5.0	6.8	33.8	密	やや軟	黒灰色	内底面にジグザグ状の暗文あり。ほぼ完存。
2	15.1	(4.5)	—	—	密	やや軟	黒灰色	内、外面にヘラミガキ。口縁部のみ残存。
3	15.5	(4.4)	—	—	密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。
4	13.1	5.2	6.1	39.6	密	良	黒灰色	外面磨滅のため調整不明。
5	14.2	5.3	7.0	37.3	密	良	黒灰色	外面磨滅のため調整不明。
6	14.5	5.6	7.2	38.6	密	良	暗灰色	内外面を丁寧にヘラミガキ。
7	15.0	5.6	7.2	37.3	細砂含む 密	やや軟	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みは磨滅。完存。
8	15.4	4.8	8.2	31.1	密	良	暗灰色	内、外面ヘラミガキ。
9	15.0	5.1	7.0	34.0	密	良	外面黒灰色 内面暗灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文を施す。
10	15.3	5.1	7.2	33.3	細砂含む 密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文を施す。完存。
11	15.6	5.1	7.4	32.7	密	やや軟	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文を施す。完存。
12	15.5	4.7	7.2	30.3	密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。
13	15.1	4.9	6.6	32.4	密	やや軟	灰白色	内、外面ヘラミガキ。
14	14.8	5.3	6.7	35.8	細砂含む 密	やや軟	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。磨滅。見込みに平行線状の暗文を施す。
15	15.4	5.0	6.8	32.5	密	軟	黒灰色	器表面磨滅。調整不明。
16	15.3	5.3	7.1	34.6	密	やや軟	暗黒灰色	外面ナデののち部分的にヘラミガキ。完存。
17	15.4	5.4	7.2	35.1	密	やや軟	黒灰色	器表磨滅のため調整不明。
18	16.9	5.4	7.6	31.9	密	やや軟	黒灰色	外面ナデ。内面ヘラミガキ。
19	15.8	4.8	8.4	30.3	密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。
20	16.0	5.3	6.2	33.1	密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文を施す。ほぼ完存。
21	14.7	5.5	5.8	37.4	密	良	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文を施す。
22	14.3	5.6	7.2	39.1	密	やや軟	黒灰色	内、外面ともにヘラ磨きを施しているが、磨滅により不明瞭。完存。
23	15.8	5.0	5.1	31.6	細砂含む	やや軟	暗灰色	外面ナデの後、わずかにヘラミガキ。見込みにジグザグ状の暗文。
24	16.3	5.3	7.0	32.5	密	やや軟	暗灰色	外面ナデの後、わずかにヘラミガキ。内面ヘラミガキ中。見込みに格子状暗文。
25	14.4	5.0	5.2	34.7	砂粒含む	良	黒灰色	内、外面ともナデの後、部分的にヘラミガキ。
26	13.8	4.9	5.6	35.0	密	やや軟	黒灰色	器表磨滅のため調整不明。
27	14.4	(5.2)	—	—	密	やや軟	黒灰色	外面ナデの後、部分的にヘラミガキ。内面密にヘラミガキ。
28	14.5	(4.2)	—	—	密	やや軟	黒灰色	内、外面ヘラミガキ。外面のミガキは粗い。

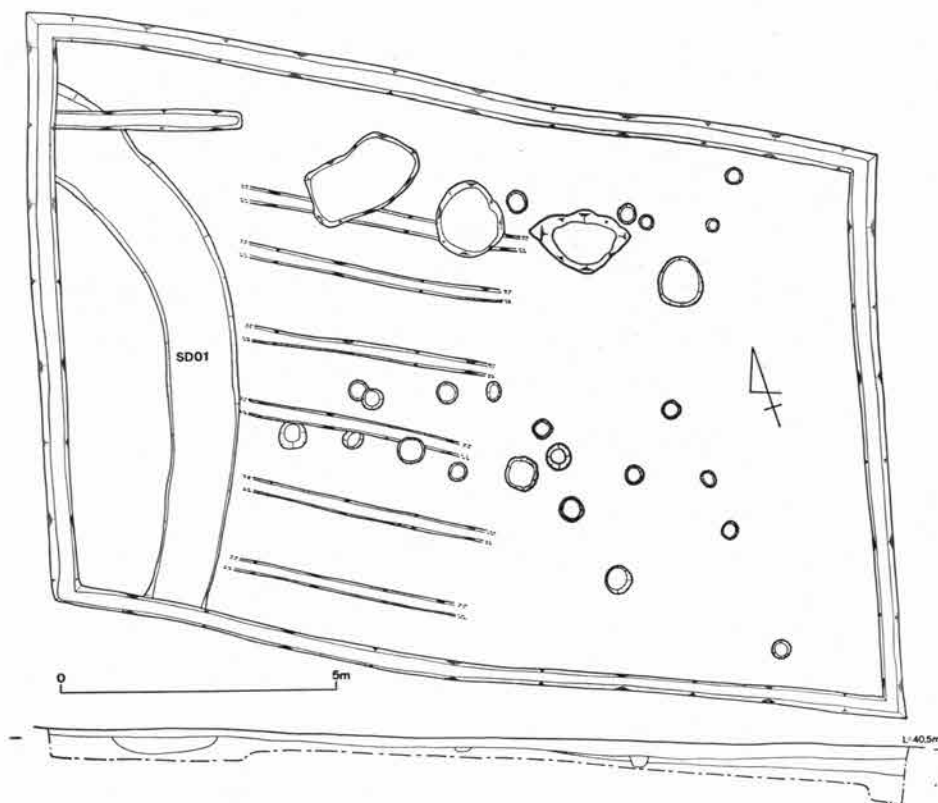
6・7は杯蓋，8～10は杯身である。11は長頸瓶の口縁部である。8世紀後半に属するものであろう。12は黒色土器の碗である。内面のみが漆黒色を呈する。底部に糸切り痕がある。黒色土器には、このタイプの他に輪高台を持ち内外面ともに漆黒色を呈するものがあるが、細片のため図示できなかつた。13は土師器甕である。体部外面にハケ、内面にヘラ削りを施している。14～16は土錘である。17は石鍋である。最大径約34.5cmを測る。羽の断面形が三角形に近く、新しい型式に属するものである。14世紀代のものであろう。滑石製である。

(2) B 地区

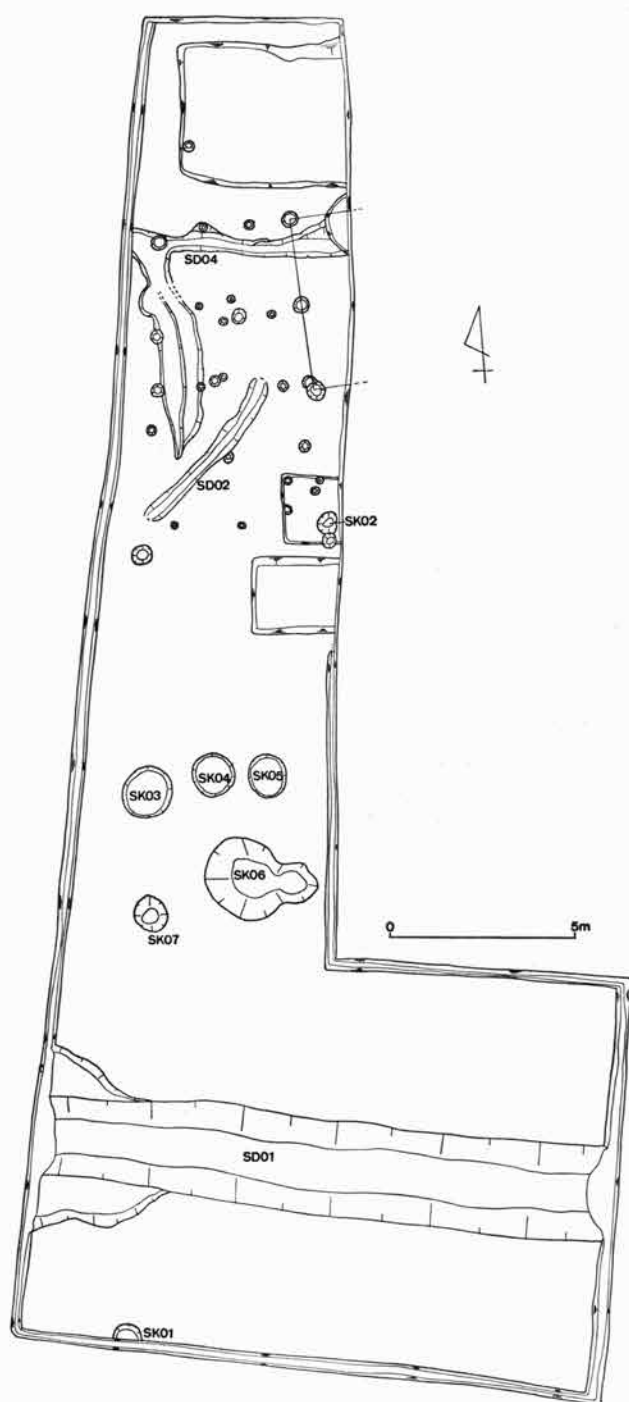
この地区は、茶畑、栗林として利用されていたこともあり、削平と攪乱のため遺構はあまり認められなかつた。検出した遺構は、ピットと溝一条のみである。ピットは建物としてのまともではなく、時期も明らかでない。



第34図 SD01出土遺物実測図



第35図 B地区遺構実測図



第36図 C地区遺構実測図

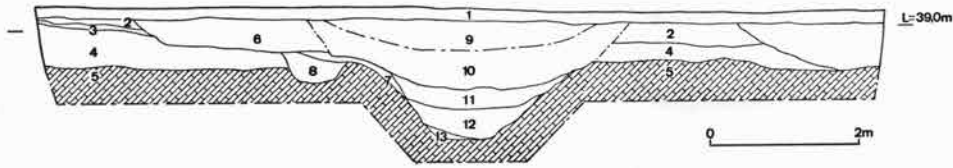
溝(SD01)は弧状を呈しており、断面形は「U」字形である。約10mにわたって検出した。埋土は暗灰色の砂質土の単層である。深さは約30cmである。この溝から土師器甕が1点出土している(第34図)。

甕は、口径19.8cm・残存高約10.5cmを測る。体部外面に縦方向のハケ、内面にはへら削りを施している。古墳時代後期末葉のものであろうか。

SD01は、A地区で検出した古墳周溝(SD01・03)と隣接しており、形状も類似している。同様の性格が考えられる。

(3) C地区

B地区の南側に設定した調査区である。調査地内に宅地が残っていたため、「L」字形のトレンチを設定して調査を行った。この地区の北半部は、B地区同様に宅地や畑地として利用されていたため削平と攪乱が著しい。表土直下で黄色粘土があらわれ、遺構の存在状況はよくない。南端の



第37図 C地区南壁及びS D01断面図

1. 耕作土 2. 黒灰色粘砂質土 3. 黄色粘土ブロック 4. 黒色粘砂質土 5. 黄褐色粘土 6. 暗茶褐色土 7. 黄褐色粘土ブロック 8. 黒灰色粘質土 9. 茶褐色粘質土 10. 暗茶褐色粘質土 11. 黒色粘質土 12. 黒灰色粘質土 13. 黄褐色粘土ブロック

部分では、再堆積土が厚く、S K06・S D01などの遺構状況は良好であった。

主な検出遺構は以下のとおりである。

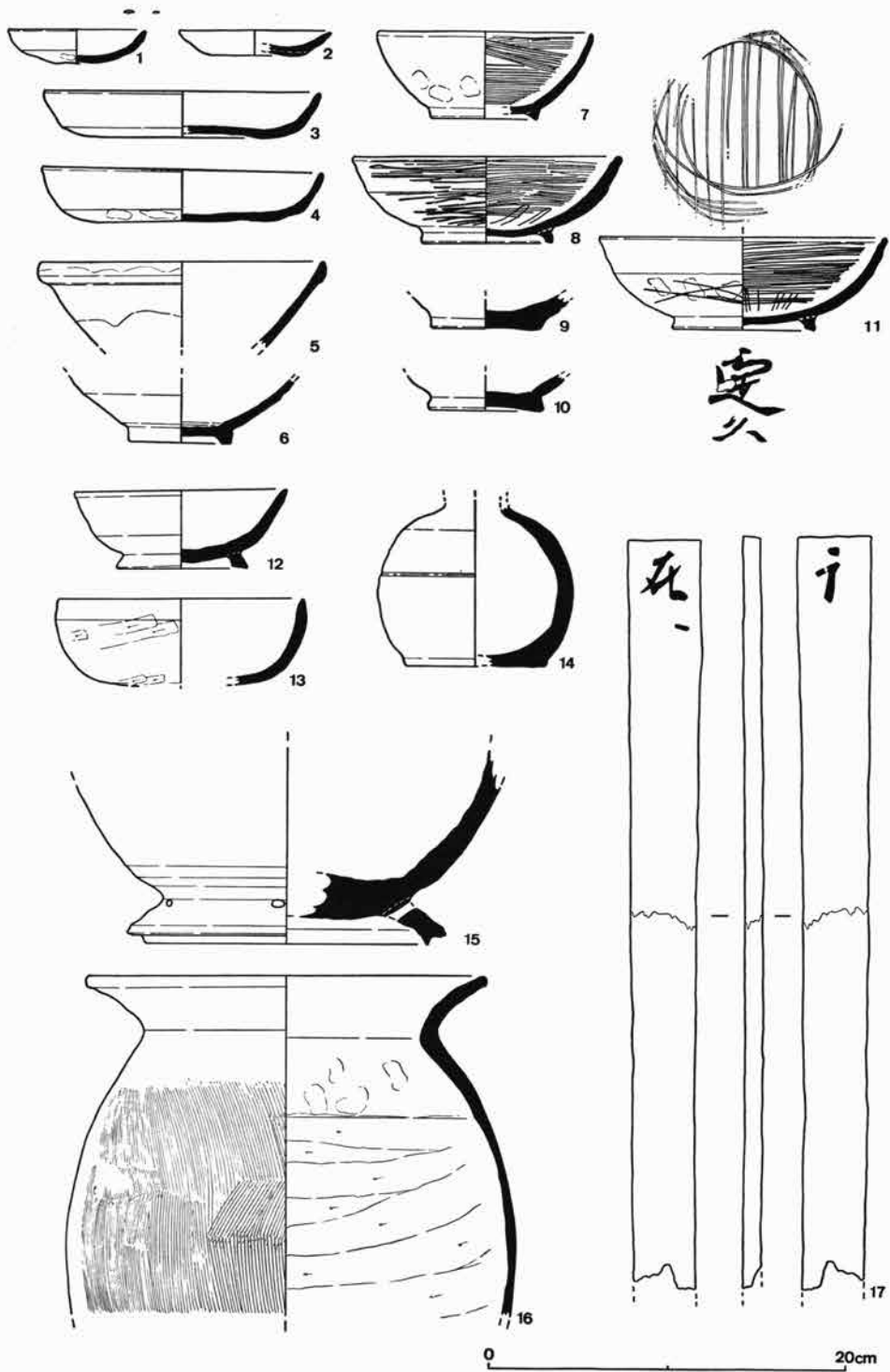
S B01 トレンチの東側にのびる掘立柱建物跡である。南北2間以上の規模をもつ。全体の規模は不明である。柱間は約2.4mを測る。出土遺物はない。

S D01 東西にのびる溝である。約16mにわたって検出した。検出面での幅約2.6m・深さ約1.0mである。断面は逆台形を呈する。下層から平安時代の須恵器杯身・瓶、土師器皿、墨書のある木札などが出土し、土層からは鎌倉時代の瓦器、土師器皿などが出土している(第38図)。平安時代半ばに開掘され、鎌倉時代まで機能していたと考えられる。溝は、東側に向かってゆるやかな傾斜をもつ。

S K01・06・07は、埋土に瓦器の細片を含んでいることから、鎌倉時代のものと考えられる。S D02・04は素掘り溝である。時期は不明である。S K02・03~05は近世の土坑である。

S D01出土遺物(第38図) 1~11は第9~10層から、12~17は11~12層から出土したものである。

1~4は土師器皿である。1は口径約7.8cm、4は口径15.8cmを測る。5・6は白磁碗である。5は口縁部で、乳白色の釉がかかっている。口径約16.0cmである。12世紀前半。7・8・11は瓦器碗である。7は口径約12.0cm・器高約5.0cmを測る。内面にヘラ磨きを施す。外面はナデが主であり、ミガキを省略する。高台は断面三角形を呈し、粗略化された作りである。13世紀前半に属するものであろう。8は口径約15.0cm・器高約5.0cmを測る。口縁部を強く横ナデして稜を作る。端部内面に沈線をもつ。器体内外面にヘラミガキを密に施している。11は完形で出土した。口径約16.0cm・器高約5.3cmを測る。口縁端部内面に沈線を施す。器体内面にヘラミガキを密に施すが、外面はやや省略されている。見込みに平行線状の暗文がある。また、底部外面には図に示したような墨書が認められた。「定久」であろうか。8と11は、A地区S D02出土瓦器碗のうち、A-4形式としたもの



第38図 SD01出土遺物実測図

と類似する諸特徴を有している。12世紀中葉頃のものであろう。9・10は土師器碗の底部である。平底であり、底部外面に糸切り痕がある。

12は須恵器杯身である。口径約12.0cm・器高約4.5cmを測る。14は須恵器瓶である。底部外面に糸切り痕がある。10世紀前後のものであろう。

17は墨書のある木札である。12・14と近接して溝の底に貼り付いた状態で出土した。下端が折損している。残存長約42cm・幅3.8cm・厚さ約1.0cmを測る。墨書は両面に認められるが、器体の遺存状況が悪く判別できるのは「在」の一文字のみである。

13・15・16は古墳時代後期末葉の遺物である。混入遺物であろう。Bは土師器杯、15は須恵器の長頸壺、16は土師器の甕である。

(4) D 地区

仏南寺城のある山裾に位置する。約100㎡を開掘したが、宅地造成による削平のため遺構を検出することはできなかった。部分的に旧表土があり、その中から中世の土器類少量を検出したにとどまる。

4. おわりに

今回の発掘調査では、上述したように弥生時代中期から中世にかけての各種の遺構とそれに伴う遺物を多数検出することができ、里遺跡が長期にわたって形成された複合集落遺跡であることを明らかにすることができた。以下、今回の調査の成果と問題点を簡単にまとめ、結びとしたい。

①里遺跡は、弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代後期・平安時代末～鎌倉時代の4時期を中心とした遺構が重複して形成された複合遺跡である。今回の調査地点は、古墳時代後期に一時墓域となったが、他の時代は主に集落として利用されていた。遺構分布の中心はA地区であり、この地区を挟んだ隣接地点には今回検出した遺構と関連する遺構が広がっているものと予想される。

由良川南岸では、度重なる調査の結果冒頭で記したような中核的集落跡が各時代にわたって形成されてきたことが確認されている。それに対し、北岸では集落遺跡の調査としては味方遺跡の調査例があるのみで不明な点が多い。今回の調査は北岸域での集落遺跡の新たな確認事例として重要なものであり、この地域の集落遺跡の変遷を細かく検討していく上で貴重な資料を提供するものとなった。

②遺物の上では、A地区S D02・S E01出土資料が注目される。これらは12世紀代の一括性の高い遺物であり、この時期の土器組成をよく保っている。特にS D02出土瓦器碗は

完形資料に恵まれ、中丹地域でのこの器種の編年の研究資料として貴重な事例となった。

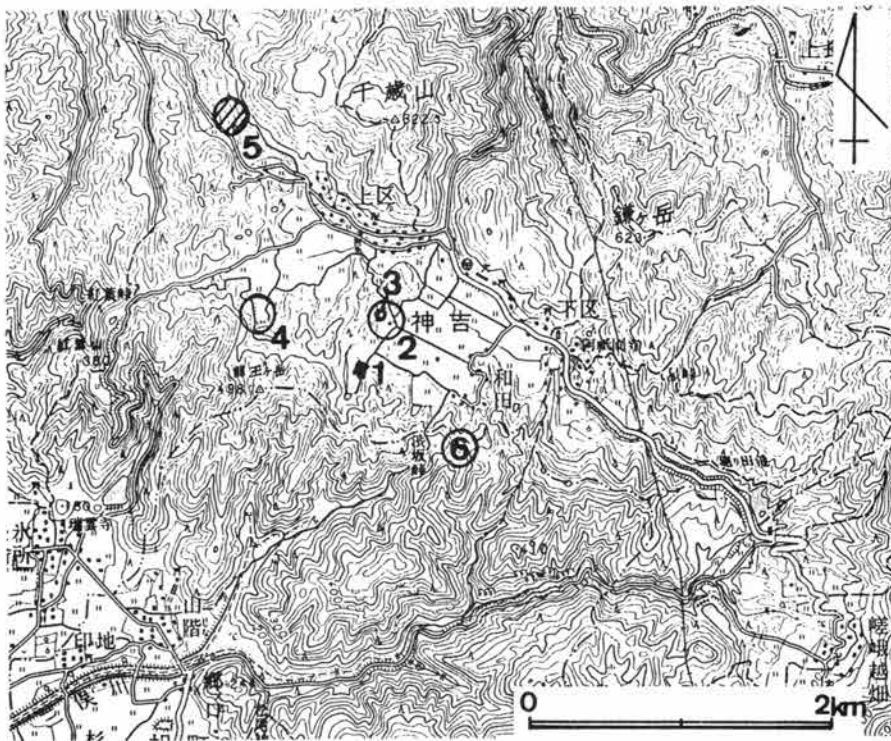
(田代 弘)

- 注1 『久田山』 綾部市教育委員会 1979
- 注2 平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注3 『京都府遺跡地図 第2分冊〔第2版〕』 京都府教育委員会
- 注4 『京都府遺跡調査報告書』第13冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 注5 『青野遺跡A地点発掘調査報告書』 青野遺跡調査報告書刊行会 1976
この調査を含め、現在までに14次の調査が実施されている。
- 注6 『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 注7 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注8 西岸秀文他「西町遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注9 小山雅人「野崎古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注10 『京都府遺跡調査報告書』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 注11 伊野近富氏による編年案。注10文献所収。48～54頁。
- 注12 『多利遺跡群発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1987

3. 塚本古墳発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府営ほ場整備事業に伴うもので、京都府農林水産部耕地課の依頼を受けて実施した。調査は、京都府教育委員会と当調査研究センターが合同で実施し、京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係技師森下衛、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美・主任調査員引原茂治が担当した。現地調査にあたっては、墳丘部を当調査研究センターが、周辺部を京都府教育委員会が実施した。また、京都府教育委員会、南丹教育局、八木町教育委員会、神吉和田・上・下各自治会等の関係諸機関からご協力いただいた。^(注1) 現地作業については、地元有志の方々等に参加していただいた。



第39図 遺跡分布図

- | | | | |
|--------------|---------|---------|---------|
| 1. 塚本古墳(調査地) | 2. 殿若遺跡 | 3. 殿若窯跡 | 4. 鎌谷窯跡 |
| 5. 石ヶ迫古墳群 | 6. 神吉城跡 | | |

塚本古墳は、京都府船井郡八木町神吉和田塚本に所在し、亀岡盆地東側山間部に開けた通称「神吉盆地」という小盆地に位置する。標高は約 340m 前後で、亀岡盆地との比高差は、200m 以上ある。神吉盆地南側の山地から北に向かつてのびる丘陵先端部の微高地に築造されている。

神吉地域では、この古墳のほかに、鎌谷窯跡・神吉城跡が、周知の遺跡として『京都府遺跡地図』に記載されている。今回の調査中に、地元の方々から教えていただいたり、案内していただいたりして、新たに3か所の遺跡を確認した。そのうち、殿若遺跡は、土器片が多数出土する遺物散布地であるが、ほ場整備対象地に含まれているため、京都府教育委員会によって調査された。その結果、竪穴式住居跡が検出され、弥生時代終末期の集落跡であることが確認された。また、殿若窯跡は、採集した瓦片から、白鳳期の瓦窯跡とみられる。石ヶ迫古墳群は、横穴式石室を内部主体とする3基の古墳からなる後期古墳群である。このほか、和田地区には中世から近世にかけての宝篋印塔群などがあり、さらに分布調査がすすめば、多くの遺跡が確認されるものとみられる。

発掘調査は、5月25日から7月10日まで、当調査研究センターが、墳丘部の調査を実施した。その結果、埴輪片が出土し、古墳であることは確認した。しかし、埋葬施設は後世の削平により残存せず、墳丘も周辺部を削られかなり変形しているものと考えられた。これとともに、7月6日から31日まで、京都府教育委員会が周辺部の調査を実施した。その結果、この古墳が、二重の周溝をもつ方墳であることが確認された。8月9日には、共催で現地説明会を実施した。

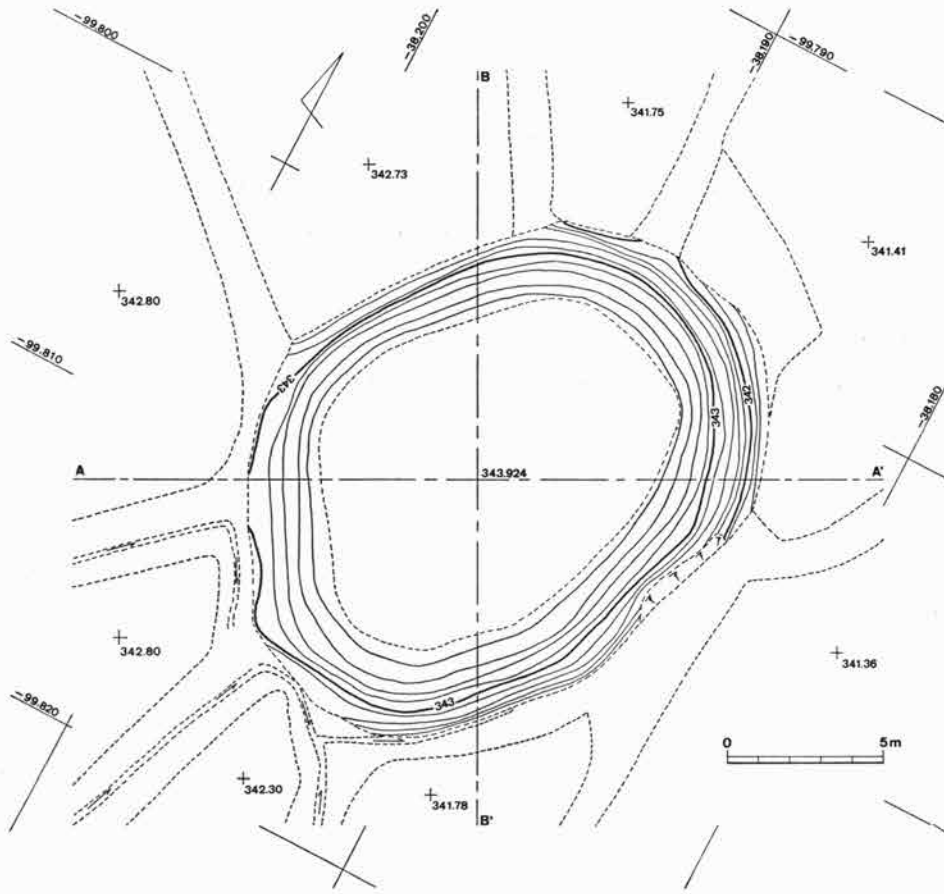
今回の調査は、二つの調査機関が実施したものであるが、全体としては同一古墳の調査である。特にこの古墳の全容を把握するためには、京都府教育委員会の調査成果は多大であり、この概要報告には不可欠である。したがって、森下技師にもその調査成果を執筆していただき、あわせて報告することとした。

2. 調査内容

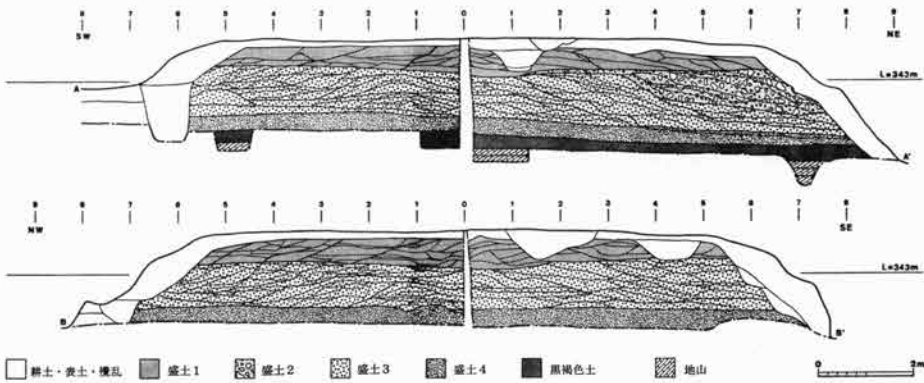
(1) 墳丘部の調査

調査前の状況は、段々状の水田の中に盛り上がる、長径約18m・短径約13.5mのいびつな楕円形状の小丘である。高さは、丘陵に近い南側で約1m・平地に面した北側で約2mである。上部は、ほぼ水平な平坦地で、標高は343.9mである。現状では、茶畑となっている。この墳丘の形状などから、かなり人手が加わっているとみられ、また、「昔、刀が出た」等の地元の伝承から、墳丘内がかなり攪乱されていることも予想された。

上部から掘削を行ったが、墳丘表面下10~30cmまでは、後世の耕作のため攪乱された状



第40図 調査地地形図



第41図 残存墳丘断面図

況であった。この攪乱土を除去し精査を行ったが、攪乱坑を確認したのみで、埋葬施設は検出できなかった。出土遺物も、わずかな近世・近代の陶磁器片のみであった。さらに掘り下げと精査を繰り返したが、埋葬施設は検出できなかった。

これとともに、墳丘斜面部から裾部の掘削も行った。斜面部の耕作土からは多数の埴輪片が出土した。これにより、この小丘が、古墳であることが確実にされた。斜面部北東及び南側から石積みを検出したが、その裏込めに埴輪片が含まれており、耕作に伴う土止め石垣と考えられ、古墳とは関係のないものと判明した。また、南側裾部には、湧水を溜める池が掘られていた。

その後、地山面まで墳丘の断ち割りを行ったが、埋葬施設は存在しなかった。本来、現状の墳丘上面よりさらに高く盛土されそこに埋葬施設が設けられていたものが、後世の耕作等によって削平されてしまったためとも考えられる。また、この断ち割りにより、墳丘が、ほぼ基底部から盛土によって構築されていることを確認した。

墳丘は、以下のように構築されている。各盛土は、10～30cm単位の厚さに細分される。

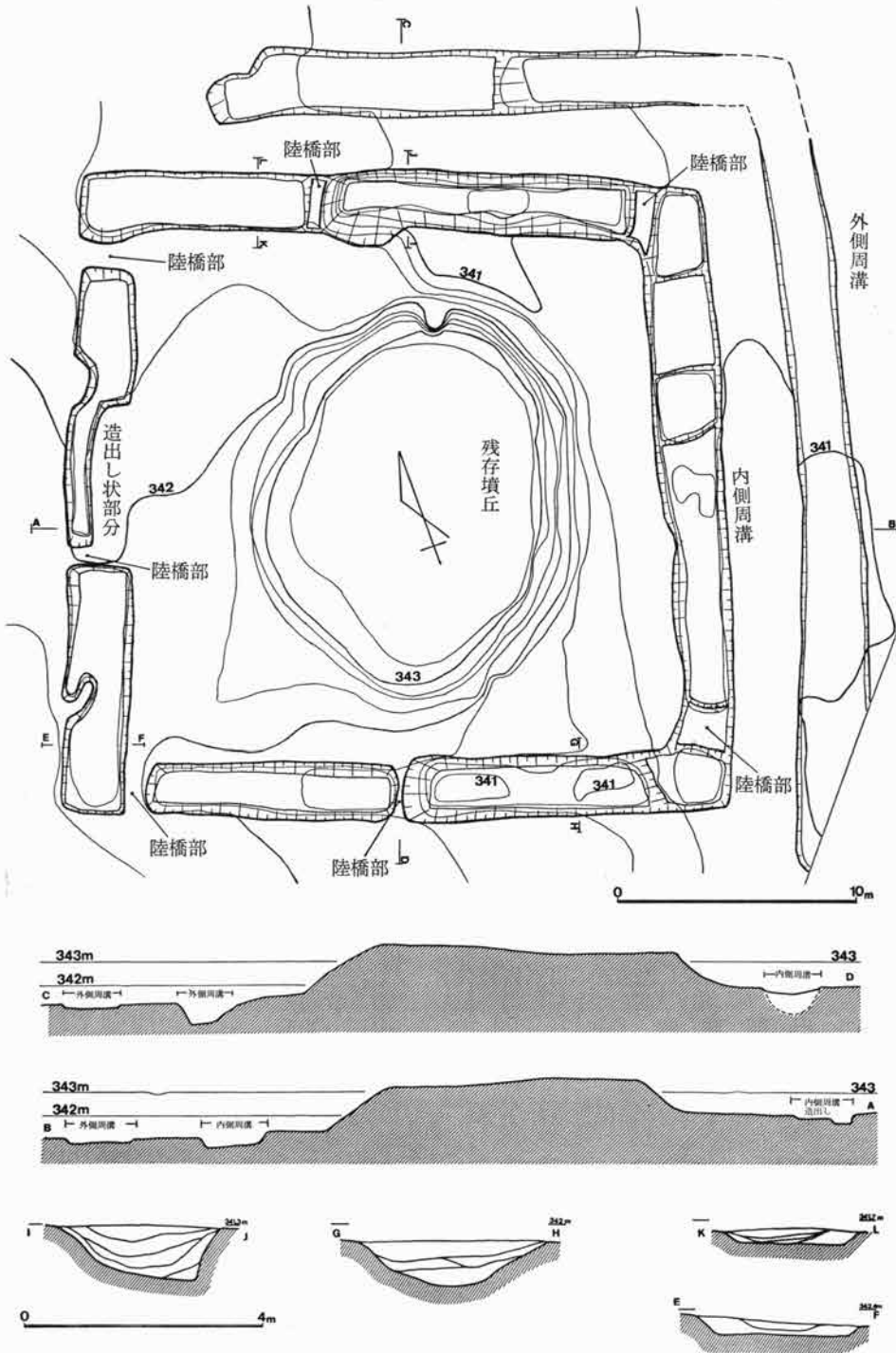
- 1) 最初に、緩やかに傾斜する旧表土とみられる黒褐色土層上に盛土(盛土4)を行う。北東側ではやや下降するが、ほぼ標高約342.2m前後の高さで面を整えている。
- 2) その上に、さらに標高約343.2m前後の高さまで盛土(盛土3)して、再度面を整えている。盛土は、現状の墳丘中央よりやや北側を中心として、外側に向かって行われている。盛土の土質は、黒褐色土中に黄灰色粘質土が混じったあまり風化していない土が主である。北東側には、黄灰色・白灰色粘質土が盛られており(盛土2)、固く締められている。これらの盛土は、周溝掘削時の排土である地山土・旧表土の黒褐色土を主として用いているものとみられる。
- 3) この上に、さらに、墳丘ほぼ中央を中心として、外側に向かって盛土(盛土1)する。この盛土の土質は、やや風化した茶灰色土が主である。この盛土は、標高約343.7m前後の高さまで残存している。それ以上については、削平のため不明である。

(2) 周辺部の調査

重機によって墳丘周辺の表土を除去し、精査を行った結果、残存する墳丘の外側約5mから方形に巡る周溝(内側周溝)を、さらにその2m外側から二重目の周溝(外側周溝)を検出した。残存墳丘周辺は、かなりの削平をうけており、現耕作土下は地山面である。これらの溝は、地山面で検出した。層位的には残存墳丘との関連は認められないが、埋土中から多量の埴輪片が出土しており、両者が無関係とは考えにくく、周溝と判断した。

① 内側周溝

幅約2.5mの溝で、残存墳丘の四周を巡る。底部は起伏に富み、部分的に陸橋状に掘り



第42図 調査地実測図

残した部分も認められた。溝の断面形態も一定せず、深いところでは「U」字形を呈するが、浅いところでは底部が平らで逆台形状を呈する。周溝の深さは、四辺の各辺でもまちまちであるが、およその傾向として、南・北の辺が深く(最深部約1.2m)、東・西辺が約20~30cmと浅い。なお、西辺の中央には、幅約6mで、周溝部に約1.5mとびだした造出し状の施設が確認された。また、陸橋部は各辺におよそ2か所ずつあるが、うち一方はかならず各コーナー付近に位置する。この周溝を含めた上での古墳の規模は、一辺約22mとなる。

周溝内からは多量の埴輪片が出土した。特に、造出し付近からは形象埴輪(盾形埴輪)片が、北辺中央の最深部からは木製埴輪が出土した。

② 外側周溝

幅約2.5mの溝で、古墳の北・東の二辺で検出した。深さ約10~20cmと浅く、部分的にとぎれるところもある。埋土から埴輪片が数点出土した。

周辺部の削平が著しく、この溝を二重目の周溝とする確証はないが、内側周溝とほぼ等間隔で巡ることや、溝幅がほぼ等しいことから、二重目の周溝と判断する。また、南・西辺側の周溝の有無についても明確ではないが、地形的にみると、周溝の認められない南西側が若干高くなっており、この部分が大幅に削平された可能性がある。したがって、本来は全周していたものとも考えられる。この溝を含めると古墳の規模は一辺約36mとなる。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどを埴輪が占める。わずかに、須恵器・土師器・瓦器片が周溝内から出土したが、直接古墳に関連するものとは考えられない。また、埋葬施設が削平されていたため、副葬品と考えられるものも確認できなかった。

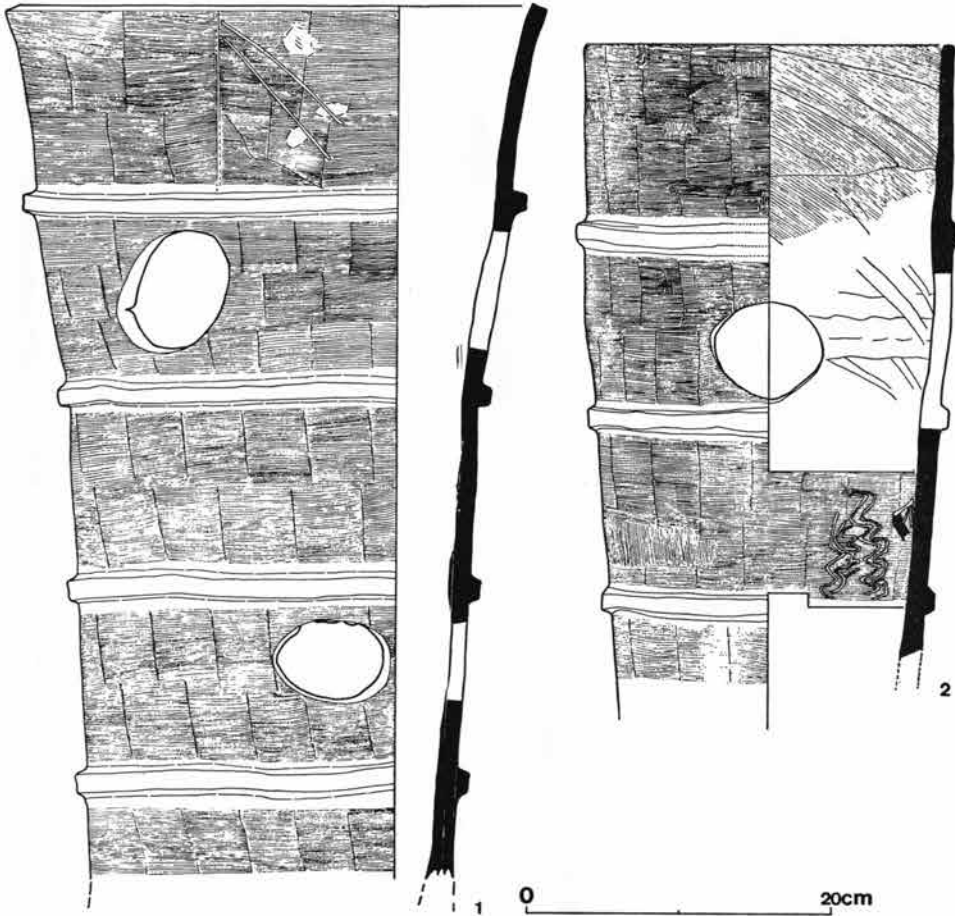
(1) 円筒埴輪

残存している口縁部片やヘラ記号をもつ資料の数量などから、少なくとも70個体が確認できる。大きさから2種類に大別される。大型品は、口径38cm前後・高さ60cm前後を測り、タガは4段。小型品は、口径25cm前後・高さ38cm前後を測り、タガは2段である。数量的には、大型品が16個体に対して小型品が54個体と、圧倒的に小型品が多い。

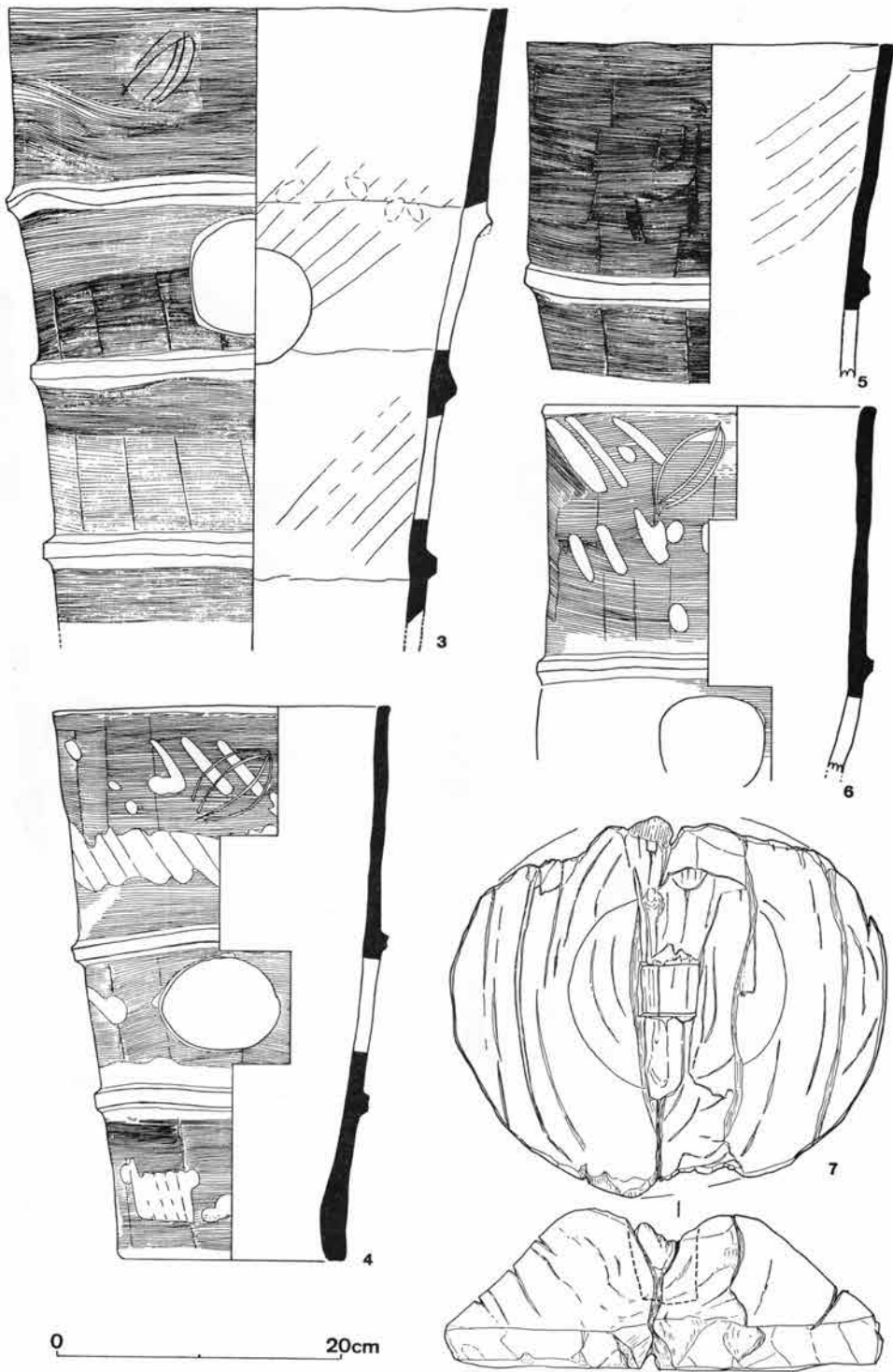
外面は横方向のハケ目調整で、ハケが器壁を一周する間に何度かその動きを停止する、いわゆるB種横ハケによっている。また、小型品のうちの数点に、横方向のハケ目調整を施す前に縦方向のハケ目調整を行った痕跡を部分的に残すものがある。内面は、基本的にナデ調整であるが、口縁部付近にのみ斜め方向のハケ目調整を施すものが、大型製品の中に数例ある(後述のI-3)。なお、ハケ目は、その粗密からいくつか分類される。

焼成は、黄灰色を呈し軟質のもの、黄褐色を呈し焼成良好のもの、青灰色で須恵質に焼成されたものがある。黒斑があるものはなく、すべて窯で焼成されたものと考えられる。
 上記のハケ目調整の特徴とあわせ、川西編年^(注2)のⅣ期に属する埴輪ということができ、
 期的には5世紀後半頃に比定することができよう。

このほかの特徴として、へら記号の多さがあり、全体の8割近くに認められる。破片の



第43図 埴輪実測図・へら記号拓影



第44図 埴輪・木製埴輪実測図

状況を考慮に入れると、ほぼ全個体にヘラ記号が施されていた可能性すらある。しかも、上記のハケ目の粗密は、このヘラ記号とほぼ対応する状況がある。ただし、ヘラ記号と埴輪の大小とはあまり関連が認められず、両者に共通するヘラ記号も認められる。ヘラ記号の付される部位は、1点(後述のⅠ-2)を除いて、すべて口縁部付近である。

現時点では、十分な整理作業が行えていないが、以下ではとりあえず、大きさ・ハケ目の粗密・ヘラ記号という3要素から資料を分類し、その概略を報告する。

【円筒埴輪Ⅰ-1】 大型品の中で、ハケ目が粗く、ヘラ記号が第43図1のもの。ハケ目は部分的に粗密もあるが、7本/cm程度を数える。9点が確認される。

【円筒埴輪Ⅰ-2】 大型品の中で、ハケ目がやや細かく、ヘラ記号として動物(鹿?)が描かれているもの(第43図B)。この記号は、当初、絵画的なものと考えていたが、出土点数からみて、記号と判断した。ハケ目は部分的に粗密もあるが、10本/cm程度を数える。3点が確認される。

【円筒埴輪Ⅰ-3】 大型品の中で、ヘラ記号が上記以外のもの(第43図Dなど)。ハケ目はやや粗く、Ⅰ-1に近い。ハケ目は部分的に粗密もあるが、8本/cm程度を数える。5点が確認される。

【円筒埴輪Ⅱ-1】 小型品で、ヘラ記号・ハケ目がⅠ-1と同様。31点が確認される。

【円筒埴輪Ⅱ-2】 小型品で、ヘラ記号・ハケ目がⅠ-2と同様。18点が確認される。

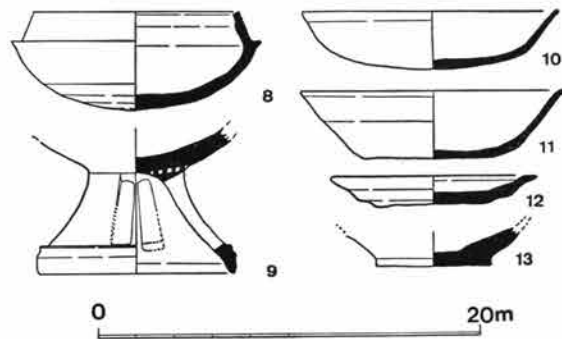
【円筒埴輪Ⅱ-3】 小型品で、長方形の四隅が突出したような形状の記号(第43図C)が施されたもの。ハケ目はやや細く、Ⅱ-2に近い。ハケ目は、部分的に粗密もあるが、9本/cmを数える。4点が確認される。

(2) 形象埴輪

小片となって出土したもので、全体の形態等は不明である。器壁には、直線文・連弧状文が描かれ、これらの構成から盾形埴輪と推定した。

(3) 木製埴輪(第44図7)

断面が台形を呈する円盤状の木製品で、平面形は楕円形を呈する(広い面で長径約30cm・短径約25cm、狭い面で長径約15cm・短径約13cm・高さ約11cm)。一見、笠形木製品を模倣したものであるが、狭い面から穿たれた断面四角形の穴は貫通せず、深さ約8cmでとま



第45図 須恵器実測図

る。笠形とすれば、穴の位置が逆になるように思われる。何らかの台であった可能性や、欠損している部分に装飾部が装着されていた可能性も考えられるが、現段階では即断できない。形状などからは木製埴輪とされているものに属するものとみられるが、実際どのような製品であったのかについては、類例を待ちたい。

(4) 須 恵 器

杯身8は、口縁部の立ち上がりが比較的高い。高杯脚部9は、三方に透かしをもち、端部は下方へ短く屈曲する。この2点は5世紀末から6世紀初頭頃のものと考えられ、埴輪から推測される古墳の築造時期に若干遅れる頃のものと考えられる。10～13は、8～10世紀頃の杯・皿・椀である。古墳との直接的な関連は想定できないが、周辺に居住する人々が古墳と何らかの関連をもったことを示すものかもしれない。

4. 小 結

今回の調査で、塚本古墳は、5世紀後半から末頃に築造された、二重の周溝をもつ方墳であったことが判明した。埋葬施設は削平のため残存していなかったが、木製埴輪を含む多くの埴輪が出土した。

この塚本古墳が築造された頃、亀岡盆地では、全長約80mの前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。また、各所に一辺30m前後の方墳が築造されている。これらの古墳は、千歳車塚古墳が南・西丹波を含む広域を支配した最高首長墓、方墳が最高首長に従属していた小地域の首長墓と考えられている。^(注3)このような中で、塚本古墳も小地域の首長墓としての位置付けが考えられる。神吉盆地は、亀岡盆地から若狭・北陸方面に向かう山間の中継地としての要衝であったと考えられる。

この周辺地域の古墳時代を考える上で、方墳は重要な手掛りであるが、詳細な発掘調査例はほとんどない。埋葬施設が残存していなかったとはいえ、今回の調査は、重要な資料を提供したといえる。

(森下 衛・引原茂治)

注1 橋本 稔・松本末野・黒田美代子・谷口明子・大槻益子・小槻小福・石橋愛子・山田きん子・小森ゆく子・谷口早苗

注2 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64号第2巻 日本考古学会) 1987

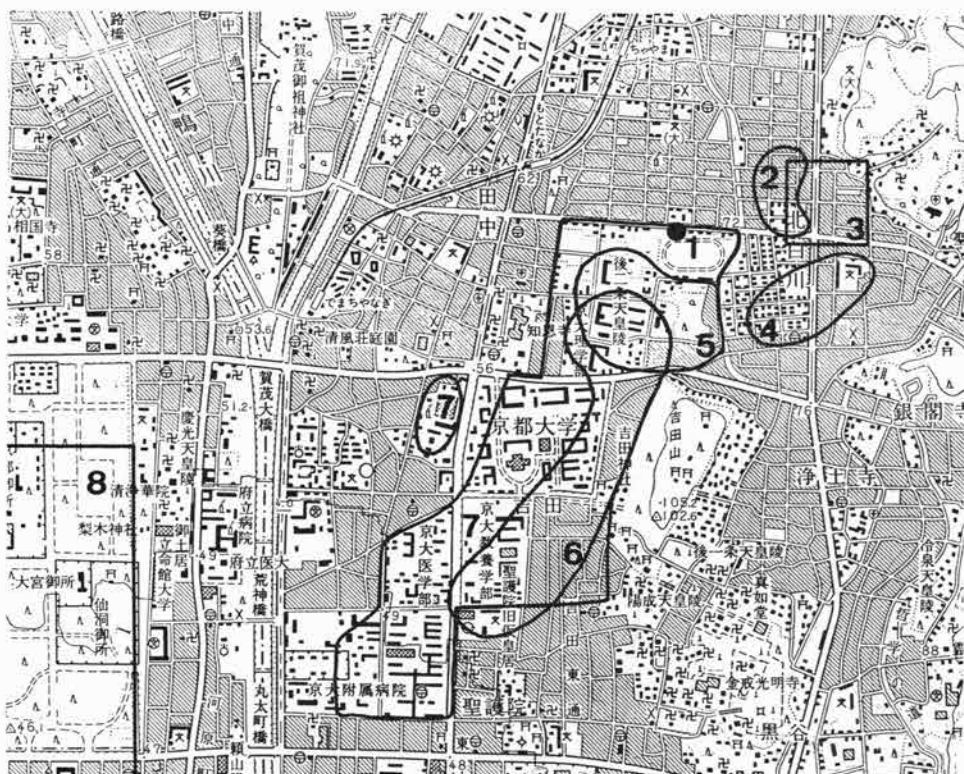
注3 平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

4. 京大北部構内遺跡発掘調査概要

1. はじめに

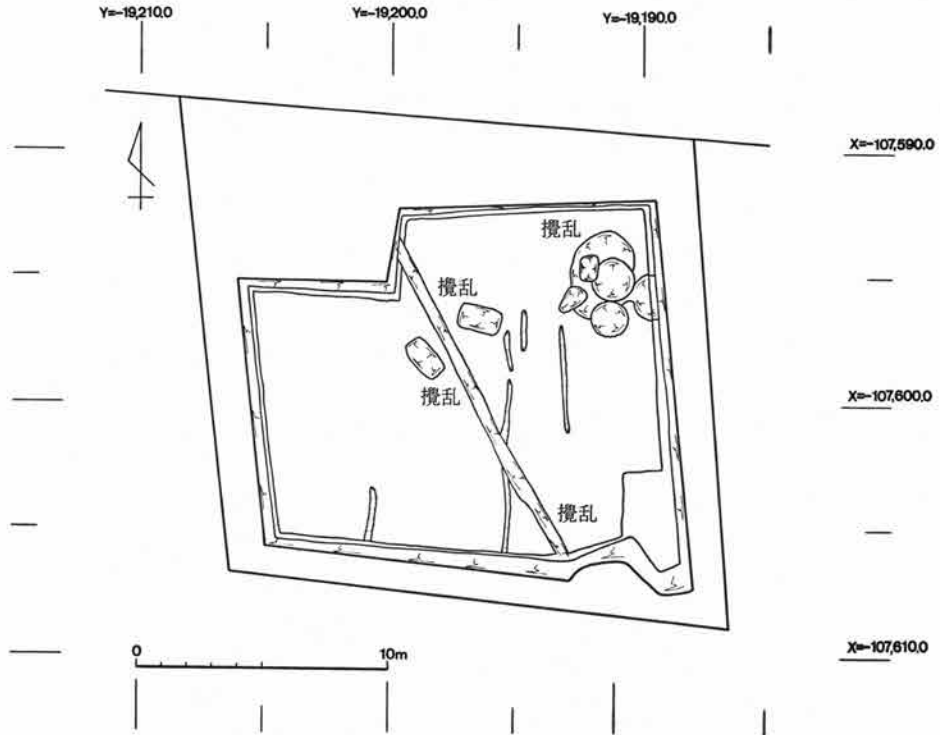
今回の調査は、京都市左京区北白川西蔦町27番地内に計画された京都府警察職員待機宿舍新築工事に先立ち、京都府警察本部の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

調査対象地は、京都大学が進めている構内遺跡調査のうち、京大北部構内の隣接地にあたる。この京大北部構内遺跡では、昭和48年以降数年にわたり発掘調査が行われ、縄文時代から中世・近世にかけての集落跡や墓地が確認されている。このため、京都府教育庁文

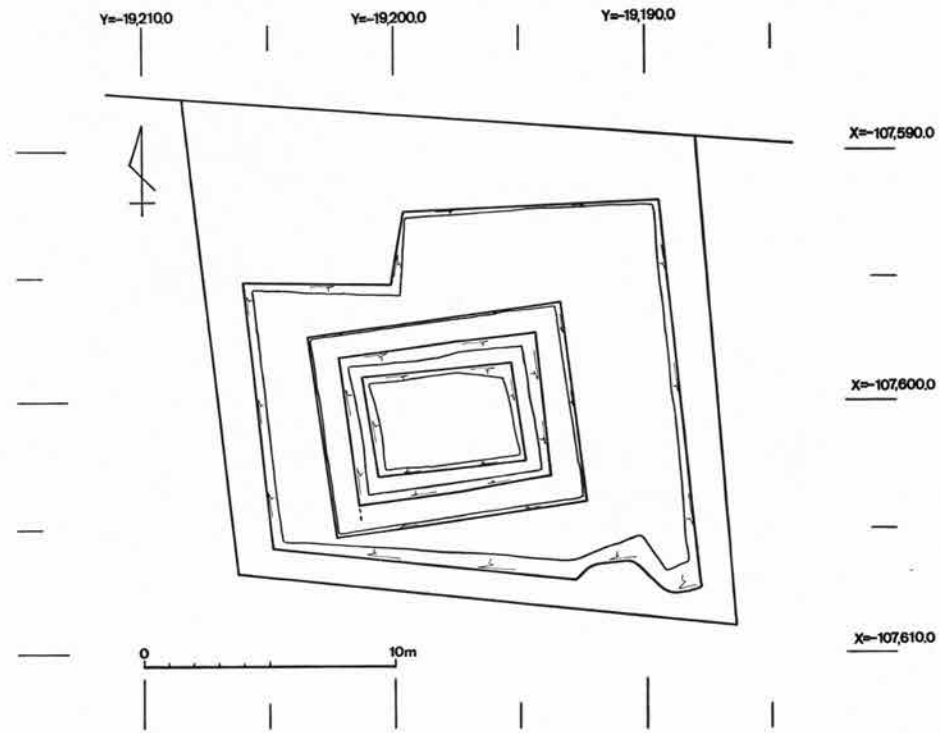


第46図 調査地周辺主要遺跡地図 (1/25,000)

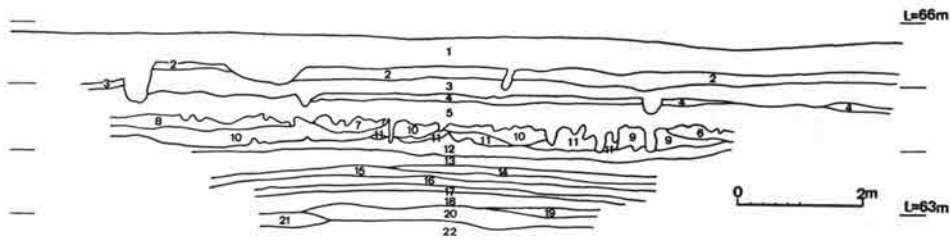
1. 調査地
2. 北白川上終町遺跡
3. 北白川廃寺跡
4. 北白川小倉町別当町遺跡
5. 北白川追分町遺跡
6. 京都大学構内縄文・弥生遺跡
7. 京都大学構内遺跡（北部構内・本部構内・西部構内・教養部構内・医学部構内・大学病院構内）
8. 平安京跡



第47図 黒色土上面検出遺構実測図



第48図 掘削トレンチ平面図



- | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1. 表土 | 9. 褐色砂(中粒・白味がかかる) | 17. 白色砂(小粒) |
| 2. 淡茶褐色砂質土 | 10. 白色砂(大粒) | 18. 褐色砂質土 |
| 3. 茶褐色砂質土(礫を多少含む) | 11. 褐色砂(中粒) | 19. 淡褐色砂(中粒) |
| 4. 暗茶褐色砂質土 | 12. 淡黒褐色砂(中粒) | 20. 白色砂(中粒) |
| 5. 黒色土 | 13. 褐色砂(細粒) | 21. 白色砂(大粒) |
| 6. 褐色砂(中粒・黒味がかかる) | 14. 白色砂(粒不揃い) | 22. 円礫(大粒の白色砂混じり) |
| 7. 黄褐色砂(中粒) | 15. 灰白色砂(小粒) | |
| 8. 灰白色砂(中粒) | 16. 灰褐色砂(小粒) | |

第49図 トレンチ南壁北側合成断面図

化財保護課と京都府警察本部との間で協議した結果、発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、平成2年4月23日に開始し、6月11日に終了した。発掘面積は、約225㎡を測る。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員三好博喜が担当した。また、本文の執筆は、三好が行った。

調査にあたって、京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都大学埋蔵文化財研究センターをはじめとする関係機関ならびに学生諸氏のご協力を得た。^(注1)記して感謝を表したい。

なお、調査に係わる費用は、京都府警察本部が全額負担した。

2. 調査経過

現地調査は、準備作業の後、平成2年4月23日にトレンチを設定することから開始した。重機による掘削は4月23・24日の両日で行い、その後人力による掘削を行った。調査は、顕著な遺構・遺物を検出することなく進み、礫層に達した。このため、人力による掘削は6月2日に終了した。写真撮影・測量・実測作業はその都度行い、6月11日には、すべての作業を終了し、現地を撤収した。

3. 周辺調査の状況

調査地は、京都市左京区北白川西蔦町27番地に所在し、京大北部構内遺跡の北端に位置している。

調査地周辺には、西日本の著名な縄文時代の遺跡である北白川追分町遺跡・北白川小倉



第50図 周辺調査地位置図^(注4)

町別当町遺跡・北白川上終町遺跡などが存在している。京大北部構内遺跡の調査では、1973年度の調査で、縄文時代後期の甕棺を伴う配石墓群、1982年度の調査で、縄文時代中期の竪穴式住居跡2棟が検出された。また、調査地南側にある京都大学北部グラウンドでは、1979年度^(注2)、1982年度^(注3)に試掘調査が行われている。この試掘調査では、グラウンド全域にわたって縄文時代から中世にわたる遺物の出土がみられ、奈良時代から平安時代にかけての良好な遺物包含層が遺存していることが確認されている。

このような状況の下にあって、今回の調査地においても、良好な遺物包含層の存在が予想され、遺構の検出も期待された。

4. 調査概要

基本的な層序は、約30cmの表土から約60cmの茶褐色砂質土、約50cmの黒色土と基盤層である礫層との間に砂層が約160cm堆積していた。部分的に近現代の攪乱が見られたものの、ほぼ良好な遺物包含層が存在していた。

遺構は、黒色土上面を精査した際に、南北方向の素掘り溝4条を検出した。いずれも幅20cm前後・深さ5cm程度を測る。土器の細片が若干出土したが、時期の特定はできない。他に顕著な遺構は検出できなかった。

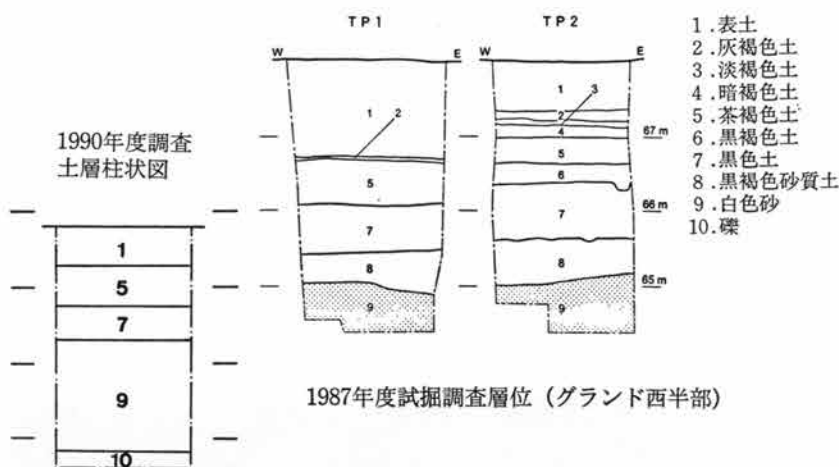
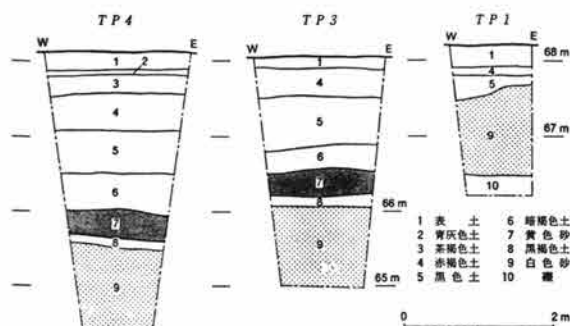
遺物は、茶褐色砂質土及び黒色土の掘削中に少量が出土した。いずれも細片で、縄文土器や土師器・須恵器・陶器・磁器などがある。

縄文土器では、沈線をもつものがあり、中期から後期に属するものと思われる。土師器や須恵器は、細片のため器種の特定制できないものが多いが、土師器の皿には平安時代から鎌倉時代・室町時代のものがみられる。陶器では、無釉陶器、神出窯産の鉢、信楽産の插鉢、瀬戸産の下ろし皿などがある。磁器では、中国製白磁、13世紀から14世紀頃の龍泉窯産青磁碗などがある。

5. まとめ

既述したように今回の調査地での層位は、ほぼ5層に大別できる(第51図)。1層目は、

1979年度試掘調査層位 (グラウンド東半部)



第51図 周辺土層図 (注5)

表土である。2層目は茶褐色土で、土色の濃淡でさらに細分できる。1979年度試掘調査及び1987年度試掘調査の第5層(茶褐色土)に対応するものと思われる。3層目は黒色土で、1979年度試掘調査の第5層(黒色土)、1987年度試掘調査の第7層(黒色土)に対応する。4層目は砂層で、1979年度試掘調査及び1987年度試掘調査の第9層(白色砂)に対応するものと考えられる。5層目は円礫層で、1979年度試掘調査の第10層(礫)に対応する。

遺物の出土状況を見ると、1987年度試掘調査のTP1第7層(黒色土)から奈良時代の土師器や須恵器がまとまって出土している。また、1979年度試掘調査の第5層(黒色土)は、主として平安時代の遺物を包含し、第3層(茶褐色土)は、室町時代の遺物を包含している。これらのことから、黒色土は、主として奈良時代から平安時代にかけての遺物包含層、茶褐色土は、主として中世の遺物包含層と考えられる。

今回の調査地に最も近い位置での調査は、1987年度試掘調査のTP3・TP4地点である。1987年度試掘調査が行われたグラウンド西半部に設けられた4か所の試掘坑の基本的

な層位は、上から表土(第1層)、茶褐色土(第5層)、黒色土(第7層)、白色砂(第9層)である。グラウンド西半部北側のTP3・TP4では、これらの層はいずれもグラウンド西半部南側のTP1・TP2に比べて1m低い位置にあり、表土が厚く覆う。今回の調査地での層位は、グラウンド西半部北側に設けられたTP3・TP4の層位とほぼ同様の状況を呈しているものと考えられる。

今回の調査では、良好な遺物包含層を確認したものの、顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。近接する京大北部構内遺跡の調査によると、調査地点周辺は、北白川扇状地の端部にあたり、基盤の白砂及び礫層が東から西へ向けて急激に落ちる地形となっている。本調査地も同様の地勢の下に位置していることが確認できた。

(三好博喜)

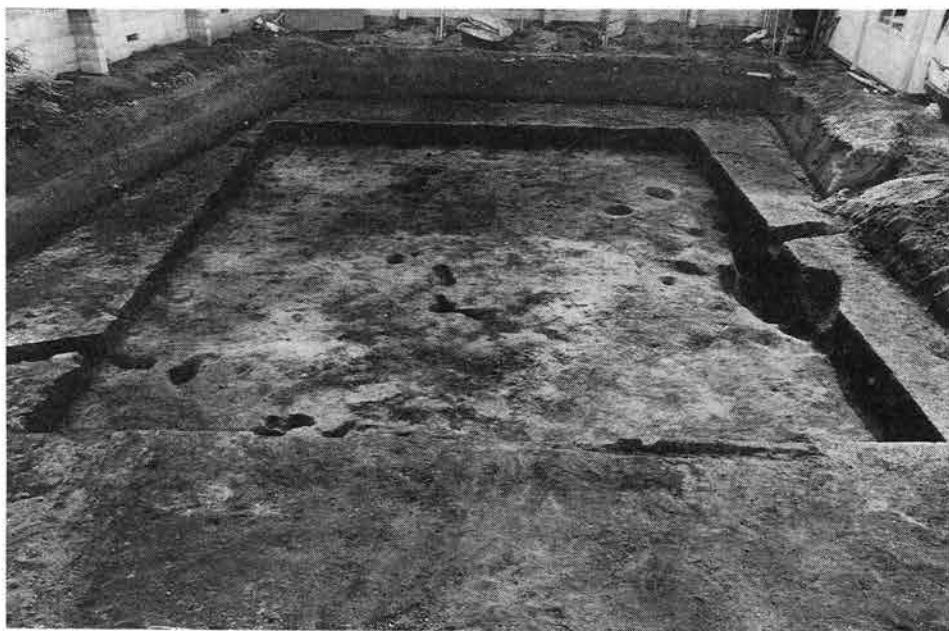
注1 松本とも子・早川千恵・三仙恵理子・藤波 武・勝山修志

注2 岡田保良・清水芳裕・吉野治雄「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1980

注3 西川幸治・久馬一剛・清水芳裕・森下章司「1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」(『京都大学構内遺跡調査研究年報1987年度』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1990

注4 注3 pp. 3 図2に加筆

注5 注3 pp. 2-3 図1, 図3に加筆



第52図 砂層上面掘削状況(東から)

5. 第二京阪道路関係遺跡（内里八丁遺跡） 平成2年度発掘調査概要

1. はじめに

内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪道路建設に先立ち、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

第二京阪道路関連遺跡の調査は、昭和63年に新田遺跡・内里八丁遺跡の試掘調査から開始した。その結果、内里八丁遺跡では、第二京阪道路建設ルート of 東隣りを北流する防賀川が、その流れを西北に転じる付近で遺構が検出されたため、面的な本調査に切り替えることとなった。この本調査対象地は、農道と防賀川によって3つの地区に分けられることから、南からA・B・C地区と名付け、平成元年度から南部のA地区で本調査を開始した。調査は、試掘調査で遺構を検出した6・8・9・10トレンチを中心に、2,500 m^2 の範囲で重機によって拡張した。また、試掘調査では、上層で飛鳥～奈良時代、下層で古墳時代の遺構面の存在を確認したため、元年度はA地区の飛鳥～奈良時代の遺構面の調査を実施することとなった。

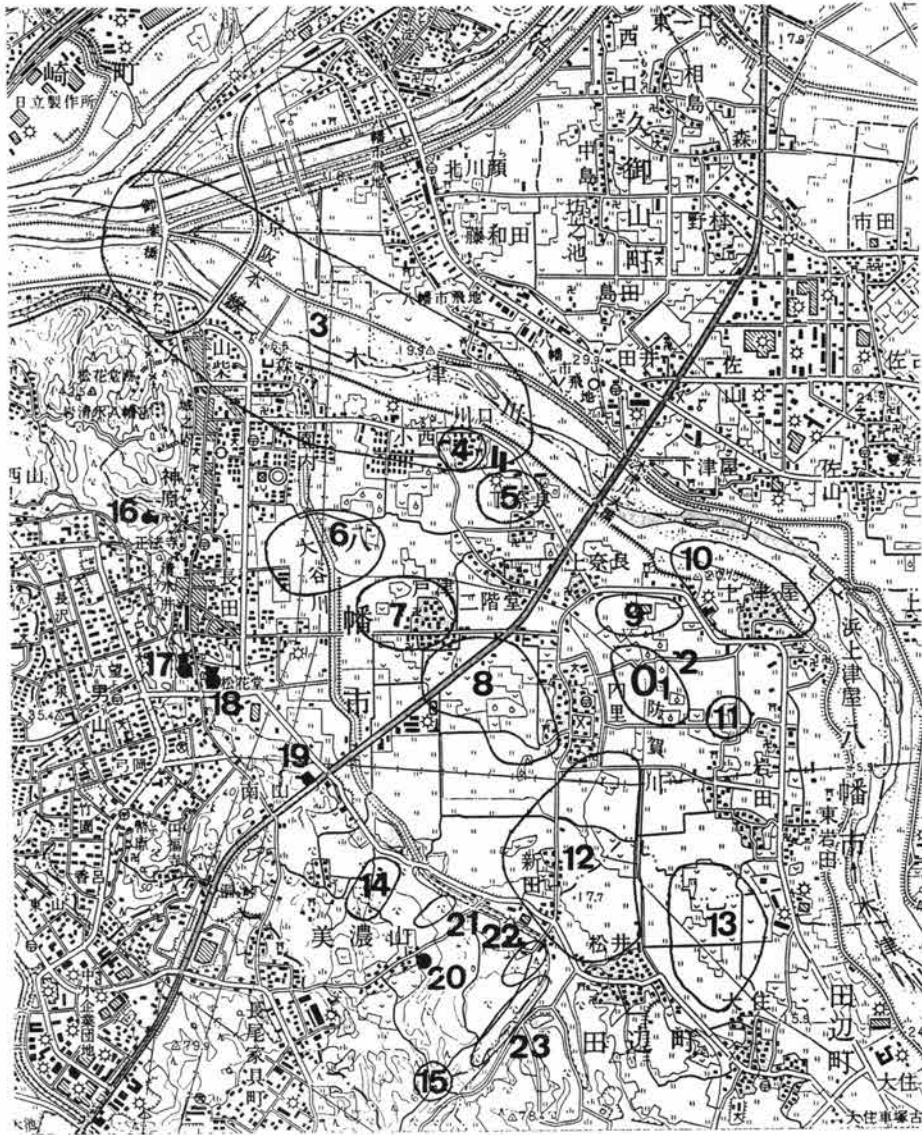
調査の結果、当該期の堅穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝等の遺構を検出したが、沖積地での調査であることから遺構埋土の判別に手間取り、当初予定の年度末までにこの遺構面の調査を終了することができなかった。このため、飛鳥～奈良時代の遺構面の一部と下層の調査は、平成2年度に継続することとし、元年度の調査は平成2年2月27日に終了した。平成元年度の現地調査は、当調査研究センター調査第2課・調査第3係長小山雅人、同調査員荒川 史が担当した。

平成2年度は4月17日から飛鳥～奈良時代の遺構面の調査を再開した。同遺構面の調査は、新たに掘立柱建物跡・井戸跡等を検出して同遺構面の調査を終えた。その後、調査は下層の古墳時代遺構面に移り、古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代前期の溝跡等を検出するとともに、さらに下層に弥生時代の遺構面の存在を確認するにいたった。平成2年度の現地調査は、調査第3係長小山雅人、同調査員竹原一彦が担当した。

今回の報告は、調査の終了した飛鳥～奈良時代の遺構面を中心に行い、下層面の調査成果については今後の報告で行う予定である。

なお、調査にかかる費用は建設省近畿地方建設局が負担した。

（荒川 史・竹原一彦）



第53図 調査地周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|--------------|-----------|------------|--------------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 内里八丁遺跡 | 3. 木津川河床遺跡 | 4. 川口環濠集落 | 5. 下奈良遺跡 |
| 6. 島遺跡 | 7. 戸津遺跡 | 8. 内里五丁遺跡 | 9. 上奈良遺跡 | 10. 上津屋遺跡 |
| 11. 西岩田遺跡 | 12. 新田遺跡 | 13. 魚田遺跡 | 14. 金右衛門垣内遺跡 | 15. 荒坂遺跡 |
| 16. 石不動遺跡 | 17. 西車塚古墳 | 18. 東車塚古墳 | 19. ヒル塚古墳 | 20. 王塚古墳 |
| 21. 狐谷遺跡(横穴) | 22. 女谷横穴群 | 23. 荒坂横穴群 | | |

2. 位置と環境

内里八丁遺跡のある八幡市は、山城盆地の南部にあり、西に京都府と大阪府の境でもある男山丘陵を配し、北と東には三重県布引山地に源を発する木津川が流れる。このため、

八幡市は大きく二つの地域に分かれる。西の男山丘陵とそれに続く河岸段丘、東の沖積平野に分かれ、内里八丁遺跡は木津川が形成した沖積平野部に位置する。

八幡市域では、丘陵部と沖積平野のいずれにも、多数の遺跡が分布していることが知られている。以下、時代を追ってこれらの遺跡を概観していく。

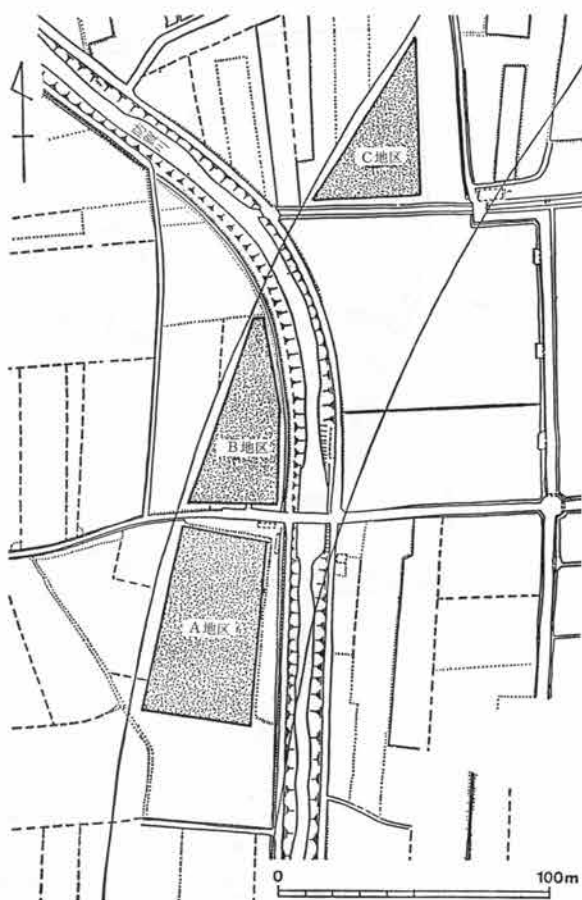
旧石器時代・縄文時代の遺跡は少なく、わずかに美濃山丘陵の金右衛門垣内遺跡が知られるのみである。この遺跡からは、ナイフ形石器や切目石錘が出土している。

弥生時代に入ると遺跡数も増加し、丘陵部では弥生時代

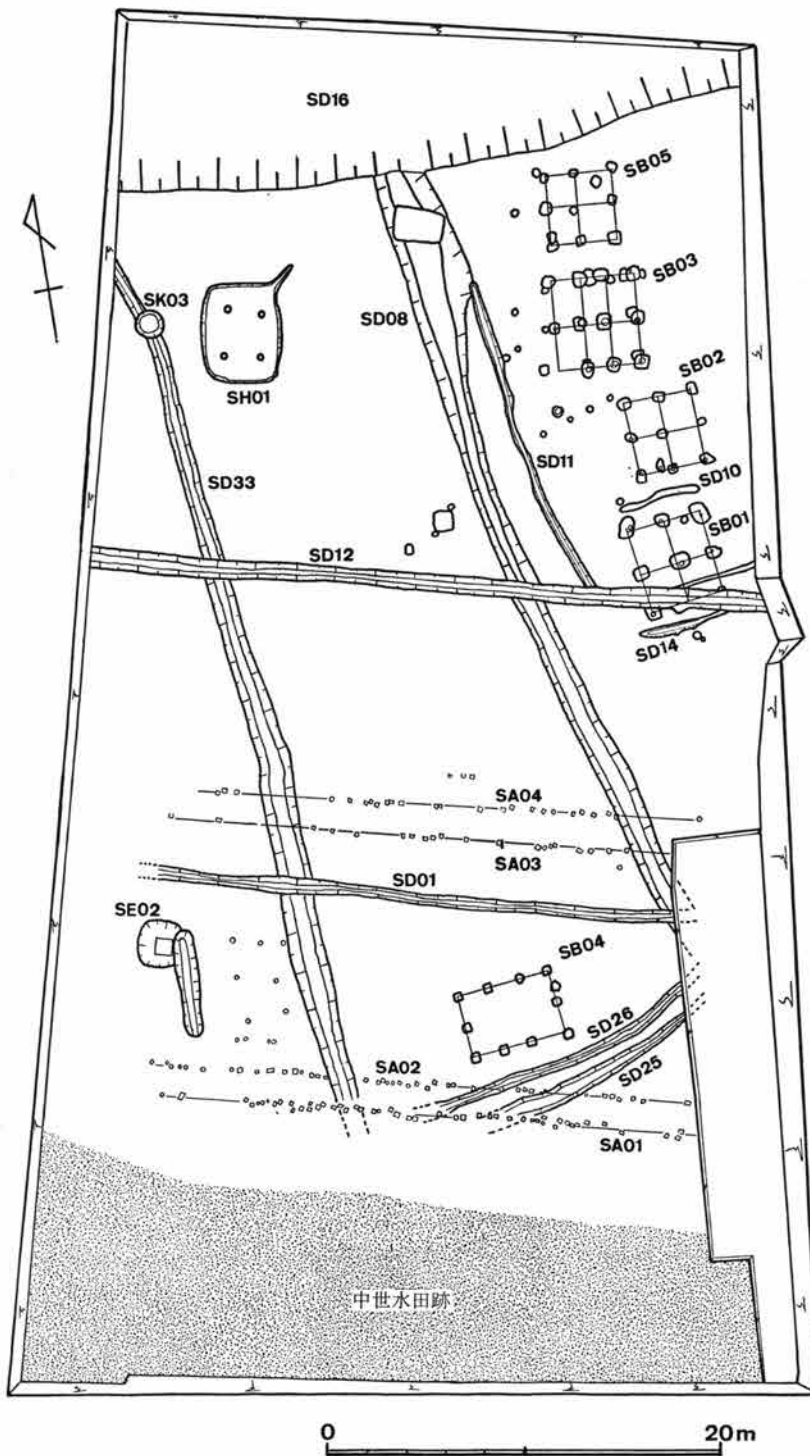
中期の金右衛門垣内遺跡・幣原遺跡、銅鐸が出土した式部谷遺跡、弥生時代後期の美濃山廃寺下層遺跡等がある。沖積平野では、弥生時代後期後半の木津川河床遺跡がある。

古墳時代では男山丘陵上や段丘縁辺部に古墳が築造される。前期の古墳としては、茶臼山古墳・石不動古墳・西車塚古墳・ヒル塚古墳といった50～100m前後の規模の前方後方墳・前方後円墳・方墳がある。中期古墳では、東車塚古墳・美濃山王塚古墳等の前方後円墳がある。前方後円墳でみれば、前・中期を通して市域北部の旧八幡地域に集中する傾向にある。古墳時代後期では、美濃山地区から田辺町大住地区にかけて狐谷横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群などの横穴墓が数多く造られる。このことは、美濃山地域周辺に移住させられたとされる、隼人との関連が考えられている。古墳時代の集落の調査例は少なく、木津川河床遺跡で庄内式併行期の住居跡が検出されているのと、新田遺跡で5世紀代のカマドを持った竪穴式住居跡が検出されているだけである。

奈良時代の遺跡の中で著名なものとしては、西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺の3寺院



第54図 調査区配置図



第55図 A地区第1遺構面平面図

跡と、四天王寺の創建瓦を焼いた平野山瓦窯が男山丘陵周辺部にある。

これまで見てきたように、八幡市域における調査の多くは男山丘陵周辺であり、平野部での調査はわずかに木津川河床遺跡と新田遺跡のみである。丘陵部にみられる大型古墳を築いた生産基盤を考える上で、今回の内里八丁遺跡の調査成果が期待される。

（荒川・竹原）

3. 調査の概要

A地区飛鳥～奈良時代の遺構面の調査では、多数の溝跡、調査地東北部で倉庫群、南部で掘立柱建物跡・井戸跡等を検出した。また、この遺構面では鎌倉時代の溝・柵列・水田跡と推定される粘質土層に残る人の足跡等も検出している。以下、主な検出遺構に関して述べる。

（1）検出遺構

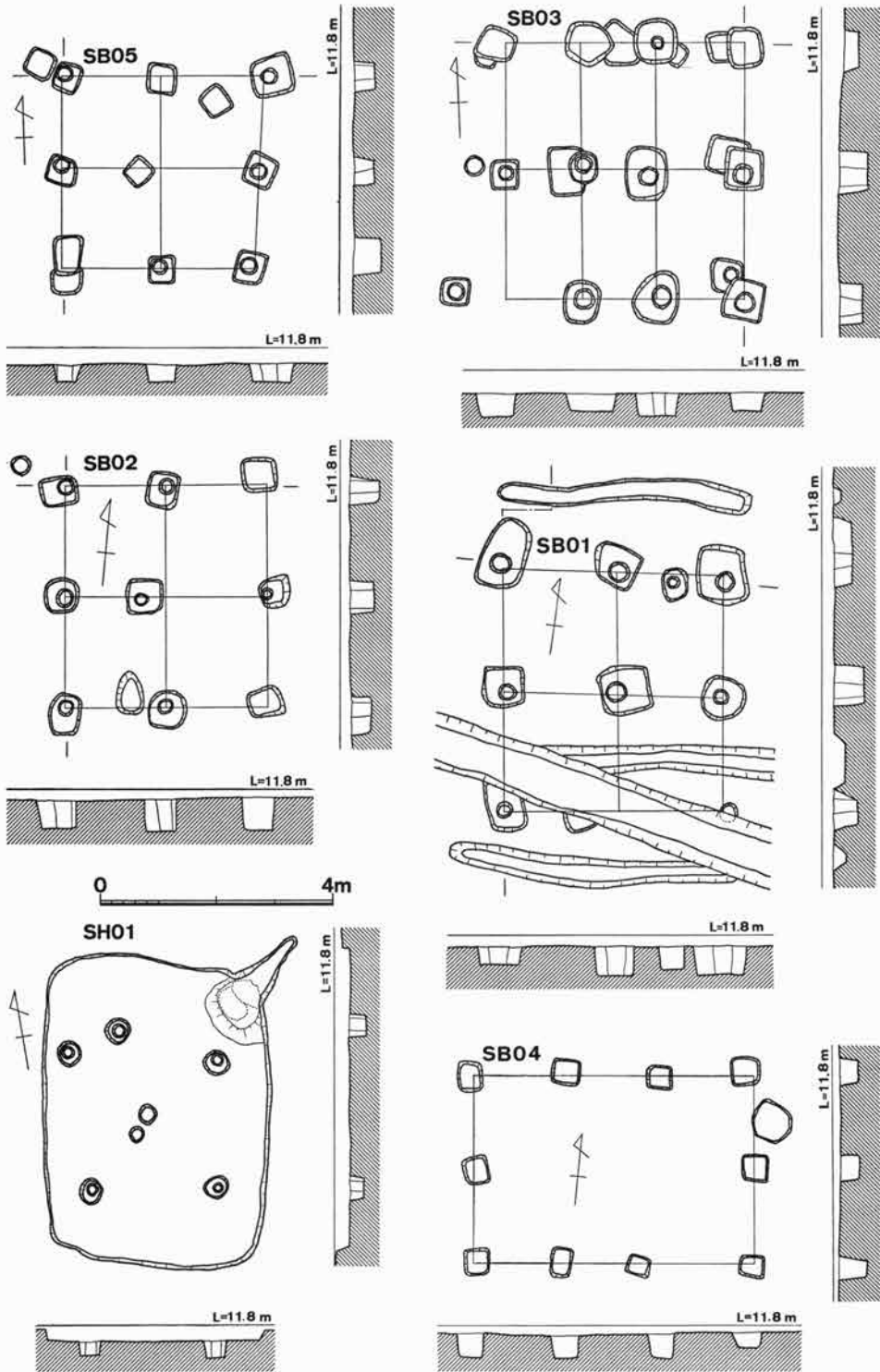
① 飛鳥～奈良時代遺構

S B01 A地区東北部で検出した2間×2間の総柱建物跡である。柱穴掘形は一辺が70～110cmの方形に近い平面形で、40cm前後の深さを測る。掘形内の調査によって、直径約30cm前後の柱痕跡が確認された。柱穴の心々間距離は、東西の桁行約3.8m・南北の梁間約4.2mの規模を測る。建物跡の北と南には建物跡に並走する溝(S D10・14)が存在する。S D10・14は、南北両端の梁間柱穴列から約1m程度の間隔を置いて併走し、長さも建物跡の桁行に対応するところから、雨落ち溝と見ることができよう。溝幅約30cm・深さは約20cmを測る比較的浅い溝である。建物跡の方位はN-6°-Eを測る。

S B02 S B01の北側やや東に位置し、約2.5mの間隔を置いて検出した、2間×2間の総柱建物跡である。柱穴掘形は一辺が50～70cmの方形に近い平面形で、50cm前後の深さを測る。S B01よりやや小規模な建物跡であり、柱穴の心々間距離は、東西約3.5m・南北約3.8mの規模を測る。建物跡の方位はN-6°-Eを測る。この建物跡付近の遺物包含層から、石帯(第58図18)が1点出土している。

S B03 S B01の北側やや西に位置し、約2.3mの間隔を置いて検出した、東西3間×南北2間の総柱建物跡である。柱穴掘形は一辺が60～80cmの方形に近い平面形で、30cm前後の深さを測る。柱穴の心々間距離は、東西の桁行約4.1m・南北の梁間約4.4mの規模を測る。北側桁行柱穴列と東側梁間柱穴列には、ほぼ同一場所で切り合い関係にある柱穴跡が存在することから、一度建て替えられたものとみられる。建物跡の方位はS B01・02と異なり、N-2°-Eを測る。

S B04 A地区南部で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴掘形は一辺が40～



第56図 検出遺構実測図

50cmの方形に近い平面形で、40cm前後の深さを測る。柱穴の心々間距離は、東西の桁行約4.8m・南北の梁間約3.2mの規模を測る。建物跡の方位は、SB01・02とはほぼ同一で、N-6°-Eを測る。

SB05 調査地東北部、SB03の北で約1.5mの間隔を置いて検出した、2間×2間の総柱建物跡である。柱穴掘形は一边が50~70cmの方形に近い平面形で、40cm前後の深さを測る。SB03より小規模な建物跡であり、柱穴の心々間距離は、東西約3.6m・南北約3.3mの規模を測る。中央の南北方向柱穴列は、中央からやや西に偏って存在する。建物跡の方位はN-2°-Eを測る。

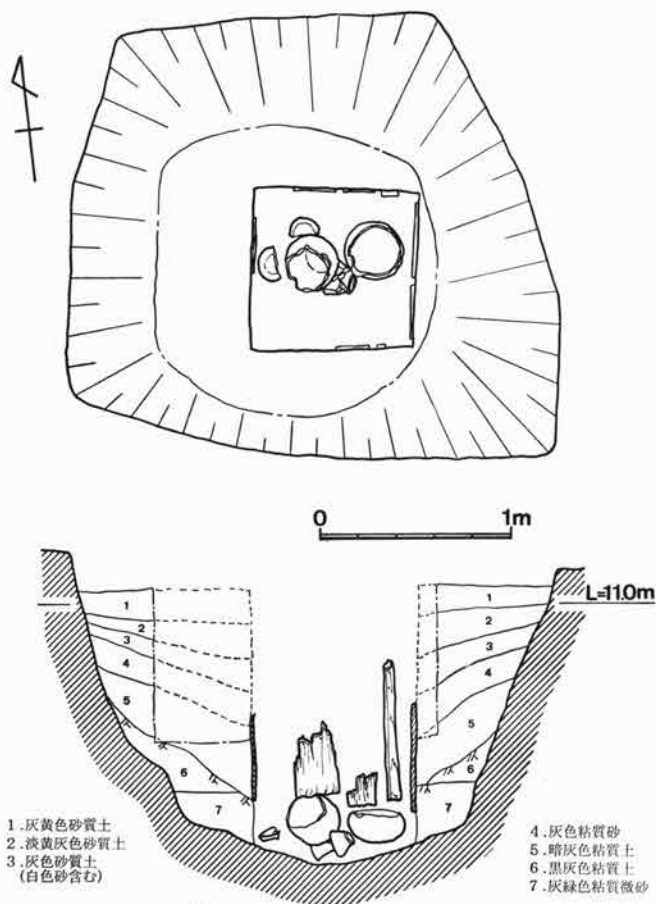
SH01 A地区西北部で検出した方形の堅穴式住居跡である。東西約3.8m×南北約5.2m・壁高は約20cmを測る。住居跡の東北コーナーに造り付けのカマドが存在する。カマドから東北にのびる約1mの煙道が存在する。カマドの焼成部は直径約60cmの範囲で赤褐色によく焼け締まり、その直上には炭・灰とともに土師器の長胴甕(第58図1)の破片が集中していた。カマドは住居跡の中でもやや高位置に造られており、床面はカマドの焼成面より下位に位置し、その差は約5cmを測る。床面には住居跡に伴う柱穴掘形が4か所にみられるが、カマド付近の柱穴はやや西に偏って存在する。カマドの対角コーナー付近の壁面は、内側にやや張り出した状況がみられることから、ここに住居の入り口が存在した可能性が高い。方位はN-9°-Eを測る。

SE02 A地区西南部、SB04の西約7m付近で検出した木枠組みの井戸跡である。方形に近い井戸掘形は、一边約2m・深さ約2.2mを測る。掘形内の中央部坑底近くで、方形に組まれた木製の井戸枠が遺存していた。井戸本体は一边約1mを測る。井戸枠は腐朽が著しく、全容をつかむことができないが、井戸の四隅には角材を使用し、各面には厚さ約2cmの板材を使用していた。角材・板材は縦位置で組まれていたが、基底部に胴木が認められず、井戸枠の下端レベルは一定していない。掘形の坑底は、下層の暗灰色粘質土層内で掘り下げを終えていることから、当時はこの粘質土層に湧水面があったとみれよう。

出土遺物としては、井戸底中央から須恵器の横瓶(体部半個体)・杯(半截)・長頸壺(破碎)、土師器の片口鉢(口縁の一部を欠く)が、まとめて置かれた状態で出土した(第58図14~17)。このうち、杯の外面底部には、墨書による記号が認められる。

SD08 A地区のほぼ中央付近を南北に走る素掘り溝である。溝幅1.2m・深さ約40cm前後を測る。溝底の状況からみて北流する溝であり、SD16に注ぎ込む。出土遺物には、須恵器(杯身・杯蓋等)・土師器(甕等)がある。

SD10 SB01の北側で検出した全長約4.2m・幅約30cm・深さ約10cmの東西溝である。出土遺物は見られない。



第57図 S E 02 実測図

出し、B地区に設けた11トレンチで北岸を検出している。流路幅は約26mを測る。堆積土層(砂・粘質土が互層)の状況から、西流する水路と判明した。出土遺物(第58図3～9)として、須恵器(甕・長頸壺・杯身・杯蓋・鉢等)・土師器(甕・高杯・椀・皿・蓋等)・布目瓦等がある。

S D25 S B04の南で検出した溝幅約70cm・深さ約30cmの東西溝であり、約9m分を検出した。出土遺物には、須恵器(甕)・土師器等がある。

S D26 S B04とS D25の中間で検出した溝幅約60m・深さ約30cmの東西溝であり、約12m分を検出した。S D25とは心々間で1.1～1.4mの間隔を置いて並走する。出土遺物には、須恵器・土師器等がある。

S D33 A地区西部で検出した南北に走る素掘り溝である。溝幅約1m・深さ約60cm前後を測り、溝の西部は後世の攪乱によって失われているが、約36m分を検出した。出土遺

S D11 S D08と縦柱建物跡群の間を、南北に走る素掘り溝である。溝幅約50cm・深さ約20cm前後を測る。出土遺物には、時期決定にいたらない土師器の細片がある。

S D14 S B01の南側で検出した、全長約4.5m・幅20～50cm・深さ約15cmの東西溝である。溝の東端をS D12により切られる。出土遺物として土師器・須恵器(第58図2・11)がある。

S D16 A・B両地区にまたがる東西方向の流路である。A地区内では流路の南岸を検

物には、須恵器(甕・杯身・杯蓋等)・土師器(甕・皿・碗・蓋等)がある。

② 鎌倉時代遺構

第1遺構面の調査では、飛鳥・奈良時代遺構とともに中世の遺構も同時に検出した。

S D01 A地区中央付近を東西方向に横断する素掘り溝である。幅約80cm・深さ約30cm前後を測る。溝の方位はE-14°-Sを測る。出土遺物には、土師器・瓦器等がある。

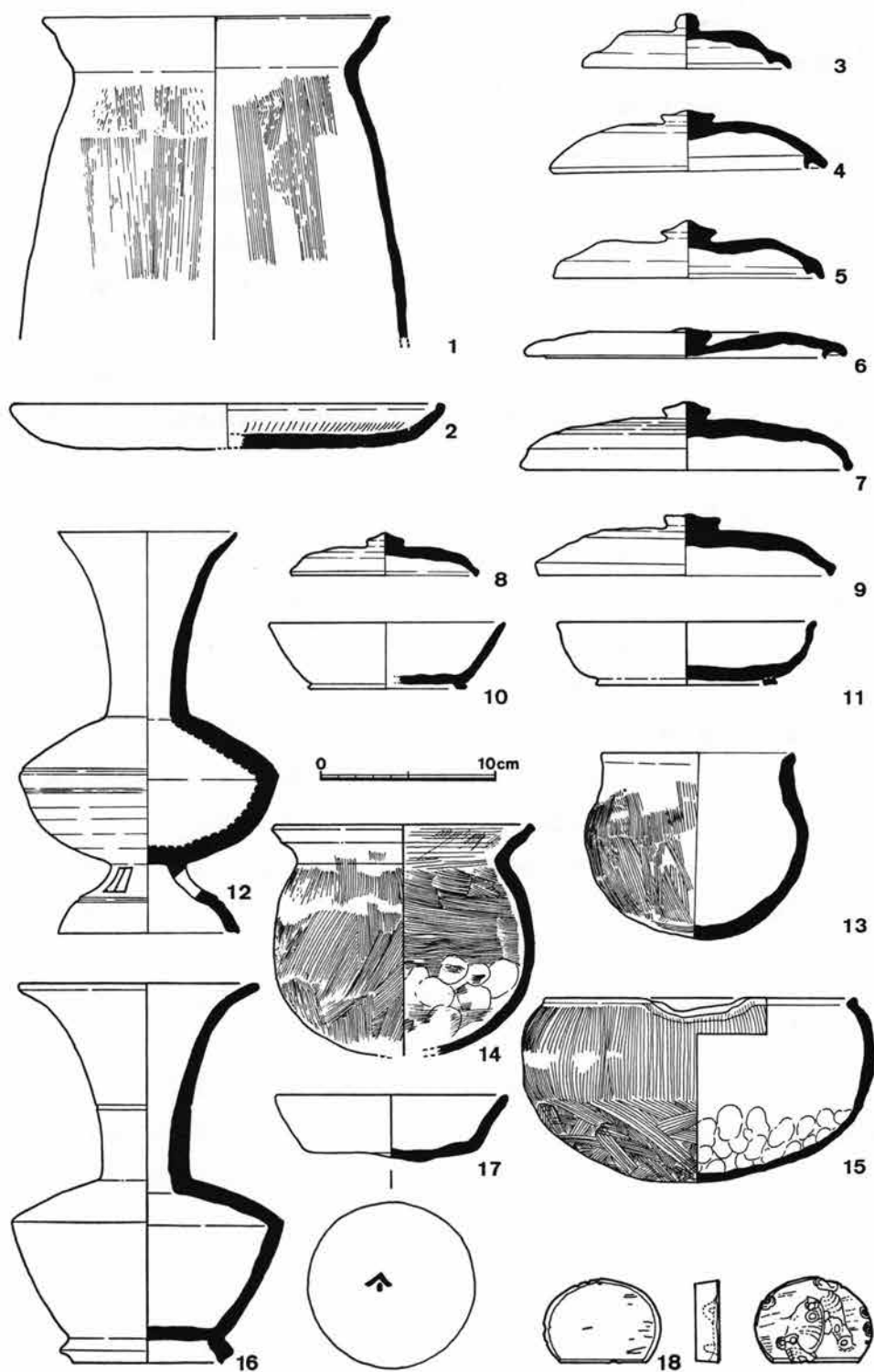
S D12 A地区南部を東西方向に横断する素掘り溝である。溝幅約50cm・深さ約30cm前後を測る。出土遺物には、土師器・瓦器等がある。S D01とは約15.5mの間隔を置いて並走状態にある。

S A01~04 A地区の中央以南で検出した東西方向の柵列跡である。南部の柵列S A01・02は約1.5mの間隔を置いて並走する。S A02の北約12mにはS A03が存在し、S A01・02と同じく約1.5mの間隔を置いて並走状況にある。柵列の柱穴は方形か長方形の掘形を持ち、一辺が10~20cm、深さは5~20cmを測る。個々の柱穴間隔は不規則であり、軸線上からはずれる柱穴も多数存在する。掘形内から瓦器碗の細片が出土している。

足跡 調査地の南端付近から、還元土壌(青灰色シルト)の拡がりを確認するとともに、人間及び禽蹄類の足跡を多数検出した。還元土壌の北端はS A01の南約9mに位置する。足跡内に充満した砂中から、磨滅した須恵質甕・土師皿・瓦器碗の細片が出土している。

(2) 出土遺物(第58図)

出土遺物には、須恵器・土師器・輸入陶磁器・布目瓦・石製品があり、出土した土器の一部を図示した。いずれも飛鳥~奈良時代のものである。1は、土師質の長胴甕である。口径20cm・最大体部径22.3cm・残存器高18.5cmを測る。口縁上端部に面をもつ。体部の内外面に縦方向のハケ目がみられる。2は、土師質の皿である。口径25cm・器高2.5cmを測る。口縁端部は、内側に肥厚させて丸く終わる。口縁部内面に放射状の暗文が存在する。3~9は須恵質の蓋である。3は、口径12cm・器高3.2cmを測る。天井部外面中央には、丸みを持った小さなつまみが付く。蓋の内面には短いかえりがみられる。4~6は、3に比べ大型の蓋であり、口径は15~18cmを測る。天井部外面中央に擬宝珠様つまみが付き、内面にはかえりを付している。蓋全体は、丸みを持つもの(4)、天井部が低く偏平化したもの(5・6)がみられる。7~9は、内面のかえりを持たない蓋である。天井部が低く偏平化し、擬宝珠様つまみも偏平化の度合いを強めている。口縁端部は面をつくり内側へ屈曲させている例が大部分を占めるが、端部を丸く終えるもの(7)も一部に認められる。大小の器種があり、小型の8は口径10.8cm、大型の7・9は口径17cm前後を測る。10・11は高台をもつ須恵質の杯身である。底部端からやや内側に付けられた高台は、「ハ」の字状を呈する。10は、口径13.6cm・器高3.9cm、11は口径15cm・器高3.7cmを測る。12は、須



第58図 出土遺物実測図

恵質の長頸壺である。口径10.4cm・器高22.8cm・体部径15cmを測る。やや丸みを帯びた体部に、長方形スカン窓(3か所)をもつ短脚が付く。体部に2条、脚部に1条の沈線が巡る。13は土師質の直口壺である。口径10.9cm・器高10.7cm・体部径12.8cmを測る。やや内湾気味に立ち上がる短い頸部をもち、口縁端部は外反し丸く終わる。体部外面は縦方向のハケ目、頸部内面に横方向のハケ目がみられる。14は土師質の甕である。口径15.2cm・器高12.2cm・体部径15cmを測る。口縁端部付近は指押さえによるアクセントをもつのが特徴で、端部は面をつくり肥厚気味におわる。内外両面はハケ目調整により仕上げるが、内底面に指頭圧痕を残す。15は、土師質の片口鉢である。口径18cm・器高10.5cm・体部径20.3cmを測る。内湾する口縁の端部は面をつくり、外上方に肥厚して終わる。外面上半は縦方向のハケ目、下半は不定方向の連続ハケ目で調整する。内底面には整形段階の圧痕を残し、上半部はナデ消す。16は、須恵質の長頸壺である。口径13.8cm・器高21.8cm・体部径15.6cmを測る。大きく外反する口縁端部は丸く仕上げ、頸部に1条の沈線を巡らせる。肩が強く張った体部は、最大径が上部1/3付近にある。「ハ」の字形の比較的高い高台は、内端面で接地する。17は、須恵質の杯身である。口径15cm・器高3.7cmを測る。外底面のほぼ中央付近に墨書記号が認められる。18は、石帯(丸軋)である。長さ3.4cm・幅2.4cm・厚さ0.7cmを測る。表面は特に平滑に仕上げるが、裏面は加工時のままである。裏面3か所に2個一対の糸止め穴をもつ。

4. ま と め

今回報告した第1面の遺構は、B地区・C地区にも拡がっていると考えられることから、現時点では遺跡の性格を把握しきれない点は否めないが、現在の知見を述べてまとめたい。

今回検出した竪穴式住居跡(S H01)・掘立柱建物跡群は、その分布に規則性が認められる。竪穴式住居跡は調査区北西に、総柱の掘立柱建物跡(S B01~03・05)は調査区北東に、そして総柱でない掘立柱建物跡(S B04)は1棟だけ調査区南部に離れて存在する。竪穴式住居跡と4棟の総柱建物跡の間には、南北に流れる溝(S D08)があり、この溝によって集落を区画していた可能性がある。また、建物跡は主軸方向などから2時期に分けられ、S B03・05・S H01、S B01・02・04が同時期と考えられる。出土遺物等からみて、前者が先行する。調査区南西で検出した井戸(S E02)は、出土遺物等からみて、後者のグループに属する。

調査区南部のS B04の南には青灰色のシルト層が拡がる。足跡等の存在から中世の水田跡とみることもできよう。この水田跡と遺跡の間にはS D01・12の2本の溝とS A01~04

の4列の柵列が存在する。溝と柵列は、それぞれ等間隔で存在するところから、条里に関連する遺構の可能性が高い。

調査地北端部を東西に流れる大溝S D16は、溝の北側の肩をB地区の試掘トレンチで検出しており、幅約26mの溝である。この溝から出土した遺物は、若干の布留式期の遺物が混入するが、主体は飛鳥・奈良時代であり、下層の段階では存在していなかったとみられる。この溝の性格は、現在のところ不明と言わざるをえないが、谷岡武夫氏が復原した条里の界線が付近を通ることから、条里との関連も指摘しておきたい。また、この調査地付近は足利健亮氏の復原による古代山陰道も通ることから、同様な方位関係をもつS D08・33との関連もあわせて指摘しておきたい。

今後、調査はA地区下層、さらに北部のB・C地区で実施するところから、詳細な報告は後の機会にゆずる。

(荒川・竹原)

圖 版

図版第1 杉末遺跡



(1) 調査地全景(東から)



(2) 調査地北壁断面(南東から)



(1) 調査地遠景(北から)



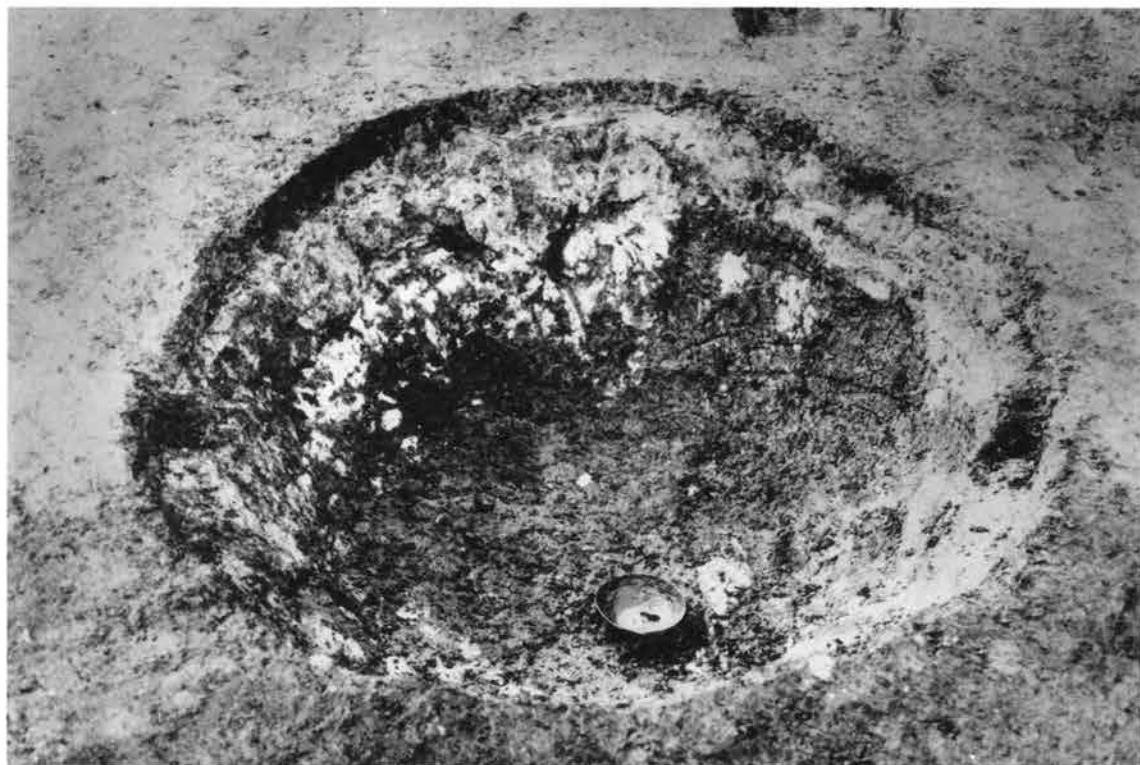
(2) A地区全景(北から)



(1) A地区 SB01全景(北から)



(2) A地区 SB02・03全景(南から)



(1) A地区 SE01全景(東から)



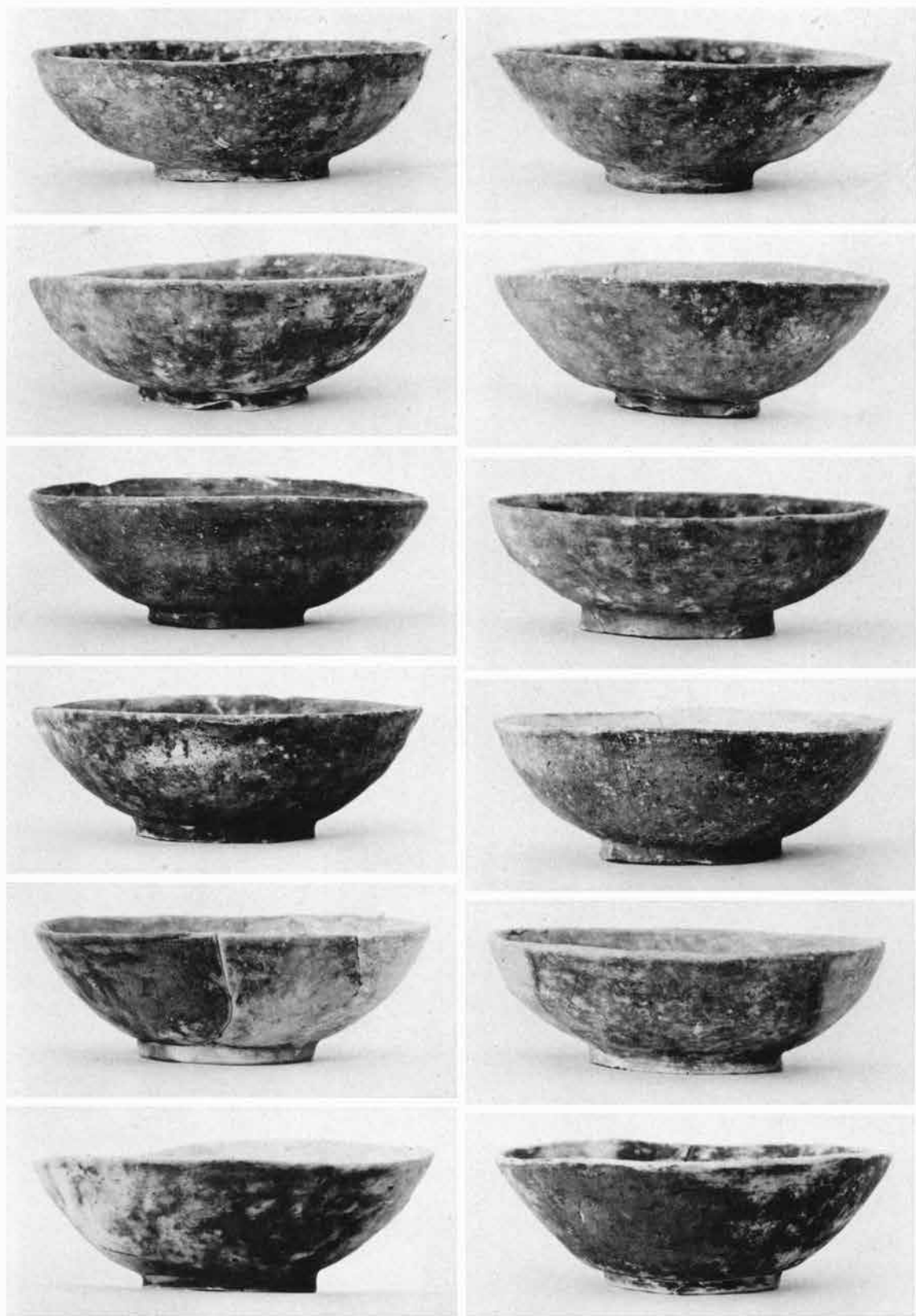
(2) A地区 SD02 (東から)



(1) B地区全景(北から)

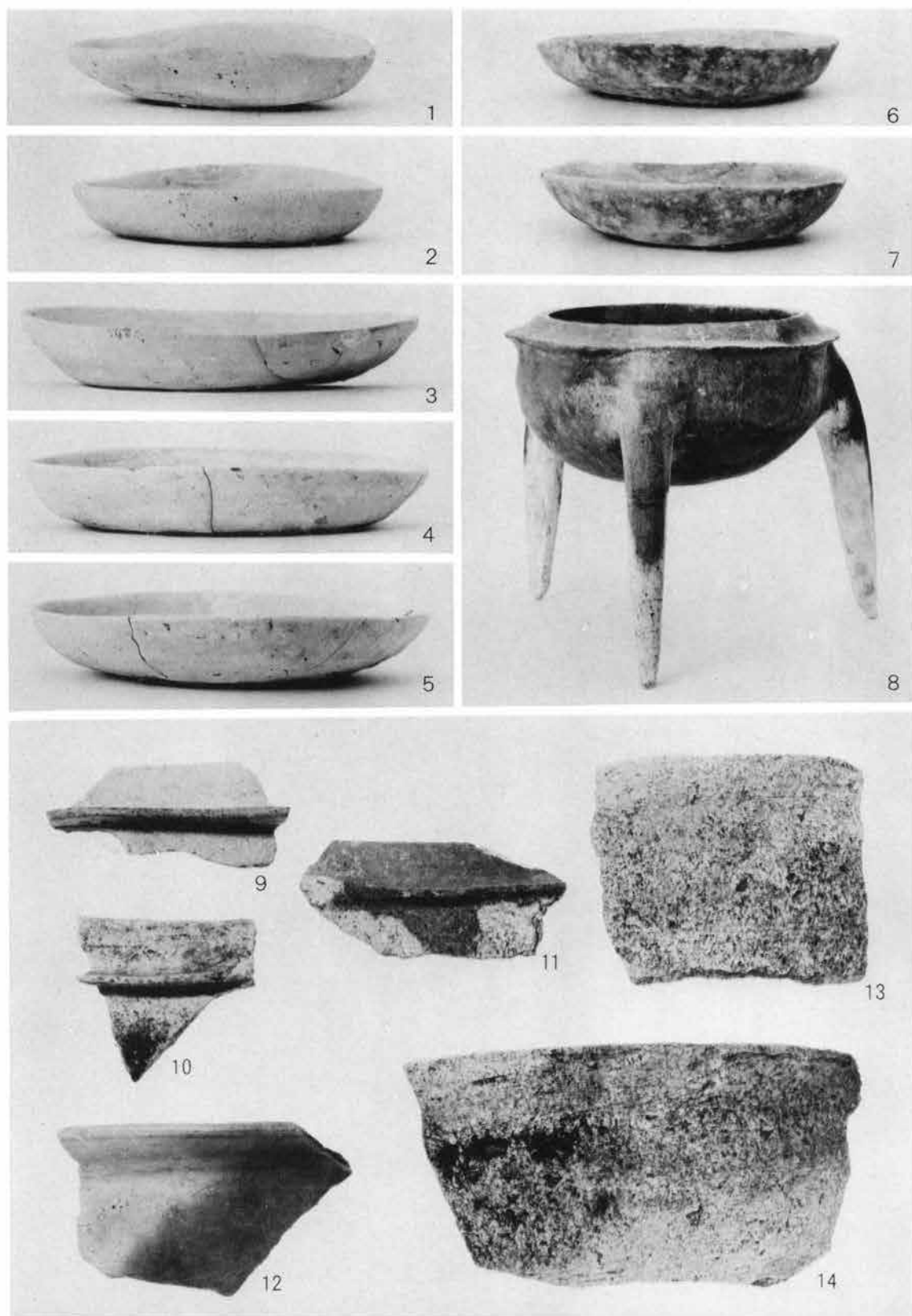


(2) C地区 SD01(北西から)



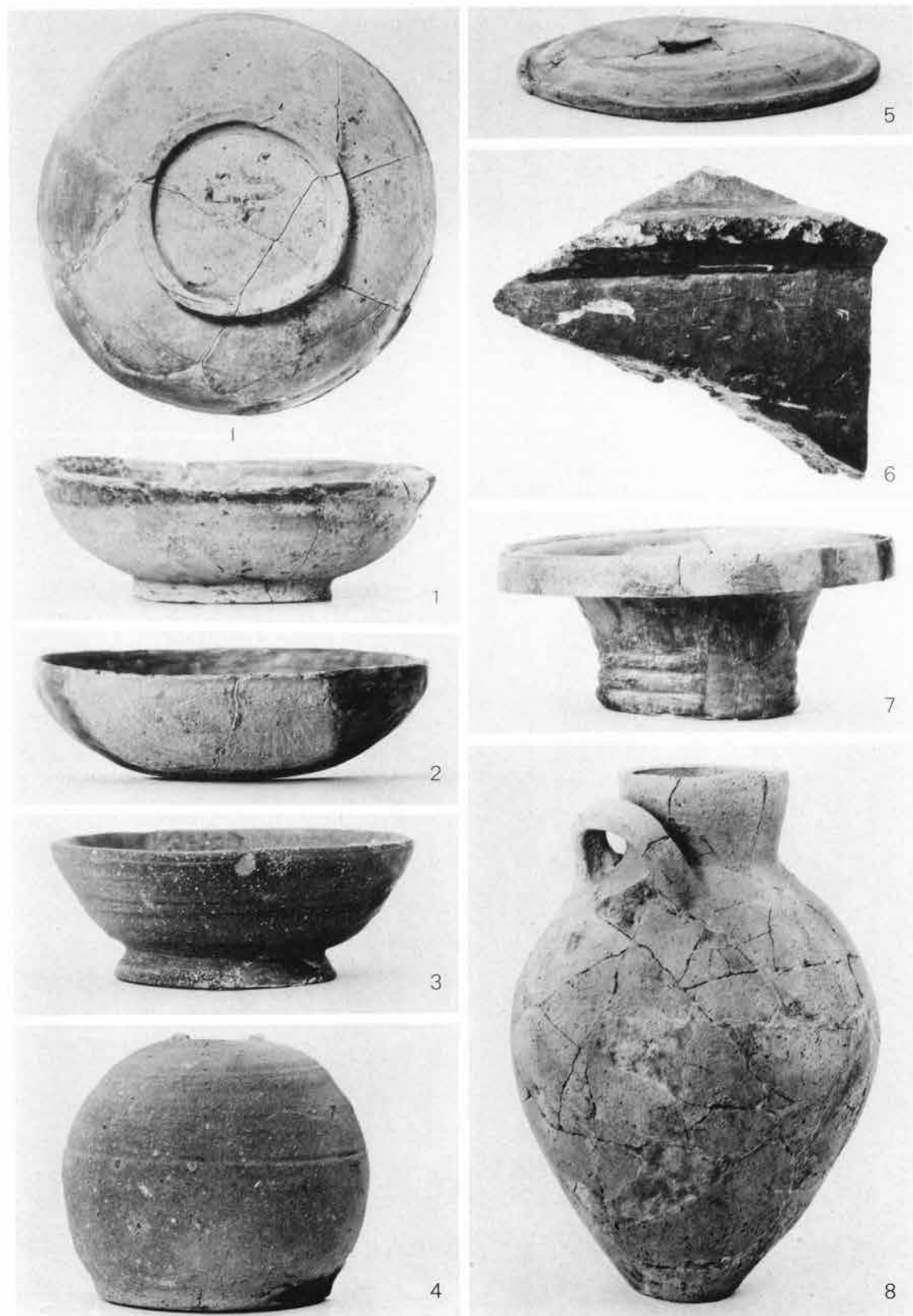
A地区 SD02出土遺物(1) 瓦器碗

図版第7 里遺跡



A地区 S D02出土遺物(2)

1~5:土師器皿 6・7:瓦器皿 8:三足釜(瓦器) 9~11:羽釜 12~14:土鍋



A·C地区出土遺物

1·3·4：C地区SD01 2：A地区SD01 5·6：A地区包含層 7：A地区SX01 8：A地区SX02

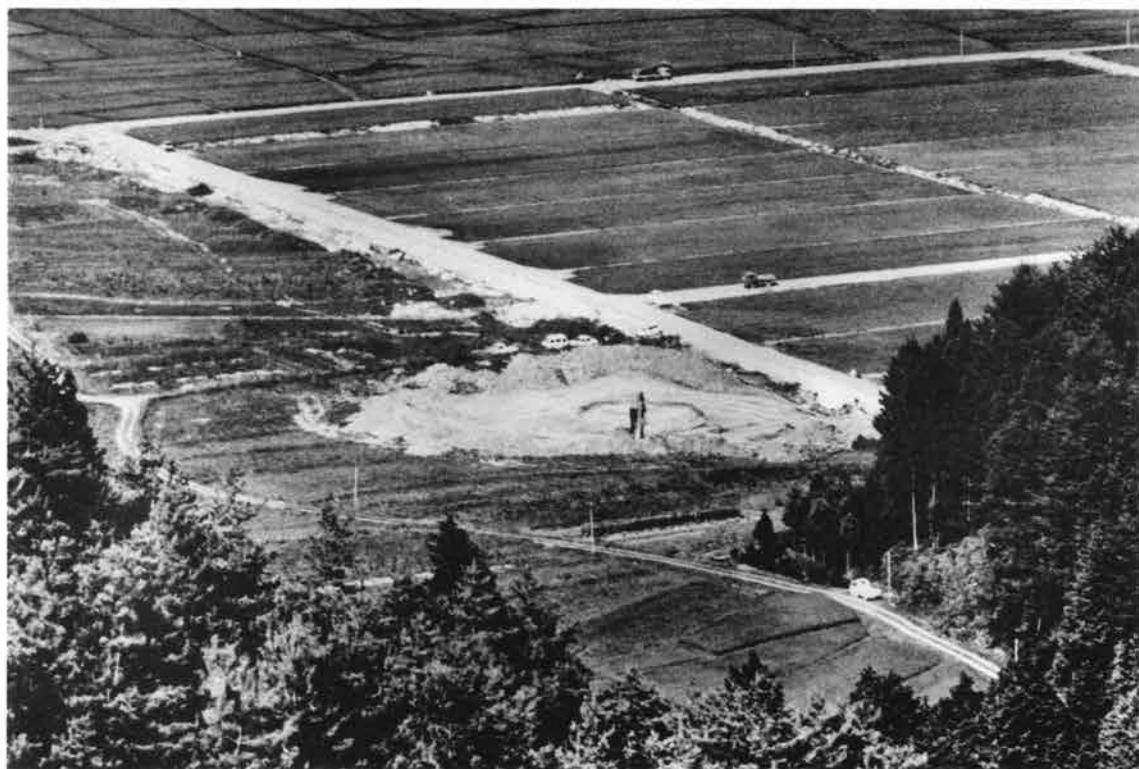
図版第9 塚本古墳



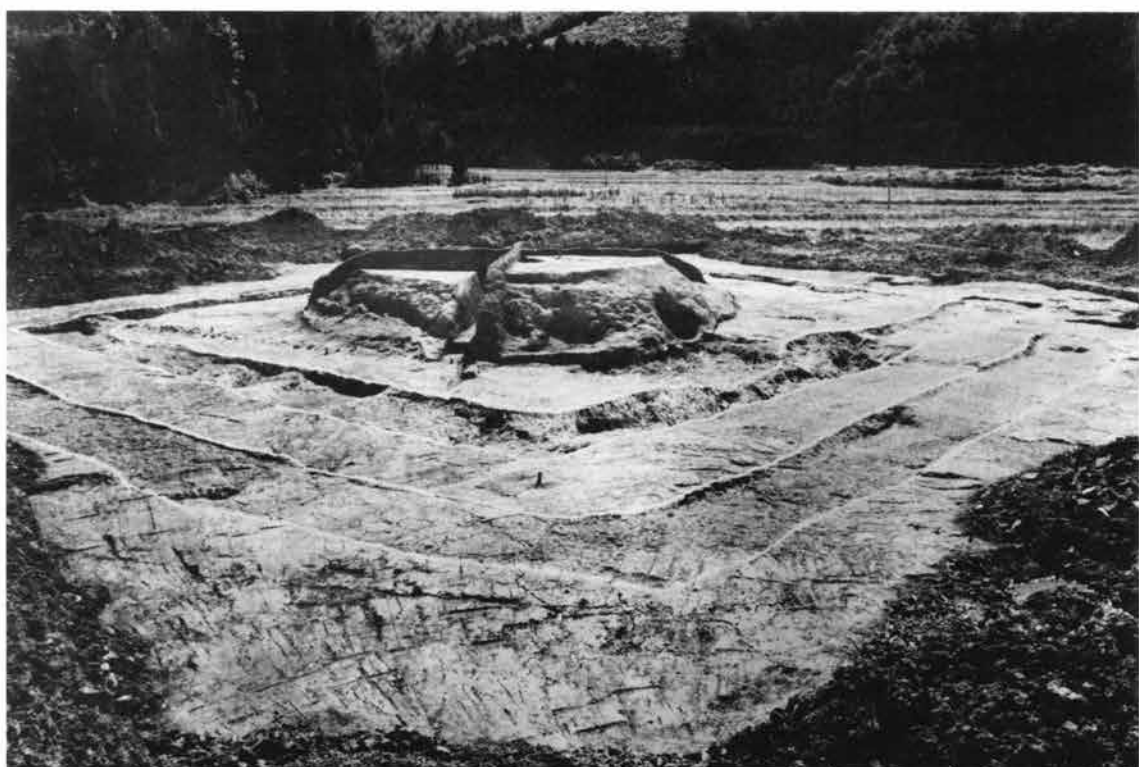
(1) 調査前遠景(北東から)



(2) 調査前全景(北東から)



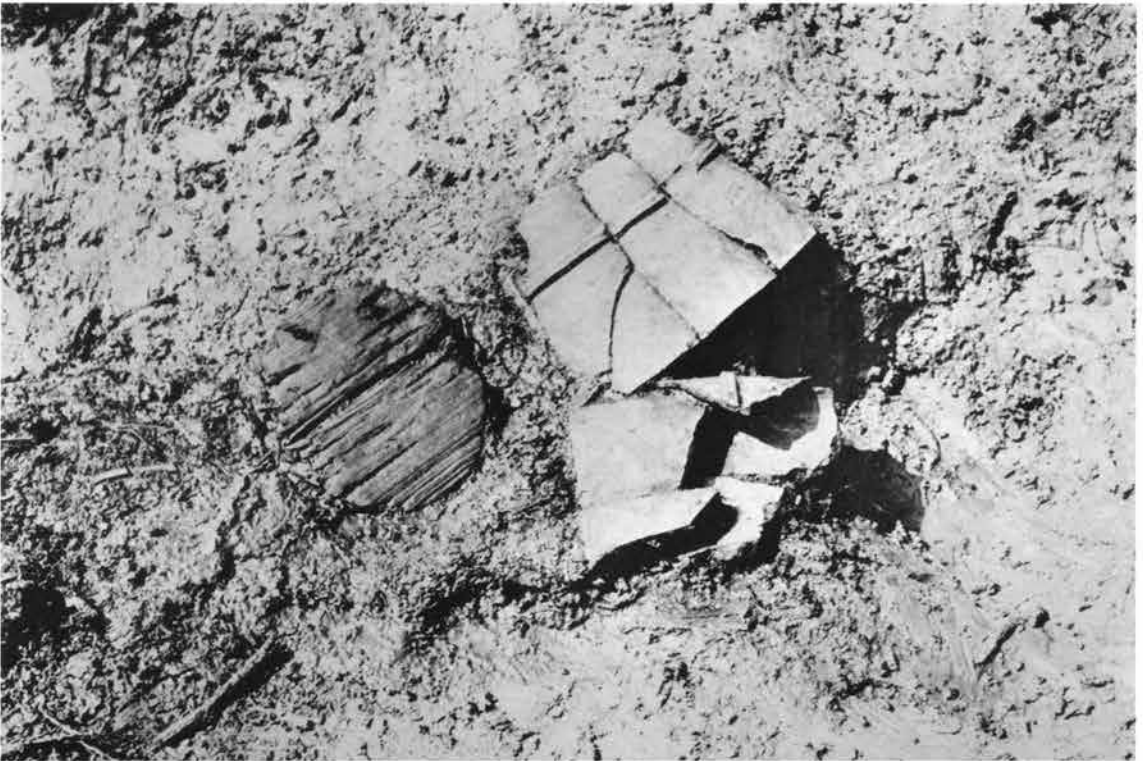
(1) 調査地遠景(南西から)



(2) 調査地全景(北東から)



(1) 周溝部分(北西から)



(2) 木製埴輪出土状況



1

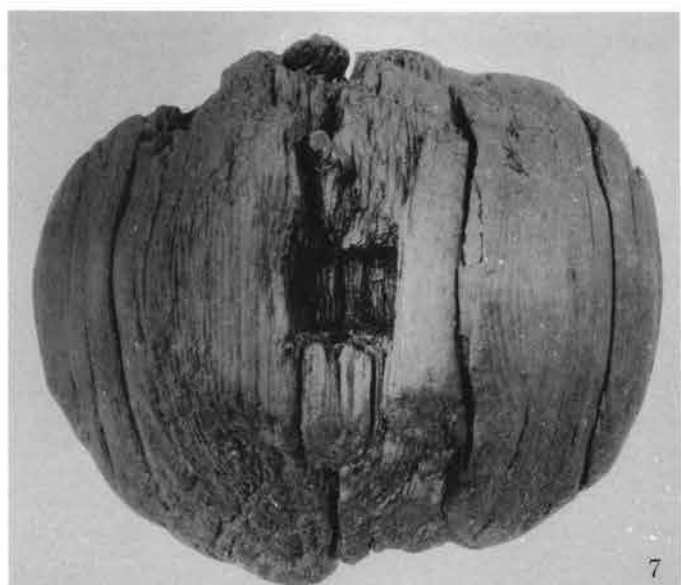


B



3

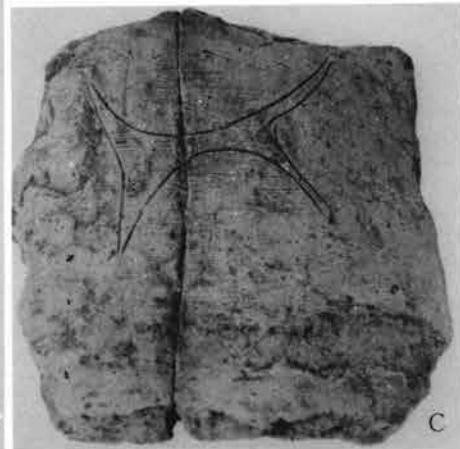




7



4・A



C

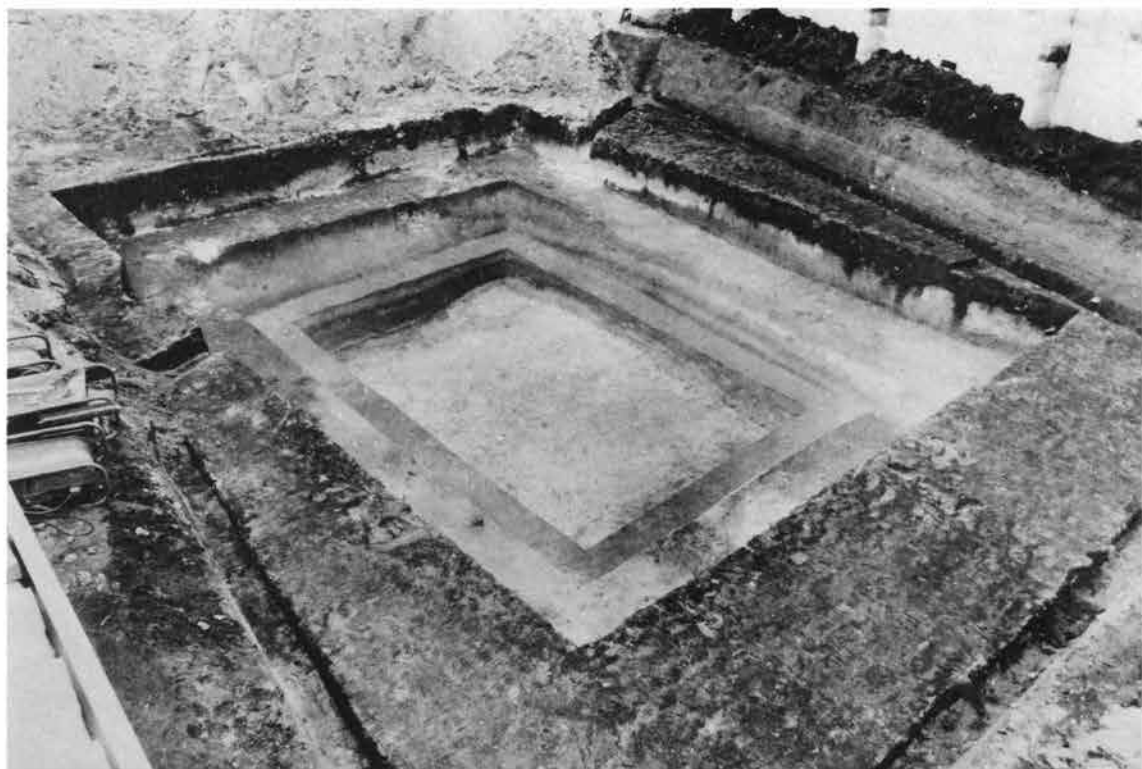
出土遺物(2)



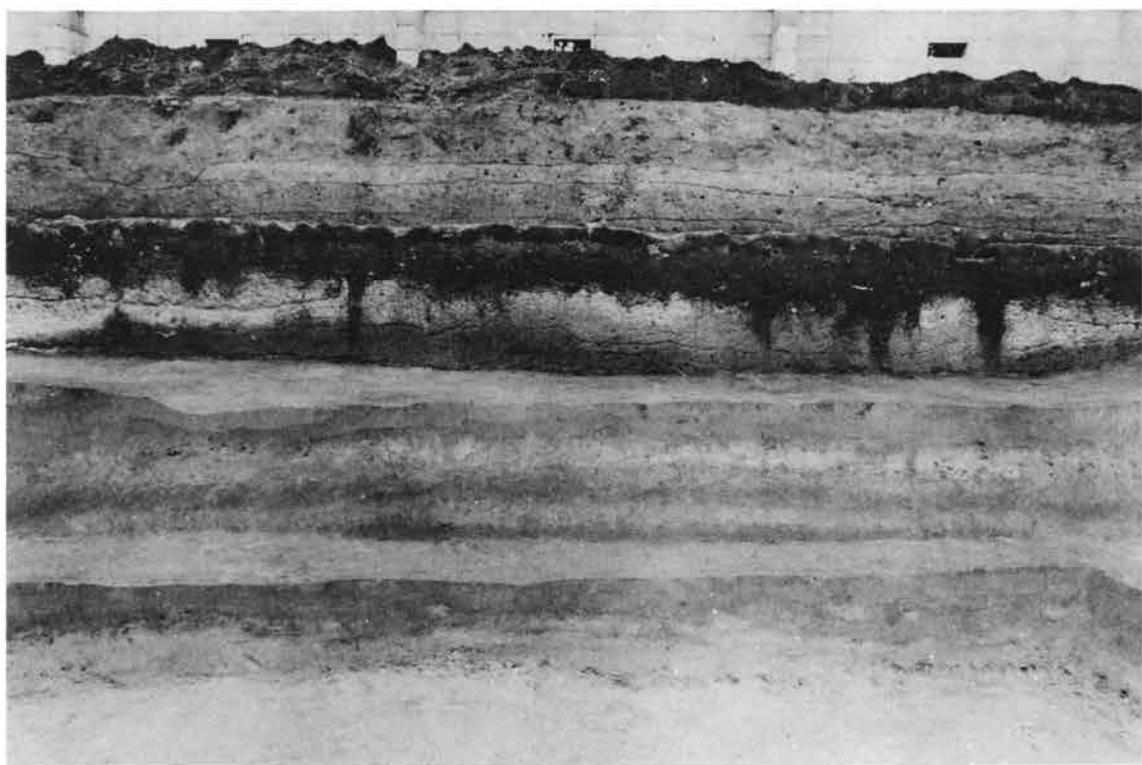
(1) 調査前風景(南東から)



(2) 黒色土上面遺構検出状況(南東から)



(1) 掘削終了後全景(北西から)



(2) 南壁断面(北から)



(1) A地区全景(南から)



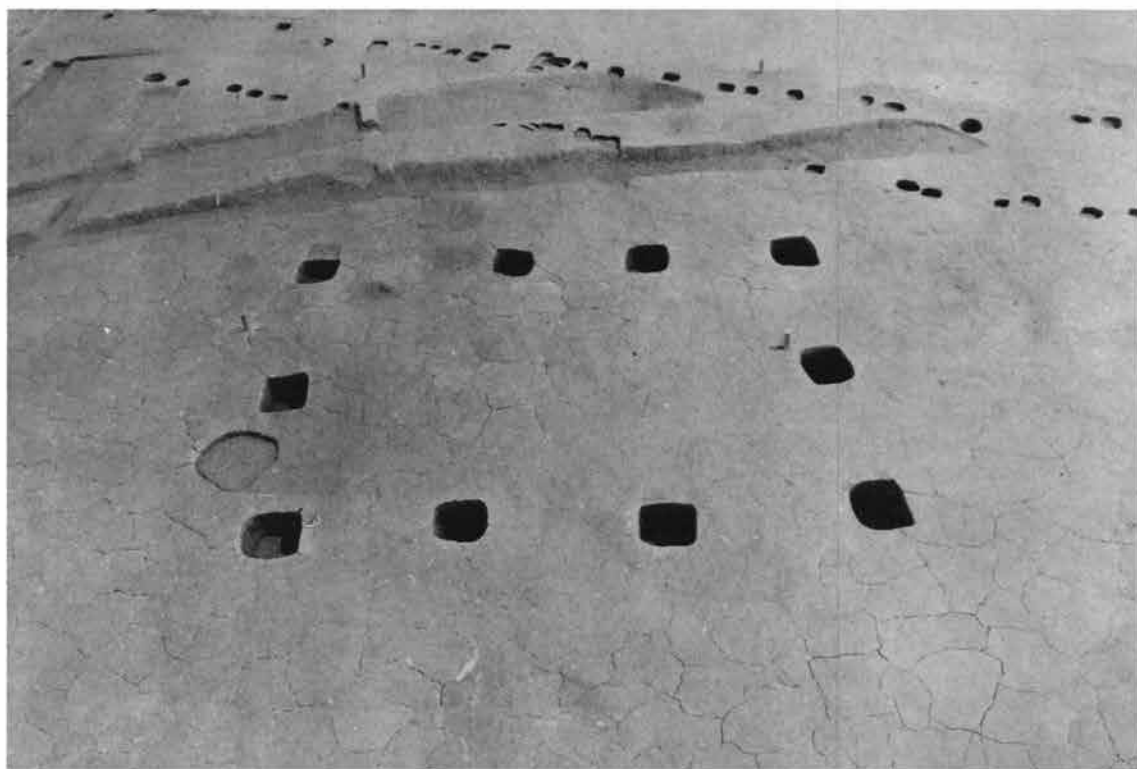
(2) A地区全景(北から)



(1) A地区総柱建物跡群(北から)



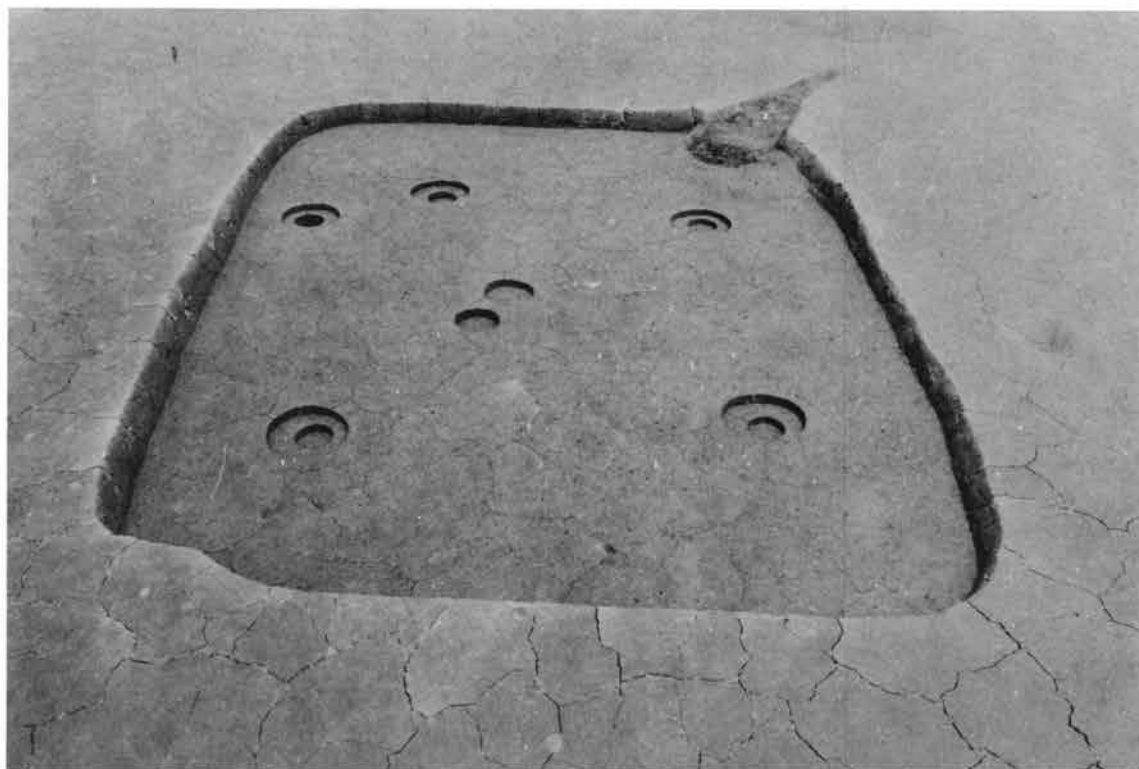
(2) S B03・05(南から)



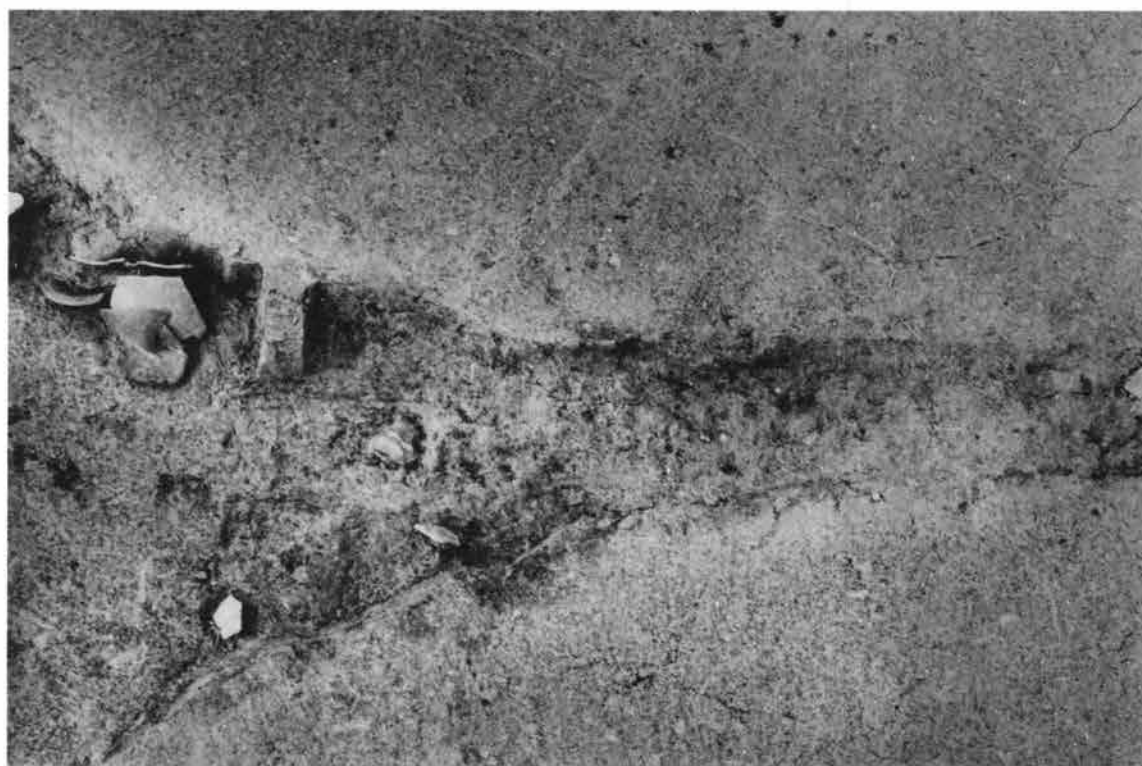
(1) S B04(北から)



(2) S E02(西から)



(1) SH01(南から)



(2) SH01 カマド内遺物出土状況(東南から)



(1) A地区南部足跡検出状況(西から)



(2) S D08遺物出土状況

京都府遺跡調査概報 第41冊

平成3年3月20日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

TEL (075) 933-3877 (代)

印刷 株式会社 中村太古舎

〒520 大津市京町三丁目4-32

TEL (0775) 24-4370 (代)